初めて明かされる！
サマワ帰還米兵,
イラク住民の劣化ウラン被曝

UMRCアサフ・ドラコビッチ博士講演会
in OSAKA　　2004年4月14日
イラクウラン被害調査緊急報告集会・記録

UMRCイラク・ウラン被害調査カンパキャンペーン事務局
アメリカの戦争拡大と日本の有事法制に反対する署名事務局

目　次

はじめに　*1*

第1部　サマワ帰還米兵, イラク住民の劣化ウラン被曝　イラクウラン被害調査緊急報告集会

主催者あいさつ　*7*

嘉指信雄氏（NODU広島プロジェクト）のアピール　*10*

UMRCアサフ･ドラコビッチ博士講演
「イラクとアフガニスタンにおけるウラン汚染」――放射能戦争が健康に与える影響――　*12*

第2部　米兵の劣化ウラン被曝の事実を明るみに出したスクープ記事

イラク戦争劣化ウラン情報　No.15
ニューヨーク・デイリーニュース・スクープ　*37*
［第１記事］　**おそらく州兵たちはアメリカのハイテク兵器の犠牲者であろう** 2004/4/3　*40*

イラク戦争劣化ウラン情報　No.16
ニューヨーク・デイリーニュース・スクープ（続報）　*43*
［第２記事］　**兵士達、健康上のリスクを知りたいと要求** 2004/4/3　*43*
［第３記事］　**問題の宿営地の中で** 2004/4/3　*45*

イラク戦争劣化ウラン情報　No.17
ニューヨーク・デイリーニュース・スクープ（続報最終）　*47*
［第４記事］　**陸軍はニューヨーク州兵部隊を検査する予定** 2004/4/5　*48*
［第５記事］　**州政府、兵士達の健康のためにひと肌脱ぐ** 2004/4/6　*51*

イラク戦争劣化ウラン情報　No.18
ニューヨーク・デイリーニュース・スクープのその後　*53*
Ｇ.Ｉ.達は軍にウラニウムの検査を受けたいと表明 N.Y.D.N 2004/4/19　*55*
クリントン、Ｇ.Ｉ.達の健康検査を後押し N.Y.D.N 2004/4/20　*56*
ヒラリーが将軍を追及、Ｇ.Ｉ.達が勝利 N.Y.D.N 2004/4/21　*57*
米国防総省のウラニウム否定 N.Y.D.N 2004/4/273　*57*
米国防総省：ウランはニューヨークの部隊に危害を加えなかった AP通信 2004/4/30　*59*
病気のＧ.Ｉ.達のはっきりしない事実 N.Y.D.N 2004/5/6　*60*

イラク戦争劣化ウラン情報　No.23
ＮＨＫ ＢＳ 世界のドキュメンタリー
「イラク 劣化ウラン弾被害調査――ドイツ人医師１３年の足跡――」 について　*63*
戦争の最も小さな犠牲者 N.Y.D.N 2004/9/29　*68*
劣化ウランによる汚染で英国人がハネウエル社を告訴に踏み切る Observer 2004/7/11　*70*

Military Medicine［168巻8号 2003年］から訳出
24時間尿採取と指数的崩壊解析に基づく、
湾岸戦争退役兵士における劣化ウランの吸入時での肺への取り込み量の評価　*72*
保証人：アサフ・ドラコビッチ
投稿者：アサフ・ドラコビッチ、パトリシア・ホラン 、レオナードAディエツ 、アイザック・ツィンメルマン

はじめに

(1)　この小冊子は2004年4月14日に大阪で行われた、ウラニウム医療研究センターUMRC所長のアサフ・ドラコビッチ博士の講演会の記録です。

ドラコビッチ博士の来日は2003年11月に続いて2度目でした。今回の訪日はアフガニスタンの第1次、第2次ウラン汚染調査に続いて、2003年9～10月にUMRCが行ったイラク市民の汚染調査の結果、サマワ帰還米兵の汚染調査等の結果を報告することが目的でした。

(2)　講演会の時期は、劣化ウラン反対に取り組んでいた北海道の今井さんや、高遠さん、郡山さんの3人がイラクの武装戦力に拘束され人質となった事件のまさに真最中でした。劣化ウラン反対運動の関係者、反戦の市民運動は、とにかくできることを何でもやって3人を救おうと必死になっていました。

折しも小泉政権は自衛隊イラク派兵への批判が高まることを恐れて彼らにすべての責任を転嫁する卑劣な「自己責任論」を押し出し、心労で倒れそうな家族をよってたかって袋だたきにしているところでした。政府の見殺し政策を許すな、イラクの民衆に直接働きかけよう、自衛隊撤退の声を強めようというのが私たちの気持ちでした。ドラコビッチ博士の講演会は国会議員会館（4月12日）、東京報告会（4月12日）、大阪報告会と開かれましたが、この状況の中で、国会議員会館で開かれた報告会では今井さんのお母さんに来て頂き、集まった議員、マスコミ、市民にアピールをお願いしました。東京報告集会では写真家の豊田直巳さんが人質を巡る動向と政府の「自己責任」キャンペーンの下で非常に強い圧力にさらされていた家族の状況を報告されました。大阪でもNODU広島プロジェクトの嘉指信雄さんがアピールされました。

その後私たちは、全国各地の市民の努力の結果、3人が無事帰国できたことを心から喜ぶとともに、極めて親日的であったイラクの人々をこのような状況に駆り立てている米軍の侵略と占領の不当性を糾弾し、これに加担する自衛隊の撤退の声をますます強めていこうと決意しました。

(3)　博士は講演のはじめに、UMRCの使命について「私の仕事というのは何もどこかの国に反対するとか、そういうものではなくて、人類の命を粗末にするいなかる人々、こういった人たちに反対して闘うということです。もし人一人の命でも救うことができれば、すべての人類を救うことと同じことだ」と語りました。続いて、「政治的にもまた、経済的にも自由な世界、そして苦悩のない世界の実現のために私は無知という大きな岩を何とか私の水の1滴で砕いていきたいと考えています」と話しました。一人の人間として、また科学者あるいは医師として、兵士や住民に深刻な被害を与えることをやめようとしない政府に対する怒りと誠実な彼の人柄、信念がよく伝わります。

ドラコビッチ博士の報告は、アフガニスタンでの第1次、第2次調査のショッキングな結果から始まりました。UMRCの現地調査チームはアメリカの空爆にさらされたアフガニスタンの人々が、これまで見たことが

ないような高い濃度のウランに汚染されていることを発見しました。爆撃地点の風下で湾岸戦争症候群に似た症状の患者が発生し、人々の尿の中のウランの濃度が跳ね上がっていたのです。現地で採取した水や土のサンプルもウランに汚染されていました。アフガニスタンで発見されたウランは劣化ウランではありませんでした。UMRCはこれを“非劣化ウラン（NDU）”と呼んでいますが、天然ウランと同じ同位体の組成で、人工で原子炉の中でしかできないウラン236を含んでいたのです。これは米軍が2種類のウラン兵器――対戦車用の劣化ウラン弾と貫通型の大型爆弾――を使用しており、ウランの組成が異なる可能性を示しています。アフガニスタンと、後で出てくるバグダッド等では主として大型爆弾が使われ、人々は非劣化ウランに被曝した可能性が高いのです。

ドラコビッチ博士のイラク調査に関する報告は非常に注目されました。4月4日にニューヨークで彼らが調査したサマワ帰還米兵のウラン汚染の事実がスクープで公表された直後のホットな時期だったからです。イラクに派遣された第442憲兵中隊の兵士が劣化ウランに被曝した事実は全米を揺るがしました。これまで米国では主要なメディアによって抹殺されていた劣化ウラン弾の危険性と被害が初めて大きく報道されたのです。アメリカでの人々の関心が兵士達の被曝に集中していました。

サマワから帰還兵した州兵9人中4人から劣化ウランが、7人から人工のウラン236が尿の中から検出されました。これらの兵士は体調を崩してイラクから国内に送り返されていました。米兵には様々な症状が出ており、米兵自身が劣化ウランへの被曝を疑っていたのに、米軍病院当局は劣化ウランへの被曝を確かめる調査さえを行わず、たとえ行っても、本人に結果さえ教えない非人間的な扱いを兵士らに行って来ました。業を煮やした兵士らが駆け込んだのがUMRCだったのです。そして彼らを診察し、調査を行ったがドラコビッチ博士でした。調査のスポンサーになったのは「ニューヨーク・デイリー・ニュース」という100万部の部数を持つ新聞社でした。この連携によって真実が明るみに出されたのです。

博士の報告の中でさらに以下のことが明らかにされました。（イ）彼らはイラク戦争が終わり、ブッシュが5月1日に「戦争終結宣言」を行ってからサマワに配備されました。つまり2003年6月から8月までのわずか2ヶ月間そこにいただけで被曝したのです。（ロ）後を引き継いだオランダ兵は、米兵のいた操車場の汚染がひどいため、そこへの配備を拒否し、砂漠の中にキャンプを設営したことです。

これらの事実から博士が強調したのは、こういう劣化ウランで汚染された環境の真っ直中に自衛隊は送り込まれたのであって、自衛隊員の被曝も避けられないと言うことでした。彼らを被曝させないためには、直ちに撤退させなければならない、と。

この結果は米国民だけでなく、米議会を揺るがしました。兵士達をまともに扱っていない、被曝しても検査もせずに放置しているという非難が政府に集中しました。ニューヨーク州選出のヒラリー・クリントン議員らが州兵らと面会し、議会で問題を取り上げ、軍当局に兵士らにUMRCが行ったような正確な検査をきちんと行うよう要求するまでになりました。この過程で、軍は「本人が被曝した可能性を主張し、検査を要求する場合、劣化ウランの検査をする」ということになっているのに、全くサボタージュしていた事実が明らかになりました。議会で追及された結果、米軍当局はあわてて病院にいた442憲兵中隊の残りの兵士の検査を行い、さらに他の兵士も希望すれば検査を行うと公表せざるを得ませんでした。1000人もの兵士が検査を申し出たと伝えられています。

しかし、兵士達の申し出は軍の不誠実極まるやり方でまたも踏みにじ

BLOODY SUNDAY IN IRAQ
8 GIs killed as nationwide riots erupt SEE PAGES 4-5
DAILY NEWS
NEW YORK'S HOMETOWN NEWSPAPER
URANIUM AMMO FUROR
ARMY TESTS THEM ALL
NEWS INVESTIGATION GETS RESULTS JUAN GONZALEZ PAGES 6-7

ニューヨーク・デイリー・ニュース　2004,4,5発行の表紙

られました。軍はUMRCの調査に比べてはるかに精度の劣る、しかも劣化ウランかどうかの判定に決定的な意味を持つ同位体検査を行わず、兵士の殆どを異常なしと追い返したのです。その中にはUMRCが検査した兵士も含まれていました。さらに、9月には別の部隊にいた州兵特殊部隊員のダレン・マッシューからも劣化ウランが検出され、軍の検査がいかにデタラメかを暴き出しました。(「戦争の最も小さな犠牲者」参照)。米政府と軍のやり方は全く変わっていないのです。

私たちを驚かせたのは、報告会でドラコビッチ博士がおそらく世界で初めて公表したイラク住民の調査結果でした。バグダッド、バスラ、ナッシリアで行った住民の調査結果は、住民が劣化ウランに被曝していることをはっきり証明しました。特にバスラで被曝している住民の割合は高く、調査した5人の住民のうち4人から劣化ウランが検出されました。バグダッドでも10人中一人ですがはっきり被曝した市民がいるとの結果が出ていると指摘しました。バグダッド等ではアフガニスタンで発見された人工のウラン236がやはり発見されています。

(4)　さらに驚いたことに、9月に劣化ウラン調査のために2週間イラクに滞在しただけのUMRCの調査チームのメンバーが被曝しました。チームのリーダーであるテッド・ウェイマン氏の尿からも劣化ウランが発見されたのです。米政府の言うように戦闘の最中に味方の劣化ウラン弾で誤射されたり、劣化ウラン弾で破壊された戦車に入った米兵だけが被曝する可能性があるという説明は全くのデタラメでした。私たちが恐れていたようにイラクの市民が広範に被曝している可能性があることが明らかになり、参加者にショックを与えました。

(5)　またこれらとは別に、2004年の10月、戦闘直後(2003年6月)のイラクに入ったNODU広島プロジェクトの調査結果について、住民の尿から劣化ウランを検出したと公表されました。現地の医師の協力を得て住民の尿を持ち帰り、バグダッドの患者の尿から非常に高い劣化ウランが検出されたのです。イラク戦争後にイラクに入って現地住民の調査を行った世界でたった二つだけの調査団――UMRCと広島の市民グループ――のどちらからも劣化ウランが検出された事実は、イラクの汚染が極めて深刻な状態にあることを示しています。

(6)　イラクの劣化ウラン汚染調査のためには、本来、国際機関による本格的な調査が必要であることは明白です。しかし、現実には戦争が終わって2年近くたつのにUNICEFもUNEPも何の調査もしていません。時間が経てばウランを尿から検出するのが難しくなります。戦争半年以内にイラク全土の10都市の市民の調査を行い、100サンプルもの試料(尿や水、土壌など)を持ち帰ったUMRCの調査は極めて貴重であったことが明らかになりました。アフガンについても事態は同じです。UNEPはアフガニスタンに戦後調査に入りながら、ウランの使用の疑いについての放射能調査を意図的に行いませんでした。このように国際機関が動かない、あるいはアメリカの圧力によって事態の解明ではなく隠蔽に手を貸しているときに、UMRCが行っている調査の意義はますます重要になっています。

UMRCの活動はすべてがボランティアと市民のカンパによって運営されています。現地調査は自分たちの資金で行い、サンプルの分析は市民のカンパによっているのです。残念ながら分析資金の問題があって、UMRCが採取した試料の分析は終わっていません。約半数のサンプルが分析できないままです。尿

サンプルのウラン分析は非常に精密な分析であり、1人分の分析に7～10万円もの費用がかかります。これらは世界中からの市民のカンパや寄付でまかなわれています。日本でもこれまでにイラクの調査費用のために約300万円ものカンパが集まり、UMRCに送金しました。しかし、それでもまだ半分の分析費用が足りないのが現状です。今後も引き続き皆さんにカンパへのご協力をお願いしたいと思います。（参照 http://www.jca.apc.org/stopUSwar/UMRC/umrc.htm）

ドラコビッチ博士は一番最初に湾岸戦争帰還兵の劣化ウラン汚染を発見し、さらにアフガニスタン住民のウラン汚染を明らかにし、さらに今回イラク住民、UMRC調査チーム、特に米兵士の被曝を明らかにしてきました。この科学的調査を進めれば進めるほど、ドラコビッチ博士とUMRCに対する政府や軍の圧力と迫害が強まっています。湾岸戦争帰還兵の調査をやめなかったために博士は97年に米軍を追われました。（博士は18年間米軍に勤務し、大佐の階級を持つトップクラスの軍医だったのです）。

今回もサマワ帰還兵のデータを公表するなという露骨な圧力が博士と新聞社にかけられ、訪日についても日本に行くなという脅迫があったと聞いています。博士達の科学的なデータそのものが否定できないので、何とかやめさせよう、もみ消そうと米政府や軍がうごめいているのです。博士の帰国後には、何者かがUMRCのインターネット・サイトをダウンさせようと攻撃をかけ、スパムメールが1日に5000通も送り込まれるなど嫌がらせが続いています。このような中で、毅然として真実を明らかにするために闘っている博士達の勇気ある取り組みに心から敬意を払いたいと思います。

何者も博士達の活動を止めることはできません。この1年近くの間に国際学会で博士達の調査結果は次々と公表されました。5月23日には、マドリードの国際放射線防護学会の11回総会でアフガニスタンの1次調査での市民のウラン被曝のデータが公表されました。7月には、アメリカの保健物理学会の49回年次総会でバグダッドとバスラの土壌汚染のデータが、8月25日には、ブダペストで行われた欧州放射線生物学会でサマワ帰還米兵のデータが公表されました。9月には、ヘルシンキでの欧州核医学学会でアフガニスタンの第2次調査のデータが公表されました。そして11月には、北米放射線学会でバグダッドとバスラ市民の劣化ウラン汚染のデータが公表されました。

この報告集の発刊が遅れた理由の一つは、4月に博士が日本で発表したデータの多くが学会ではまだ未発表で、これらがきちんと学会発表という形で公表されるのを待っていたためです。博士達の仕事に対して過激派だ、誇張だとの攻撃が米国防総省とこれと連動した一部の「反劣化ウラン活動家」からかけられるようになっているので、きちんと学会発表や雑誌発表の形でデータを公表し、いい加減な形での批判をできないようにしておく必要があると私たちは考えました。その結果、報告集の発行が非常に遅れ、皆さんにご迷惑をおかけしたことをお詫びしなければなりません。

（7） UMRCと博士の前進は、データを次々に学会で発表したことにとどまりませんでした。世界中で広く評価の声が高まっています。9月には米国内のソノマ州立大学のメディア研究グループ「Project Censored」（検閲されたことによって一般公衆に知らされにくい情報を評価するメディア研究グループ）の選んだ2003～2004年の「検閲された話題トップ25」の4位に「ハイレベルのウランが兵士と市民から発見された」として、その中にUMRCのアフガニスタン調査がノミネートされました。さらに、10月には反核の活動に対し

て授与される国際的にも権威ある「核のない未来賞(Nuclear-Free Future Award)」の教育部門を受賞し、ドラコビッチ博士はインドで授賞式に参加しました。この賞は「私たちの中心的な関心の一つは、ウランの致命的な影響について大衆の意識の覚醒に拍車をかけることである」とし、教育部門は「原子力エネルギーに突き進むことの危険を明らかにする事――政治家、科学者、および原子力産業の代弁者達によって毎日流布されたデマにもかかわらず――を支援する」人々、組織、あるいはイニシアチブに敬意を表して授与されるものです。まさにドラコビッチ博士とUMRCにふさわしい賞といえます。日本人では原発被曝労働者をとり続けてこられた写真家の樋口健二さんが2年前に受賞されています。

※ProjectCensored については http://www.projectcensored.org/publications/2005/index.html

※核のない未来賞については http://www.nuclear-free.com/english/frames7.htm

(8)　最後に、私たちはいかなる困難な中でも真実の追究をやめないドラコビッチ博士とUMRCの活動に、引き続き微力ながら支援を続けていきたい思います。この報告集を作ったのもその一環です。わずかなものですがパンフレットの収益(実費を除いた)はすべて分析費用に回したいと思います。また、皆さんにもUMRCの被害調査分析費用へのカンパを引き続きお願いします。

私たちはUMRCに限りない共感を寄せるとともに、日本で劣化ウラン／ウラン兵器の被害の暴露、その全面的禁止のために今後ともできる限りのことを行いたいと思っています。

昨年、文部科学省の所轄公益法人である「原子力文化振興財団」が、あたかも劣化ウランが安全であり、劣化ウラン兵器は「良い兵器」であるかのような宣伝を、マスコミ向けのプレスレリーズで行いました。原子力の権威を装う、しかも政府補助金と電力資本からの補助金で運営されるこのような団体が意図的にウランや放射能の危険性の過小評価を行い、核物質を用いる放射性兵器を容認、礼賛するような宣伝を到底許すことはできません。私たちは早速これへの批判を公表しました。この批判については国会でも取り上げられ、社民党の福島瑞穂議員から政府への追及が行われました。

また、サマワに派遣された自衛隊員についても政府は安全を保証する措置を何もとっていません。政府が持たせた線量計は微粉末で飛び回る最も危険な状態の劣化ウランを検出できないものです。彼らが米兵と同じようにウランを吸入したかどうか、誰にもわかりません。政府は隊員の安全には最大限の努力を払ったと言いながら、帰国した隊員達に何の検査もしていません。彼らが被曝したかどうかは尿の劣化ウラン分析を行わなければわかりません。そしてもし被曝していれば、何年、何十年も経ってその影響が出てくるのです。同位体検査を行っている英国はおろか、いい加減極まる米政府程度の検査も行っていない、文字通り何もしていない政府の無責任を引き続き追及していきたいと考えています。劣化ウラン被曝という一点だけからしても自衛隊はイラクから撤退すべきです。そして、米英の占領軍に軍隊を送って加担するのではなく、米英によって汚染されたイラクの被害調査、被曝調査、追跡調査と医療保障のための援助に切り替えるべきです。

私たちは、文字通り「一人の命でも救うことができれば、すべての人類を救うことと同じ」というドラコビッチ博士の信念を共に共有し、今後も劣化ウラン／ウラン兵器が全面的に廃棄されるまで、その危険性を暴いていく活動に全力を注ぎたいと考えています。皆さんのご協力・ご支援をよろしくお願いします。

※これまでの私たちの活動については、イラク戦争劣化ウラン情報をご覧ください。
http://www.jca.apc.org/stopUSwar/DU/stop_du_war.htm

2005年3月7日

アメリカの戦争拡大と日本の有事法制に反対する署名事務局

UMRCイラク・ウラン被害調査カンパキャンペーン事務局

吉田　正弘

第1部

サマワ帰還米兵,
イラク住民の劣化ウラン被曝
イラクウラン被害調査緊急報告集会

主催者あいさつ

本日はようこそおいで下さいました。平日の夜で皆さんお忙しい中、来ていただいて感謝いたします。私は、「アメリカの戦争拡大と日本の有事法制に反対する署名事務局」の中で、アサフ・ドラコビッチ博士率いるＵＭＲＣのウラン被害調査をサポートするカンパキャンペーンを担当している吉田正弘と申します。宜しくお願いします。

本来、今日の集会の趣旨から言いますと、すぐに博士の紹介をしまして今日の報告の中身についてご紹介をするところですが、もう皆さんご存じのように非常事態が起こっております。札幌で劣化ウラン弾反対運動をやっておりました今井さんを始めとして３人の人質がイラクで拘束されている、そして、命の危険が去っていないという状況にあります。このことについて一言、私の方からお話をさせて頂きます。

ドラコビッチ博士が来られたのは１１日でした。この日、博士を迎えに行く前に国会に寄りました。国会前では連日、集会がやられていて、政府に対して、人質の命を最優先するようにという要請がやられているんですが、東京は戒厳状態で機動隊が壁を作って入れない、という状態になっています。１２日に私たちは参議院議員会館の中で、博士の記者会見、それから議員向けのブリーフィングも兼ねて報告会を持ちました。その場に急遽、今井さんのお母さんの直子さんに来て頂き、彼女にメディア向けのアピールをして頂く機会を持ちました。

今井さんは、私たちが去年九月に広島の森瀧春子さんの講演会を大阪でやりましたが、その時に北海道からメールをくれまして、劣化ウラン問題に取り組み始めたので、是非、森瀧さんの資料が欲しい、と連絡してくれました。その後、森瀧さんと会ったりして、非常に活発に札幌で反劣化ウラン弾のために活動をしていました。私は、本職は高校の教師なんですが、これは本当に高校生かな？と思うぐらい超人的な精力で動き回って、活動をしていたわけです。そ

の彼が今度、イラクの劣化ウラン弾の被害を自分の目で見るためにイラクに行った時期は、丁度、米軍によるイラクへの攻撃の時期を重なりまして向こうの抵抗勢力に捕まってしまう、そして、命の危険にさらされるという状況になったわけです。

この問題を最初に申し上げるのは、日本でのメディアの取り上げ方が、非常に悪い、このことを皆さんに知って置いて欲しいからなんです。彼らが捕まって、三日間の猶予と言うことで、反劣化ウラン弾、戦争反対、あるいはイラク支援の活動家や市民たちは、必死の思いでありとあらゆることをやりました。写真家の広河隆一さんは、メディア関係に檄を飛ばして、ともかくアルジャジーラに日本の民衆の心、彼らはイラクのために行ったんだと伝えろ、と発信しました。色々な方がそのために動き始めました。名古屋に来られているイラク人の医師も動きましたし、メディア関係の方で様々なルートから働きかけて、彼らは敵じゃないんだ、イラクの人のためにやっているんだ、と必死で伝えたんです。それから、アタックという組織がありますけれど、ここもフランスにある世界社会フォーラムのイラク人のメンバーを通じて、イラクのスンニ派の中に、彼らは敵じゃないんだ、ということを働きかけました。実は、日本の市民が声を上げて、いろんな形でいろんなルートを使ってイラクに伝えたことが、三日間で殺すぞと言っていたのを撤回させた力なんです。彼

らが今、死なずにすんでいるのは、市民の力なんです。このことをちゃんと知って欲しいんです。そんなことはほとんど報道されていません。

それから、もっと腹が立つのは、政府の対応です。福田官房長官は、彼らが捕まってすぐに「自衛隊は撤兵させません」「撤兵させる理由がありません」と言った。これを聞いていて、これは殺して下さいと言うことなんだな、と私は感じました。政府の対応はまさにその通りです。人質を殺して下さい、自衛隊は引きません、と言う。こんな馬鹿な政府はないわけです。人質の命と引き替えに撤退を要求されているときに、こういう発言をしたことは、許し難いことです。

そして、日本政府は撤退しないだけではなくて、解決を米軍に委ねるという態度を取ったわけです。新聞はあまり書かないのですが、はっきりと頭の中に入れて置いて頂きたいことは、米軍に委ねるということは、抵抗勢力に殺されるだけではなくて、米軍に殺される危険がきわめて大きい、ということなんです。今までの人質事件で、米軍は人質が死ぬことは何とも思っていない。彼らが、「問題は解決した」というのは、誘拐犯たちを殺してしまうことです。それが成果なんです。その過程で人質が死のうが、彼らは関心がないんです。日本政府が、米軍にがんばって下さいというのは、要するに米軍が人質ごと犯人を撃滅して下さい、と言っているのと同じことなんです。そのことをはっきりと市民に知らせなければなりません。こんな馬鹿な政府はない。彼らは、毅然とした態度を取ったから向こうがひるんで、人質の解放を言い出した、と言っていますが、そんなことはありません。まさに市民の力が、アメリカ軍によって危険を増やそうとするのを何とかくい止めていた。市民が送ったメッセージで、我々は自衛隊を撤退させる方向で声を上げていくと言いました。これを実際にもっともっと強めていくことでイラクの人たちに応えなければならない。

それから、もう一つ取り上げなければならないのはファルージャのことです。ようやく最近新聞に出はじめました。ファルージャでは、４月の始めから大虐殺が行われています。３０万人ぐらいの都市なんですが、６００人殺したとも２０００人負傷したとも言われています。アルジャジーラのホームページを見ますと目も当てられない。小さな赤ん坊を含む死体の山がずらっと並べられている。女性も１００人以上が殺されている。３０万人の都市を包囲して、Ｆ１６攻撃機とか大砲で無差別に攻撃している。アメリカ兵も８０人死んでいます。去年の今頃、バグダッド陥落までに１００人ほどしか死んでいないわけですから、この１週間から１０日の間にイラク戦争に匹敵するぐらいの戦争がやられている、そして、大虐殺がやられているわけです。武装抵抗勢力は、米軍によるファルージャの殲滅作戦が止まらない限り、人質を解放しようにも解放することができない。人質を助けようと思ったら、アメリカ軍に戦闘を虐殺を止めろと日本政府が要求しなければならない。アメリカ軍ガンバレ、ではないんです。アメリカ軍がイラクの人たちを殺すのを止めさせなければ人質は助けることができない、ということをはっきりさせなければなりません。テロリストはブッシュなんです。そのことをはっきりと言わなければなりません。残念ながら、このことは伝えられていません。

最期に、人質の家族たちは体力の限界に達しています。政府は彼らに何の支援もしていませ

ん。何とか北海道の東京事務所が人道問題だということでタダで部屋を貸してくれていますが、いつ追い出されるか分からない状態です。そして、人質の解放ができるかなという時に政府が言ったことは、アンマンまでの飛行機は押さえた、航空券を人質の家族には一枚６０万円で売ってやるぞ、と。こんな馬鹿な話がありますか。体力的にもふらふらになって、財政的な支援もなくて、孤立をしながら、そして、２チャンネルとか右翼系のインターネットが無茶苦茶な扇動をしているのです。こんな状況を許してはならないと思います。

今日はドラコビッチ博士の話、私たちの本来の話から言いますとイラクの人たちの汚染調査をするために皆さんにカンパをお願いしたいわけですが、これと併せて、今、東京で非常にくやしい思いをしながら兄弟や子供が帰ってくるためにがんばっている家族のためにカンパをお願いしたいと思います。それを送り届けて、少しでも彼らの役に立ちたいし、彼らを応援したいと思います。もしいろんな形で手づるがある人がいましたら、イラクの方にあるいは中東の方に働きかけてできることはあらゆることをやって、何とか今井さんたちを助けたいと思いますので、よろしくおねがいします。

さて、ドラコビッチ博士のご紹介をさせていただきます。アメリカとカナダにベースを置いて、ＵＭＲＣ、ウラニウム医療研究センターという人体と環境のウラン汚染を専門に調査し明らかにしている世界で唯一の民間組織です。去年来日したときは、アフガニスタンがアメリカの攻撃によってどれだけウランに汚染されたか、第一次湾岸戦争の時に米兵自身がウランでどれだけ汚染されたか、というデータを持ってこられました。

今回のデータでは、９～１０月にＵＭＲＣのチームが２週間イラクに行って持って帰った住民の尿、バグダッドや南部のバスラの住民の尿からはっきりと劣化ウランが出ています。アメリカが使った兵器がこういう形でイラクの人たちの健康を害しているわけです。

サマワにいた米兵が、劣化ウランに被曝したニュースをご存じの方もおられると思いますが、ドラコビッチ博士の話では、この米兵がＵＭＲＣに駆け込んできた。身体の調子が悪いんだ、博士に診て欲しいんだ、と。ニューヨーク・デイリーニュースという１００万部を発行している新聞がスポンサーになって、この米兵たちの調査をやりました。そして、去年１０月に調査に行ったＵＭＲＣの３人のスタッフですが、２週間の調査で二人の尿から劣化ウランが検出されました。米兵、イラクの人たち、そしてスタッフから劣化ウランが出ているというデータは、世界で唯一のものです。これを皆さんに知って頂いて、これに対する抗議の声を広げて頂きたいと思います。

最期のアピールです。今、イラク人の調査をするのに一人７万円かかります。これは、ＵＭＲＣからドイツの大学に分析を依頼するのですが、分析費用としてこれだけのお金が必要です。アメリカ政府をはじめ他の政府はこんな調査をしていません。私たち民間の市民が支えるしかありません。日本ではイラクのこの調査のために様々な人が一口千円でカンパをしていただき、集まった２００万円以上を送金して支援しています。そして、日本からの支援がイラク調査で必要とされる資金の７割ぐらいをサポートしているようです。でも、去年持ち帰った１００サンプルの内５５サンプルしかまだ分析できていません。あと４５サンプルあるんですが、分析するお金がない。イラクでアメリカ軍がやった犯罪を明らかにするためには、是非この分析をやりたいと思います。後でカンパ袋を回しますので、皆さんに是非ご協力をお願いしたいと思います。

それでは、博士の講演の前に人質問題で動き回られていた嘉指信雄さんから一言だけ状況報告をお願いします。嘉指さんはＮＯＤＵ広島プロジェクトの主要なメンバーとして活動をされてきた方です。

嘉指信雄氏（NODU広島プロジェクト）のアピール

皆さんこんばんわ。広島でNO DUヒロシマ・プロジェクトの代表をしていました嘉指と申します。ドラコビッチ博士にこの間も広島に来て頂いて、非常に力のこもったお話をして頂きました。今日は、新しい調査結果を直接伺いたいと思います。

今現在の状況は、皆さんと同じで、３人の人質を含めて、これ以上無駄な死者が出ないことをただひたすら祈っているという状態です。自分たちにできることをしよう、ということで、広島にも来てくれたことのある今井君が、どんな活動をしてきたのか、と言うことを具体的に分かってもらえればと思います。例えば、広島アピールを手にしゃべっている今井君の写真をインターネットで世界各国に人に、特にアラブの人たち、イラクの人たちに知らせて下さいとお願いしたりしました。そういう呼びかけには、本当にびっくりするぐらい反応が返ってきます。

例えば、この間、ハンブルグで劣化ウラン兵器の会議があったのですが、その時に、被害者と言うことでカナダから参加されていたスーザン・ライオドンさんという方がおられます。彼女の話は、最近、東京のグループが出しました「劣化ウラン弾って何？」という冊子にも収録されているのですが、スーザン・ライオドンさんの夫が湾岸戦争に参加して、帰ってきてすぐ本当にまともに歩けないような状況になってしまい、亡くなっているのですね。そのことを訴えにはるばるハンブルグまでいらっしゃったのですが、スーザンさんもすぐにＥメールを下さいました――本当に言うまでもなく痛ましいことである、日本は本当にたいへんな過ちを犯している、と。原爆投下によって非常に強烈な高度の放射能被害者を出すという経験をしているにも関わらず、今は、低レベルの放射能に日本人をさらしてしまっている、と。そのことを重く受け止めるべきだし、また、今日届いたメールでは、スーザン・ライオドンさんもドラコビッチ博士を当然ご存知で、ドラコビッチ博士が今、日本に行っているから、日本政府はドラコビッチ博士の話に是非耳を傾けて欲しい、と書いて来ています。それで、今井君たちのことにつきましては、スーザンさんの表現では、イノセント、純粋な心を持った人、純粋な気持ちに駆られて、何かに自分を没頭させ、ひたむきに前進する人というのはそんなにいない、と。でもここに、日本の若者が劣化ウラン弾のことで行っている。彼らが純粋な気持ちで行動していると言うことを我々は受け止めなければならないじゃないか、というメッセージを送ってきてくれました。

嘉指信雄氏

もう一つ、海外からの反応と言うことで、アルゼンチンから――今日の資料にも入っていますが、事件が起きてすぐ、その当日の夜、東京のグループや札幌のグループと一緒になって、声明を出しました。それを英訳しまして、世界に流したのですが、本当にすぐアルゼンチンの方が返事を下さって、その方はこう言っています。日本は広島を忘れてしまったのだろうか？――「広島」というのは、もちろん象徴的な意味なんですが、そして、もちろん第二次大戦では日本は加害者でもあったわけですけれど――広島、長崎で原爆投下という、非常に筆舌に尽くしがたい悲惨な経験をしている、と。そういう国が、そして、例えば、イスラエルという国が、今、パレスチナに対して常軌を逸したような攻撃をしていますが、言うまでもなくユダヤの人たちも第二次大戦中は、強制収容という被害者の側に立って、そこから戦後を始めている。

イスラエルや日本のような国が今のような行動をしていたら、世界中の人たちは、人間というものに信頼を失ってしまう、と。その意味するところは、過去に非常に悲惨な経験をして、もうこんな経験はさせてはならないと思い知ったはずの人たちが、加害の側に立っているということ、つまり、どんなにひどい経験をしても人間は忘れてしまって、同じひどいことを加害者となって、他の人たちにしてしまう、と言うことを意味しているんだ、と。そういう日本の行動を見ていると、人間に対する信頼を失ってしまう。それは言い換えれば、人間が少しでも良い世界を作る能力がある、作っていくだろうと言う希望を失って行ってしまうことを意味する。だから、日本の皆さん、今、目を覚まして下さい。本当の意味での平和のために、働いて下さい、という本当に問題の核心を突いたメッセージを寄せて下さっています。

言うまでもなく、今、３人の命がかかって、大変な状況にあるわけですけど、そもそもなぜこういう状況になってしまったのか、ということを日本人は自分の頭で、テロリストの脅しからもアメリカの追随からも自由なところで、根本から考え直すことが必要だと思うんです。その時に、劣化ウラン弾の問題というのが鍵となると思います。劣化ウラン弾問題については、いろんなことがかなり前から言われてきたわけです。例えば、９・１１の直前にいろんな問題提起がされているのですが、外国のある記事のタイトルは―「ライ・オブ・ザ・ミレニアム」、つまり、劣化ウランを安全だと言っているアメリカ、イギリスは本当に信じがたいような嘘をついているのであって、それは、言ってみれば、一千年に一度しかないような大嘘なんだ、と。そんなに大きな嘘が通されてしまうことによって、世界中が途方もない悲惨の中に引きずり込まれつつあるんだ、と。

残念ながら世界は、日本は、今そんな状況になってしまっていると思います。「一千年に一つの大嘘」というのは大げさでも何でもありません。劣化ウラン弾の問題というのは、本当に深刻な問題だと思います。東京でもドラコビッチ博士は話されたわけですが、残念ながら主要な日本のメディアでは、あまり取り上げていないという状況があります。大きな嘘の中に我々は生かされているということが、露わになって来ていると思います。今日、ドラコビッチ博士のお話を伺って、できるだけ広く、日本の人たち、世界の人たちに知らせると言うことが、現在進行している状況についても大きな意味を決定的な意味を持っているんじゃないかと思います。」

"Uranium Contamination of Iraq and Afghanistan,and the Health Consequences of Radiological Warfare"
Asaf Durakovic　April 14 , 2004

4･14　UMRCアサフ・ドラコビッチ博士講演会 in OSAKA

初めて明かされる！ サマワ帰還米兵，イラク住民の劣化ウラン被曝

イラクウラン被害調査緊急報告集会・講演録

演題

「イラクとアフガニスタンにおけるウラン汚染」

――放射能戦争が健康に与える影響――

I

私はこの日本という美しい国に来るのは今回が２回目となります。こちらにお招きいただきまして本当に光栄に存じております。ただ、今ある状況がもっとよい状況であったらと、願わずにはいられません。

今日は皆さんと大変悲しいニュースをシェアしていかなければいけません。最近の私たちの調査、サマワの調査結果が出ています。ご存じのように自衛隊の送られている場所での調査結果です。いいニュースは何もありません。しかし、今回のこのプレゼンテーションの後に、世界に発信できるような、皆さんと共有の宣言をここの会場から出していけるのではないかと思っています。

私の今日のお話は、純粋に科学と医学に関するお話です。政治的なものではありません。政治的な話となると、みんなが議論をしだしまして、そして私の話に反論を突きつけたりするわけです。けれど、科学の話をすれば、これは数字で表れているわけですから、誰も否定はできないわけです。

そして私が今日お話しする事実は、アメリカ人、イギリス人、日本人、ポーランド人、すべての国籍の人々にあてはまります。人間というのは一緒でありますから、そういった国籍による違いはないわけです。私たちは皆同じ地球上に生きているわけで、地球の環境の中に生きているわけですから、運命をともにしています。そして私の今日の話は、われわれが今住んでいる環境における、危険性に関してのものです。

もしお許しいただけましたら、座って話させていただきます。というのは、私のコンピュータが今、この机の上にありまして、もし私がここのスクリーンの前で立っていたら、皆さんの注目がこのスクリーンのデータでなく、私の顔に集まって

しまうからです。それではいけないので、失礼ですが座って話させてもらいます。

私はここ１３年の間、人類に対する信じられないような危険に関しての研究をしてまいりました。１９４５年８月にあの悲劇が起こってから、世界は２度とこの様な悲劇を繰り返すまいと、そういう決意をしたわけです。そして１９４８年にジュネーブ条約が制定されまして、すべての戦場における、核兵器と放射性兵器の使用を禁止したわけです。しかしこのジュネーブ条約の宣言は、１９９１年に破られてしまいました。そしてこのとき私は世界で一番初めに、戦場で放射性兵器が使われたということを発信した１人だったのです。

II

まず私の話の一番初めは、イラクとアフガニスタンにおけるウランの汚染に関してのものです。

皆さんご覧の通り、私たちの組織は、UMRC(ウラニアム・メディカル・リサーチ・センター、ウラニウム医療研究センター)という名前ですが、この組織は世界で唯一、アメリカ政府、イギリス政府など劣化ウラン兵器を使用している政府に対抗して事実を発信しているところなのです。しかし、私の仕事というのは何もどこかの国に反対するとか、そういうものではなくて、人類の命を粗末にするいかなる人々、こういった人たちに反対して闘うということです。もし人一人の命でも救うことができれば、すべての人類を救うことと同じことだと、そういう風に私はとらえています。だれも理由なしに人一人の命を破壊するような権利はないわけです。

こちらにありますＵＭＲＣのロゴマークですが、上の方にラテン語が書かれてあります。このラテン語の意味は、「水１滴が岩をもうがつ」という意味です。そして、政治的にもまた、経済的にも自由な世界、そして苦悩のない世界の実現のために私は無知という大きな岩を何とか私の水の１滴で砕いていきたいと考えています。

III

それでは環境中に発散されたウランの汚染に関してお話ししたいと思います。

ウラン兵器によって放出された総放射能量

戦争	質量 (トン)	放射能 (Bq)
チャルノブイリ参照値		1.9×10^{18}
湾岸戦争	350	1.3×10^{13}
バルカン戦争	11	4.1×10^{11}
アフガニスタン	1000 (estimate)	3.7×10^{13}
イラク戦争	1700 (estimate)	6.3×10^{13}
Total	**3061**	**1.3×10^{14}**

して帰ってきたときに病気にかかりました。白血病の発症率が大変高い数値で出てきたわけです。２０００年に、私はイタリア政府に招待されてローマに行きました。私はイタリアのテレビで、バルカン半島で起きた戦争によって、このように兵士が病気にかかっているということに関して証言をしたわけです。そしてテレビでその番組が放送されるや否や、イタリア政府は何かしなければいけないということを意志決定したのですが、その３ヶ月後に政権が交代してしまいました。

９１年の湾岸戦争では、環境中に３５０トンのウランが発射されました。これはアメリカ政府の見積もりですが、たぶん実際の数値よりは低く見積もられているのではないかと私は考えています。

チェルノブイリは核エネルギーの歴史において最悪の事故でした。そしてこちらにベクレルという単位で巨大な数値が出ています。このベクレルという単位は、１秒間に１回の核分裂が起こる量を言います。１０の１８乗となっています。これはいかに大量の放射性同位体が環境中に放出されたか、ということを意味しているわけです。そして、まことに信じられないことですが、イギリス政府もアメリカ政府もこの人類が住んでいる地球上で、この様な大量の核種が拡散されたにもかかわらず、積極的に、そして確信犯として、いまだに人類の環境中への多大な影響を何とか否定しようと頑張っているわけです。

そして、９１年（湾岸戦争）にイラクで放出されたウランの量というのは３５０トンです。キログラムに直してもすごい数字になるのですが、今私がお話しするのは原子の世界の話です。原子というのはたとえば１マイクログラムのウランの中に何十億も含まれています。この何十億も含まれている原子が大気の中に入っていき、埃と一緒に混じっていき、それが人体に入っていくわけです。

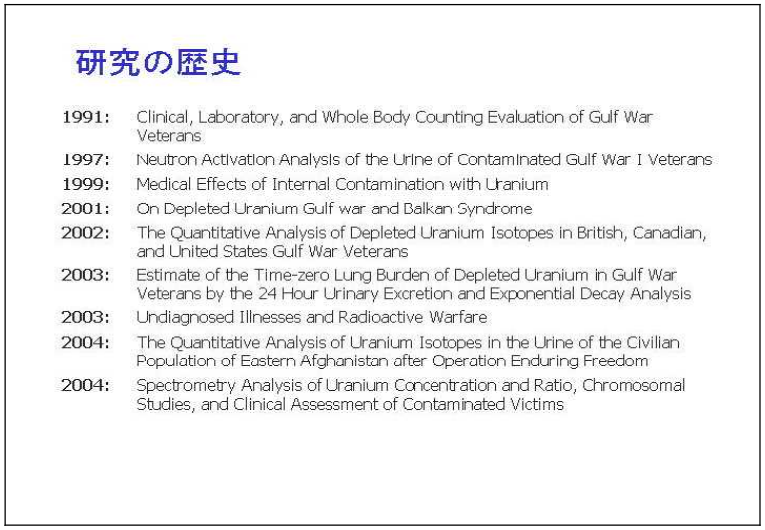
私はバルカン半島のアドリア海に面したところで生まれました。バルカン紛争では１１トンのウランが放出されました。イタリア兵がそこに従軍

イタリアのコルティーナという場所に研究所があって、そこが我々の研究に財政援助しようと言ってくれました。ところが財政援助の決定がなされた直後にコルティーナの研究所は閉鎖されてしまいました。そして、私の研究プログラムに参加しようと決めた医師たちは、すべて職を失ってしまいました。私のこの調査結果をまたさらに研究しようとした研究所も、閉鎖されてしまいました。私たちの研究所はカナダのニューファンドランド州のメモリアル大学というところにありましたが、ここではアメリカ、イギリス兵を対象に初の劣化ウラン分析を行ったのです。しかしそこも閉鎖されてしまいました。ニューファンドランド州で医療に１８年間従事しておりましたパトリシア・ホラン医師も解雇となりました。

そして、９７年に私も職を失いました。というのも、私がこのウランによる汚染に関しての仕事を止めることを拒否したからです。アメリカ政府が私を解雇した理由というのは、とにかく私にウランの研究をやめさせたいということでした。毎回私が研究をして、それを科学雑誌に発表すると、すぐ直後に政府の側からその研究報告を否定するような発表をぶつけてきていました。しかし、私は様々な国際会議で、そして科学的な雑誌で、研究報告をしています。こういったものは、政治的な力で止めさせるというわけにはいかないものです。そして我々のやってきた仕事は、科学の世界では、正しく評価されて受け入れられているので

す。

アフガニスタンに関していえば、かなり控え目に見ても１０００トンのウランが使われたと考えられています。つまり、１００万キログラムのウランがアフガニスタンの人々の上に落ちたわけです。たったオサマ・ビン・ラディン一人を排除するのに、１００万キログラムものウランが必要だったとどうして言えるでしょうか。



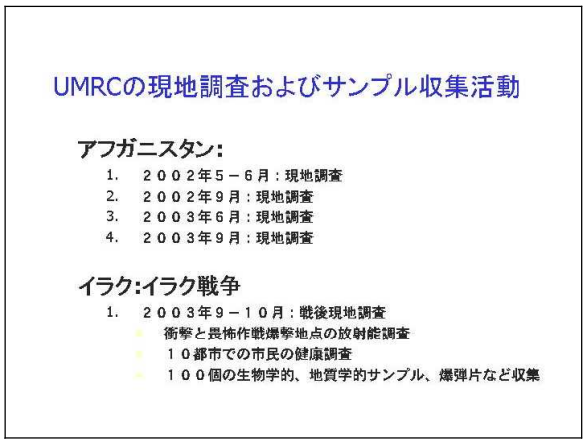
今度の第二次イラク戦争では、１７００トンの劣化ウランが使われたと考えられています。ほとんど市民が標的となってしまいました。女性、子ども、お年寄りを含んだ市民です。すべての人たちが無差別に攻撃されたといえます。ウラン兵器というのは無差別兵器であり、１９４８年にジュネーブ条約で既に禁止されている兵器です。これからまた、さらに悲しい話が続いていくのですが、これを聞いたら我々が今どういった世界に住んでいるかということを、皆さんがもう１度考えるきっかけになるのではないかと思っています。

こちらのスライドでは、ＵＭＲＣが行ってきた研究が具体的に年代順に書いてあります。こういった研究報告は、「Health Physics」、「Journal of Nuclear Medicine」「European Journal of Nuclear Medicine」「Military Medicine」「Radioactive Biology」などの大変著名な科学ジャーナルに載りました。私たちの研究所は、世界で唯一、完全に独立的に核兵器を研究している機関です。ウラン兵器に関する研究を全くどこの政府の援助も得ずにやってきております。私たちのような小さな研究所が、なぜ様々な国にある大きな大学ですとか、研究所が見つけられないようなことを発見してしまうのか、この意味合いを皆さん考えてください。

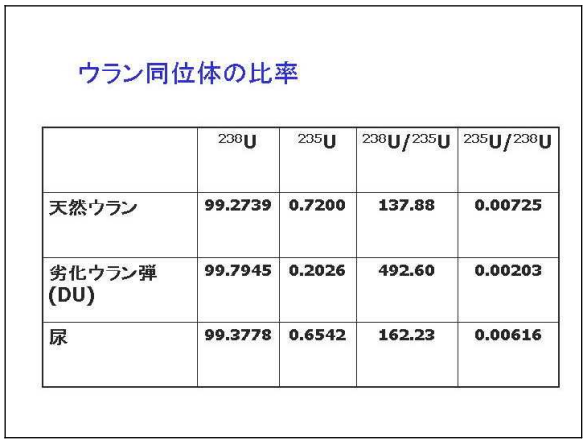
これに関する答えは大変単純なものです。彼らは真実を世界に知らせたくないのです。ものすごい巨額の、何億ドルものお金がウラン兵器の影響に関しての全く無意味な研究に使われています。カナダのある研究所では、百万ドルを使って、２００人の患者の調査をしました。２００人の髪の毛にどのくらいウランが含まれているかという調査です。医学生であれば誰でもわかっていることですが、ウランは髪の毛には集まりません。ですから私はカナダ政府の人に言いました。「あなたたちは、もしかしてウランとヒ素を間違っているんじゃないですか？ヒ素は髪の毛に行きますからね」と。

Ⅳ

アフガニスタンにはＵＭＲＣから現地調査チームを４回派遣しました。強調したいのは、この仕事に誰もお金を支払われていないことです。ボランティアでやっています。最低必要な現地での仕事をボランティアでやっておりまして、それで専門的なことをやっているんです。そしてこの場を借りて、日本の皆さんに、特に署名事務局の皆さんに感謝の意を述べたいと思います。皆さんのおかげで、ここ３年間私たちのこの活動は資金面でも何とかやってこれました。寄付金というのは、アメリカやカナダや他の世界のいろいろな国からも来ております。封筒に時には全く名前も書かずに送ってきてくれる方もいます。１０ドルとか２０ドルとかそういった金額です。お金のない人たちが、寄付をいろんなところからしてくれていますが、政府は全く何もしてくれません。



イラクには我々のチームを３回派遣しました。サンプルを取りに派遣したわけです。ウランの汚染度を空爆された場所で調査したのです。人の尿のサンプルをイラクの１０都市から集めました。去年１年間（２００３年）だけでも１００以上の生体的な（尿）、また地質的なサンプルを集めました。



ところでウランには様々な同位体があるということをお話しなければなりません。天然ウランではウラン２３８が９９．３％含まれています。そしてウラン２３５は、０．７％です。ウランの特質の最も大事なものの１つとして、ウラン２３８と２３５の組成比率があります。この組成比率は絶対に変化しないものなのです。それは宇宙における物理学的な定数なのです。天然ウランは必ずこの決まった比率を示すわけです。

では、劣化ウランとは何でしょうか。まず劣化ウランを作るには天然ウランからウラン２３５を抽出します。ウラン２３５は核兵器に使われたり、原子力発電所に使われたりします。そして劣化ウランの劣化とは正しい言葉ではありません。というのは、生物学的影響は劣化ウランになったからといって、劣化するわけではないからです。

私たちの所に来た患者の１人で、劣化ウラン弾が体の中に入ってしまって、傷口から劣化ウランを取り出さなければいけない人がいました。この破片の純粋な劣化ウランの同位体比率は４９２という数値でした。ウラン２３５に対するウラン２３８の比率が４９２となるのが純粋な劣化ウランです。

第一次湾岸戦争後に兵士たちの尿中の濃度を調べたところ、アメリカ、イギリス、カナダの兵士たちの尿からは劣化ウランの組成が検出されたのです。私はこのことをパリで行われた２０００年の核医学国際会議で発表しました。そこで私がプレゼンテーションをしようとする直前に、私はプレゼンするのを拒否されてしまいました。この国際会議の委員長をやっておりましたアシュケナージ医師という人が直接、私がプレゼンテーションしようとする前に、私のいた部屋に来て止めたわけです。しかし、その部屋には、ただの参加者だけではなくて、ジャーナリストやテレビのクルーの人数の方が多かったくらいいたわけです。そういったわけでプレゼンテーションは結局やられることになりました。そして、私のプレゼンテーションは、ヨーロッパの各メディアに特に大きく取り上げられました。

この事がイギリス、アメリカ、カナダでパニックを起こすことになってしまいました。こういった政府は、私の研究報告の信用を落とすことを画策したわけです。しかしながら、彼らはまもなくあきらめざるを得ませんでした。私は、１回だけでなく繰り返しやりまして、同じ結果が出たからです。そして、国際会議の前にクリントン大統領に手紙を書きました。この手紙の中で、「大統領閣下、今イラクから戻ってきている復員した兵士の中で陰謀めいたことが行われていますよ」と書きました。アメリカ政府内でも特別委員会が招集されて、私は議会の中でも２回証言しました。そして議員たちはこの陰謀に関して何かをしましょうと約束したわけですが、それ以後何も起こっていません。陰謀は今でも続いています。そして、その陰謀は私が話しているこの国にも広がっているようです。

人工ウラン特有の痕跡

	$^{238}U / ^{235}U$ 比率
天然ウラン	137.88
劣化ウラン	492.60
非劣化ウラン	137.88 ＋ ^{236}U

次のスクリーンを見ますと、この組成比率が、天然ウラン（ＮＵ）ではウラン２３５を分母としますとだいたい１３７．９くらいですが、劣化ウラン（ＤＵ）になりますと４９２になります。３番目のこの言葉を使うのは私が世界で初めての科学者だと思いますけれど、非劣化ウラン（ＮＤＵ）と呼ぶことにします。この非劣化ウランを見ますと、その組成は天然ウランと同じです。しかし興味深いものが含まれています。それはウラン２３６です。ウラン２３６は自然界には存在しません。これが何を意味するのかと言いますと、彼らは、ウランの比率を、いかようにも変化させることができるということなのです。この非劣化ウランは天然ウランではないということはわかるわけです。原子炉で出来るウラン２３６が含まれているからです。ですから非劣化ウランと呼んでいます。というのも人工的に作られたからです。次にお見せするとおり、すでにこのタイプのウランがアフガニスタンで使われました。

V

アフガニスタンのウラン汚染
Uranium Contamination in Afghanistan

アフガニスタンにおけるウラン汚染の結果ですが、放射能兵器を使った２つの違った種類の戦争が行われたことについて示します。１つは劣化ウランを使ったもの。もう１つは天然ウランではない非劣化ウランを使ったもの。この２通りがあります。この調査結果をお見せすると、皆さんショックを受けるのではないでしょうか。

我々が初めて現地調査を行ったのはジャララバードでした。ジャララバードはパキスタンとカブールの中間にあります。ここではタリバンやアルカイダを排除するために、大型爆弾が使われたのでした。しかしながら、この爆弾も効果的ではありませんでした。それは、今でもちゃんとタリバンもアルカイダも生き残っているからです。こちらにアフガニスタンの地図がありまして、ジャラ

アフガニスタン現地調査1
ジャララバード

ラバードがパキスタンとカブールの間にあること

アフガニスタンの地図

がわかります。合計７都市を調査し、非劣化ウランが使われた証拠を得ました。今年９月北京で国際会議が行われますが、アフガニスタンでの全体的な調査結果を報告することになっています。

この写真の右側の男性がスタッフの一人、テッド・ウェイマンです。後からお話ししますが、彼はウラン汚染の被害者となってしまいました。ここはジャララバードの郊外で爆弾が落とされて、クレーターとなってしまった所です。テッドがクレーターの真ん中や周辺で土壌サンプルを集めている写真です。

私はその調査結果を発表しました。その後、政府はここから出てきたウランはもとからアフガニスタンの土壌のなかにあったウランだというんです。それが本当だとすれば、この事実はどうやって説明するのでしょうか。テッドが集めたサンプルでは、クレーターの中心部では一番高くて周辺部より１０倍高いウランが検出されました。そして、ここから１キロ離れると、まったく低い値を示していました。

そこで、ＷＨＯ、ＩＡＥＡにどうか一緒に現地調査に来てくださいとお願いしました。ところが、彼らは拒否しました。一番目の理由が危険だから。二番目の理由として、安全な調査ができるように良い地点での調査をコーディネートしてくれなければできないと言いました。私は、ウェイマンはカナダ人でアフガニスタン人ではないけれど、アフガニスタンの人は丁重に扱ってくれて危険はないと言いました。私たちのスタッフはホテルとか、いいところには泊まらないのです。彼らはアフガニスタンの人と一緒に床に寝ます。地元のものを食べて地元の水を飲んでいます。しかしＷＨＯの人たちは５つ星のホテルに泊まっておいしいものを食べたいので、そういったいい地点が見つからないのでしょうね。彼らは、政府から資金が出ますが、私たちには政府からお金は来ません。

こちらはカレーズ、井戸で水のサンプルを取っているところです。アフガニスタンの村人たちが使っている井戸の風景ですけど、茶色の服を着て、しゃべっているのがテッドです。まるでアフガニスタン人のようになっています。

アフガニスタンの７都市で、高濃度のウランが、水からも、土からも、人の体からも検出されてしまいました。そして、サンプルをイギリスのノッ

アフガニスタン第１次調査:ジャララバード
尿中ウランの同位体比率

Sample	$^{238}U/^{235}U$	2 Sigma	$^{234}U/^{238}U$	2 Sigma	$^{236}U/^{238}U$	2 Sigma
1	137.65	0.15	5.53×10^{-5}	1.27×10^{-6}	4.61×10^{-8}	2.29×10^{-9}
2	137.09	0.18	5.43×10^{-5}	1.22×10^{-6}	6.67×10^{-8}	5.54×10^{-9}
3	137.55	0.19	5.55×10^{-5}	1.37×10^{-6}	9.60×10^{-8}	8.25×10^{-9}
4	137.95	0.15	5.44×10^{-5}	1.19×10^{-6}	8.91×10^{-8}	2.57×10^{-9}
5	138.08	0.15	5.45×10^{-5}	1.17×10^{-6}	2.17×10^{-9}	1.56×10^{-9}
6	137.98	0.16	5.44×10^{-5}	1.31×10^{-6}	2.65×10^{-8}	3.62×10^{-9}
7	137.82	0.14	5.62×10^{-5}	1.57×10^{-6}	7.79×10^{-8}	5.27×10^{-9}
8	137.86	0.14	5.63×10^{-5}	1.54×10^{-6}	7.35×10^{-8}	5.00×10^{-5}
Average	137.87		5.51×10^{-5}		4.97×10^{-8}	
Std Dev	0.20		8.20×10^{-7}		3.43×10^{-8}	
Std Error	0.07		2.90×10^{-7}		1.22×10^{-8}	

キンガムのキーワースという所にある研究所に送りました。ここはマス・スペクトロメトリーという質量分析器、世界で最も性能の高い機械があるところです。アメリカ政府にはこの種の機械が１００カ所以上の研究所にあります。しかしながら、我々のサンプルを受け取ってくれたところは１カ所もありません。アメリカ政府のどの研究所も、ウランの組成のわかる研究を１つとしてやりません。そして、アメリカのどの研究所も、どの大学もこの研究をやろうとしないわけです。というのは、カナダで民間グループのホラン博士がクビにされ、その研究所が閉鎖されたことを知っているからです。ですからクリントン大統領に書いた書簡、これは嘘でしょうか、本当でしょうか？　真実を隠そうとする陰謀があるわけです。そして、イギリスの研究所で結果が出たら、また新たに研究所を替えなければならなくなりました。今度私たちはイギリスの研究所で研究を続けることができなくなって、ドイツの研究所に頼まなければならなくなりました。

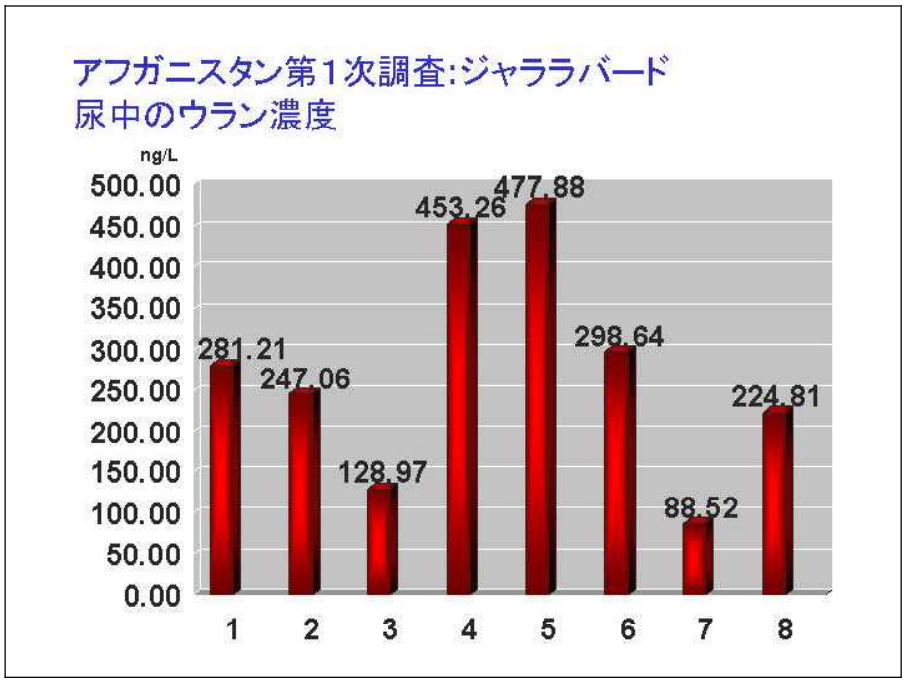
私たちがアフガニスタンの市民の尿を検査した時、アフガンの人たちは喜んだのです。ウランの組成が天然ウランの組成と同じだったからです。「ああよかった。アフガンの人たちはウランで汚染されていなかった」と安心したのです。しかし１つ大きな心配事が出てきました。というのは、このサンプルの中にウラン２３６が含まれていたからです。このことは、天然ウランではなくて、原子炉で１度利用され回収されたもの、回収ウランが入っているということを示します。おそらく天然ウランの組成比に見せかけようとしたものでしょう。

アフガニスタン第１次調査:ジャララバード
尿中ウランの濃度と同位体存在率

Sample	U ng/L	% ^{238}U	% ^{235}U	% ^{234}U	% ^{236}U
1	281.2	99.2733	0.7212	5.49×10^{-3}	3.67×10^{-6}
2	247.1	99.2757	0.7189	5.39×10^{-3}	6.63×10^{-6}
3	129.0	99.2727	0.7217	5.51×10^{-3}	9.53×10^{-6}
4	453.3	99.2750	0.7196	5.41×10^{-3}	8.84×10^{-7}
5	477.9	99.2756	0.7190	5.41×10^{-3}	2.16×10^{-7}
6	298.6	99.2751	0.7195	5.40×10^{-3}	2.63×10^{-6}
7	88.5	99.2741	0.7203	5.58×10^{-3}	7.73×10^{-6}
8	224.8	99.2743	0.7201	5.58×10^{-3}	7.30×10^{-6}
Average	275.0	99.2745	0.7201	5.47×10^{-5}	4.82×10^{-8}
Std Dev	137.8	0.0010	0.0010	8.14×10^{-7}	3.44×10^{-8}
Std Error	48.7	0.0003	0.0004	2.88×10^{-7}	1.22×10^{-8}

今私たち大阪にいます。大阪の人、誰の尿を取っても、ウランの含有量というのは１リットルあたり５から１０ナノグラムのはずです。この数字は、一般的な普通の環境にいる人のウラン全濃度の数字です。国際的な

標準を言えば、だいたい１リットルあたり１０ナノグラムです。しかし、ここの数字を見てください。１リットルあたりのナノグラムの数字です。アフガンの一般市民の人たちで、我々が調査をした時に既に大変体調を悪くしていた人たちは、１０ナノグラムではありませんでした。４５３という数字もありました。



これは、どこから来たのでしょうか、水からでしょうか、土からでしょうか。いえ、違います。というのは、ウランというのは消化器系からは、あまり吸収されないのです。これは大気中の放射能を帯びた埃を人が吸って、濃度が上がったと考えられます。その埃はバンカーバスターが作り出した埃です。そして、我々が驚いたことは、そして非常に残念なことは、ウラン２３６が大変な量で検出されたことです。ウラン２３６は人工的な放射性核種で、天然には存在しません。

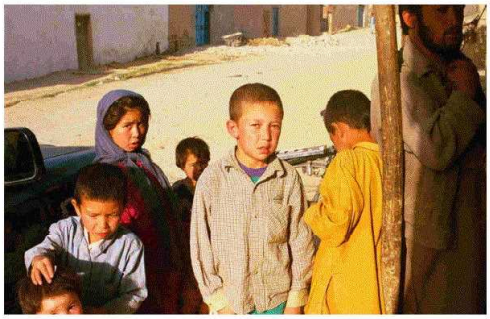
どうして、イラクからの帰還兵のウラン濃度は低かったのに、アフガンの市民のウラン濃度は極めて高いのでしょうか。イラクにおける戦争では、９１年の第一次湾岸戦争もこの間の第二次湾岸戦争も、ウラン弾の小型のものがたくさん使われた訳です。というのも、戦車戦がたくさんあり、対戦車用としてロケット弾の先端に比較的少ない量の劣化ウランが主に使われました。それに比べて、アフガニスタンでは、装甲車、戦車というのはあまりありませんでしたから劣化ウランはあまり使われず、１つの爆弾に１０００キログラム単位でウランが入っているような重い爆弾を、バンカーバスターとして洞穴を狙うために使った訳です。これが違った種類のウランを使った理由なのです。イラク戦争とアフガンでの戦争は、別種の戦争です。

ここでは私たちは８人の市民、具合の悪くなっている人たちを選んで研究を行いました。世界中の科学文献で、このような高いウラン濃度というのは、かつて見たことがありません。しかしながら、この結果報告の後でもアメリカ政府は、我々の研究結果は間違った結果を引き出していると攻撃してきました。彼らが言うには、アフガニスタンの土や水はウラン濃度が高く、この数字は全部自然のアフガンの土や水から来たものだと言うのです。しかし、私たちはアフガンとアジアのウラン濃度の地質調査を広くおこなったことがあります。それによると、そういった事実はまったくなく、唯一高いウラン濃度が検出されたのは、タジキスタンのある湖の近くで、その湖の近くにはウラン鉱山があるので高い数値を示しましたが、そこでもここまでは高くはありませんでした。それに、もしアフガニスタンの土に多くウランが含まれているというのならば、なぜ爆心地の濃度が高く、そしてそこから２キロ離れれば普通のレベルで出てくるのか、ということです。ですから、これは真実に対する戦争であるということです。

VI

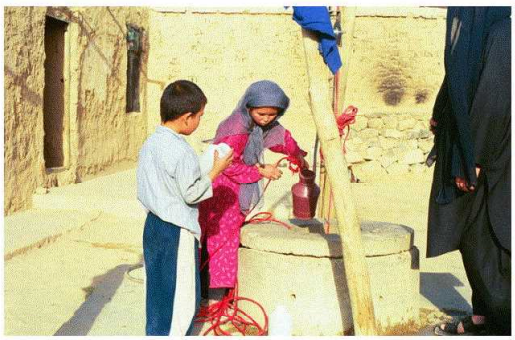
アフガニスタン第2次現地調査
カブール

ビビ・マハローでの住宅に対する爆撃で
生き残った子供たち



我々は現地調査の第２弾目としてカブールに行きました。そこで我々は両親を亡くした子供、孤児に出会いました。爆弾で亡くした訳です。これは東アフガニスタンにありますビビ・マフロウという所なんですが、このビビ・マフロウで、子供たちが井戸水を汲み上げて水のサンプルを取ってくれています。傍らに立っているのはテッドです。

ビビマハローで検査のために
水をくむ子どもたち



そして、こういった爆弾は洞穴にだけ使われたのではなく、建物にも使われました。これは空爆

巡航ミサイルで破壊された
軍事基地の近くのモスク

されたモスクです。軍事基地が近くにありました。ウランを含む誘導ミサイルによって爆撃され、激しく汚染されました。

アフガニスタン第2次調査:カブール

同位体比率

Sample	$^{236}U/^{235}U$	2 Sigma	$^{234}U/^{238}U$	2 Sigma	$^{236}U/^{238}U$	2 Sigma
1	127.32	1.91	5.79×10^{-4}	5.21×10^{-4}	7.0×10^{-6}	3.3×10^{-6}
2	130.52	0.69			5.4×10^{-8}	5.7×10^{-9}
3	138.93	0.75			2.8×10^{-8}	3.3×10^{-8}
4	137.72	0.96	7.20×10^{-5}	4.75×10^{-5}	2.3×10^{-6}	3.1×10^{-7}
5	137.74	0.74			1.8×10^{-7}	1.8×10^{-8}
6	137.91	0.06				
7	137.97	0.94	5.70×10^{-5}	1.71×10^{-5}	9.4×10^{-7}	1.2×10^{-7}
8	138.26	0.94	6.20×10^{-5}	5.33×10^{-6}	2.5×10^{-6}	9.0×10^{-8}
9	138.50	0.69			9.2×10^{-7}	4.6×10^{-8}
10	138.47	0.75			2.7×10^{-8}	4.1×10^{-8}
11	138.58	0.69				
12	138.68	0.69			1.5×10^{-7}	1.1×10^{-8}
13	138.27	0.69			4.9×10^{-8}	1.0×10^{-8}
14	138.70	0.72			7.1×10^{-8}	3.3×10^{-8}
Average	137.54		1.93×10^{-4}		1.2×10^{-6}	
Std Dev	2.96		2.58×10^{-4}		2.0×10^{-6}	
Std Error	0.79		1.29×10^{-4}		5.9×10^{-7}	

ジャララバードはカブールから数百キロ東へ離れている所ですけれど、カブールの調査でもまた、我々は再び同じ調査結果を得た訳です。つまり組成が全く天然ウランと同じで、プラス、ウラン２３６が高レベルで検出された訳です。もし政府の言っていることが正しければ、なぜこのような、人によってウランの濃度が色々な数値であるんでしょうか。

［次ページ上の表］一番上の人を見てください。この人は空爆された所から３キロ離れた所に住んでいました。１リットルあたり１０ナノグラムにも満たない数値となっています。ところが、この

アフガニスタン第2次調査:カブール

濃度と同位体存在比

Sample	U ng/L	% ^{238}U	% ^{235}U	% ^{234}U	% ^{236}U
1	1.1	99.1631	0.7788	5.74×10^{-2}	6.94×10^{-4}
2	94.1	99.2833	0.7167		5.36×10^{-6}
3	25.8	99.2853	0.7147		5.36×10^{-6}
4	10.9	99.2718	0.7208	7.15×10^{-3}	2.28×10^{-4}
5	40.2	99.2792	0.7208		1.79×10^{-5}
6	2031.6	99.2801	0.7199		
7	29.9	99.2747	0.7195	5.66×10^{-3}	9.33×10^{-5}
8	99.6	99.2755	0.7181	6.16×10^{-3}	2.48×10^{-4}
9	57.5	99.2831	0.7168		9.13×10^{-5}
10	74.8	99.2830	0.7170		2.68×10^{-6}
11	44.3	99.2836	0.7164		
12	90.0	99.2840	0.7159		1.49×10^{-5}
13	39.6	99.2820	0.7180		4.87×10^{-6}
14	33.1	99.2842	0.7158		7.05×10^{-6}
Average	190.9	99.2723	0.7221	1.91×10^{-2}	1.18×10^{-4}
Std Dev	530.7	0.0317	0.0164	2.56×10^{-2}	2.02×10^{-4}
Std Error	141.8	0.0085	0.0044	1.28×10^{-2}	5.82×10^{-5}

アフガニスタン第2次調査:対照群

同位体比　濃度と同位体存在比

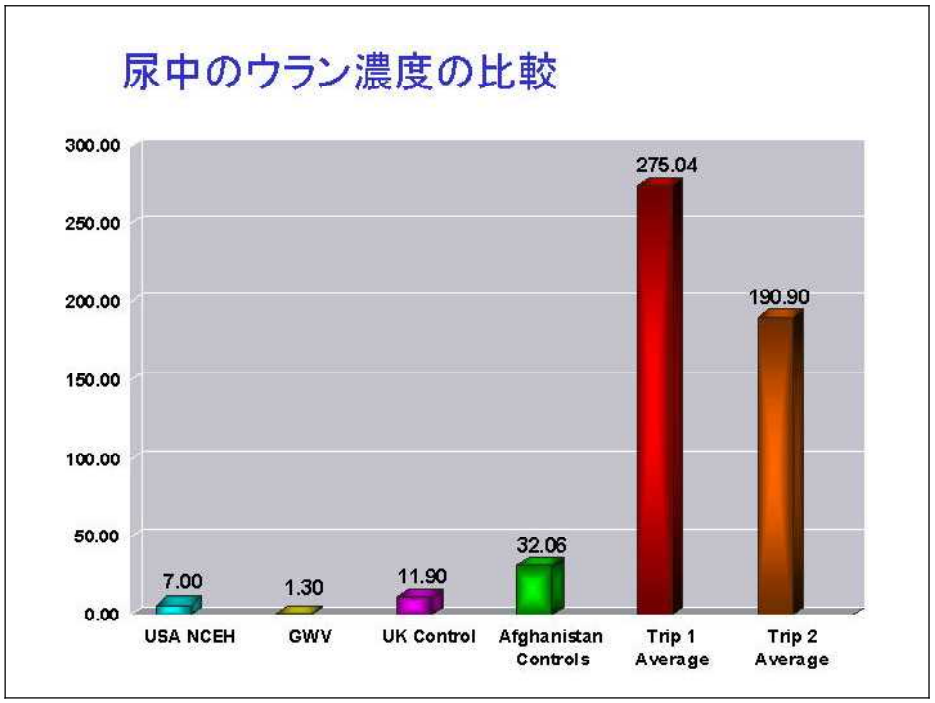
Sample	^{238}U/^{235}U	2 Sigma	^{234}U/^{238}U	2 Sigma	^{236}U/^{238}U	2 Sigma
1	138.97	0.94	6.30×10^{-5}	8.57×10^{-5}	5.90×10^{-6}	1.30×10^{-7}
2	139.10	0.72			2.60×10^{-7}	2.60×10^{-8}
3	137.44	0.96	6.30×10^{-5}	5.42×10^{-5}	2.20×10^{-7}	3.37×10^{-7}
Average	138.50		6.30×10^{-5}		2.13×10^{-6}	
Std Dev	0.92				3.27×10^{-6}	
Std Error	0.53				1.89×10^{-6}	

Sample	U ng/L	% ^{238}U	% ^{235}U	% ^{234}U	% ^{236}U
1	59.9	99.2787	0.7144	6.25×10^{-3}	5.86×10^{-4}
2	26.8	99.2862	0.7138		2.58×10^{-5}
3	9.5	99.2714	0.7223	6.25×10^{-3}	2.18×10^{-5}
Average	32.1	99.2788	0.7168	4.17×10^{-3}	2.11×10^{-4}
Std Dev	25.6	0.0074	0.0048	3.61×10^{-3}	3.24×10^{-4}
Std Error	14.8	0.0043	0.0027	2.08×10^{-3}	1.87×10^{-4}

男の子の数値を見てください。２０００ナノグラムを超えていますね。この子はどこにいたかというと、さっきの１０ナノグラムの人の家から５キロも離れていない所に住んでいたのです。そして彼は、彼の村で空爆が起きた時、村から１０キロ離れた山で羊を追い立てる仕事をしていました。ところが空爆が始まって、そして彼の村が攻撃されていると、彼が急いで山を下りてきて家に帰ってみたら、家族がやられていた。たった一つの爆弾によって彼の家族の１８人が死亡したそうです。彼は泣きながら爆心地のクレーターの中に入っていって、瓦礫の中から兄弟たちの遺体を泣きながら引っ張り出したそうです。このアフマッド君ですが、過去のどんなイラク報告、研究、雑誌の中でも、このような数値というのは見たことのないものです。

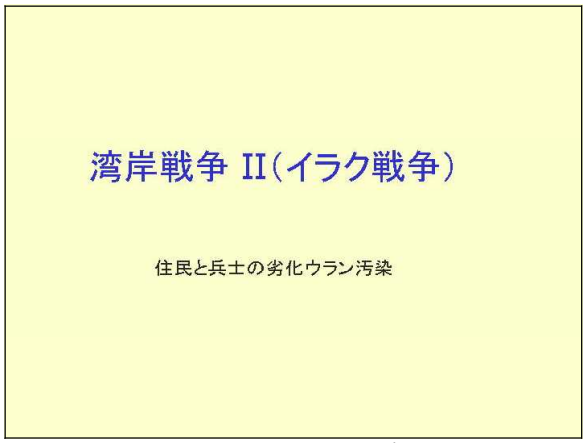
そしてこの発表をした後も、アメリカ政府は、私たちに対して、あなたたちはまた間違ったことを言っていると攻撃をしてきました。例えばアメリカのノースカロライナ州では、全く普通の人から高いウランのレベルが検出されているというような話を持ち出してきた訳です。しかし彼らの言ったこともまた間違いがあります。というのは、２５年前にノースカロライナのグリーンズボローという町の郊外で飛行機事故がありました。この飛行機は実は２つのウラン兵器を搭載しており、それごと落ちた訳です。ですから北米でも実は核兵器というのは使われてしまったことがある訳です。この場合は戦闘機に積まれた核兵器が墜落して落ちて、まあ核爆発はなかったんですけれど、ウランが拡散して核汚染があったということです。

［左下の表］これは、アフガニスタンにおける疫学的な調査による対照群の人たちの総ウラン濃度で、先程の人たちほどは高くないです。



次のスライド、これはおもしろいのですが、この図を見ますと、左側がアメリカの国立環境保健研究所が発表しているアメリカ人の平均的なウラン濃度のレベルで７ナノグラムぐらいですね。２番目が湾岸戦争で復員してきた兵士の値ですが、これが１．３ナノグラムになっています。そして、イギリスが１１ナノグラム、アフガニスタンが３２ナノグラムになっていまして、最後の２つの飛び抜けて高いバーが、私たちがジャララバードとカブールで検出してきた結果です。これは私が今さら言葉で説明することもないことですけれど、外部からの何らかの原因によってこれだけ高いレベルで汚染されたと言えます。最もありそうなのが山岳の洞穴やバンカーに対して用いられたウラン兵器なのです。

Ⅶ



皆さんお疲れになってなければといいと思いますが、これからが皆さん日本の方たちとも直接関わることですので。というのは、自衛隊を送っているサマワの研究報告も入ってくますからね。どういう影響があったかということも出てきます。そしてこの第二次湾岸戦争の調査をするのには、様々な障害、嫌がらせがありました。そういった障害を乗り越えて、やっとの思いでやって来た研究の結果です。

我々はイラクの１０の都市で調査を行いました。バクダッド、カルバラ、クーファ、ナシリヤ、サマワ、バスラ、ウンムカスルなどで、生体のサンプル（尿など）と環境のサンプルを取ってきまし

た。

こちらはミサイルから発射された劣化ウラン、貫通弾です[次頁上段左]。これが攻撃目標に当たりますと大変な高熱、５０００度もの高熱を発します。そしてこれが起きますと、１ミリグラム当たり、先程申し上げたとおり何十億もの放射性の元素が拡散されていく訳です。

こちらは私たちのチームメンバーのサラ医師です。彼が今見ているのは、イギリス軍が劣化ウラン弾を貫通させた戦車です[上段右]。

こちらは、バクダッド国際空港の郊外にある、やはり破壊された戦車です。汚染は大変高いものでした[中段左]。

こちらは、バスラとバクダッドの間の砂漠の中にあったバス停留所ですが、破壊された戦車の上に標識が立っています。並んでいる人たちは、戦車の表面に高いレベルの汚染があるのを知らずに、バスを待っている訳です[中段右]。

こちらは、戦車を劣化ウラン弾が貫通して出ていった跡です[下段左]。劣化ウラン弾というのは金属をたやすく貫通しまして、それはまるで、ナイフでお餅を突き刺すような感じです。ですから、

対戦車戦の兵器としては、大変良い兵器です。そしてもちろん、普通の人たちの健康にとっても、大変影響が大きな兵器である訳です。

こちらの水タンクも汚染されています[下段右]。製氷工場に劣化ウランが飛び込んだのです。

こちらは、戦車の前の道路にたくさん穴があいているのですが、攻撃ヘリコプターからこの戦車を狙って劣化ウラン弾を発射したと見られます。そしてこの穴の１つ１つに、高濃度のウラン汚染が見られました。

Ⅷ

バクダッドはイラクの他の地域とはまた事情が違いまして、バクダッドでは大型爆弾ばかりが使われました。そして、劣化ウラン弾ばかりではなくて他の爆薬が入った爆弾も使用されていました。というのも、建物を破壊するのに劣化ウランというのは必要ないのです。劣化ウランは、金属を貫通させるのに、つまり対戦車などに必要となってくるものです。

しかし、ここマンスール地区[上段右]で、劣化ウランの使用された爆弾を私たちのチームは廃虚となった家屋の中で発見しました。

そしてこちら、アル・ラシッド空軍基地のレーダーステーション[下段左]でも、劣化ウランが使われていました。

こちらはバクダッドの中央市場[下段右]ですが、ここでも使われていたのです。子供たちはこの残骸のところで遊んでいた訳です。医師として言えば、子供たちはこの現場に近づいてさえいけないのです。

バグダッド中央市場

こちらは、バクダッド中央市場でのバンカーバスターによるクレーターです[上段左]。

そして、バクダッドのテレビ局[上段右]も、劣化ウラン弾で完全に破壊されています。

バンカーバスターの
クレーター

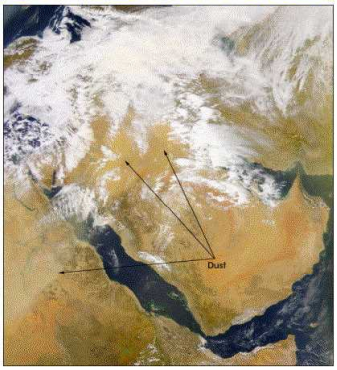
バグダッド中央市場

ラジオとテレビの
放送局
（バグダッド）

IX

なぜ我々は、多くの人に劣化ウラン弾の危険性というものを言わなければならないのでしょうか。それは、劣化ウラン弾というのは、攻撃地点だけではなくて、空気に乗って拡散していくという性質があるからです。２年ほど前、軍事医学に関する国際会議がカタールのドーハで行われまして、

アラビア半島全域にかかる砂塵嵐



そこで私はプレゼンテーションを行いました。この会議では、アラブ人よりもアメリカ人、イギリス人の方が多かったのですが、その会議で一つ質問が来ました。カタールにいる人から。イラクからカタールは４００キロ離れていますが、イラクから汚染がこっちにも来ることがあるのかと。私の答えは大変シンプルなもので、ウランはカタールやアラブ首長国連邦に行くのにビザはいらない、と。

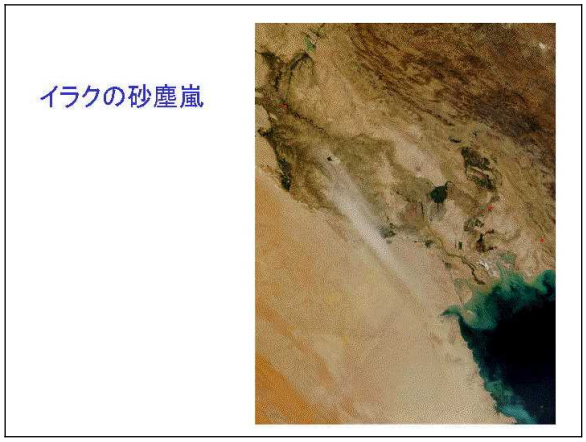
これはアラビア半島の砂嵐を空中撮影した写真です。これを見るとイラクからクウェート、サウジアラビアの真ん中辺まで、そして湾岸諸国の各国にこの砂嵐が行っているのが分かります。そして２８年前のことですが、我々のチームの、物理学者でもあるレオナルド・ディーツ博士が、劣化ウランの実験所から３０マイル、４８キロくらい

離れた所に置かれたエアフィルターから劣化ウランを検出しました。既に２８年も前に確認をしているのです。ということで、劣化ウランというのは空気中を何百マイルも拡散して行き、着弾点から遠く離れた人々をも汚染する性質のものである、ということです。

私は以前サウジアラビアのキング・ファイサル病院という所で働いていましたが、そこに北部の州から来た患者さんが、なぜこのような症状が出るのかと私の所に聞きに来ました。しかしながら、患者の住んでいる所を私が調査しようとしたら、サウジアラビアの政府がしてはいけないと言ってきました。

そしてこちらはイラクの砂嵐の図です[次頁左の2枚]。北西から南東方向に直線状に砂嵐が流れている訳ですね。こういった所からもウラン粒子の拡散の状態が分かる訳です。

砂漠の砂嵐を経験した人なら分かると思います



が、砂嵐の大変小さな微粒子を吸い込むのを防ぐことはまず不可能です。マスクをしても、この微粒子というのは大変大変細かい粒子でして、あらゆる所から入ってきます。耳からも入るし、鼻からも入るし、目からも入るし、口からも入るということです。そしてこれらの兵士たちは、ウランを含んだ埃を吸うことの危険性について、全く知らされていませんでした。そしてコーランにこういう古い一節があります。”Don’ t you remember what happens to the army of elephants？ もし強い軍隊が来たならば、その軍隊をやっつけるには、埃を軍隊に落とせばよい、やいた埃を落とせばよい、という一節があるんです。これは、コーランに書かれていることが去年起きたという信じられない一節だと思うのですが、今回起きたことというのは、焼いた埃の代わりに高温で燃焼したウランに汚染された埃が実際に何も知らされていなかった彼らの上に落ち吸い込まれたということです。

このスライドは私たちが野外調査で使う計器類を示しています[右上の2枚]。野外調査に携行できる計器類には重さなどで制限があるので、あまり正確なものが測れる訳ではありません。しかしな

がら、こういった計器を持って行って放射能を測った時に、破壊された戦車はあまりに放射能のレベルが高くて計器が測定できませんでした。放射

ウランのエアロゾルが付着して
放射化した兵士のベスト

能レベルが上限を越えてしまって、実際の数値が測れないという事態がありました。

こちらが、イラク兵士が着ていた軍服です。これも計器を近づけていきましたら、あまりに放射能レベルが高くて数値が測れませんでした。

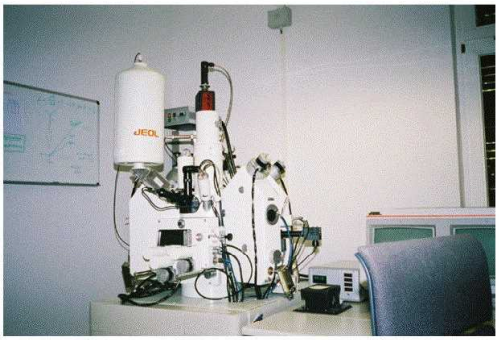
肺組織の中のα線放射

さて、ここで私の話していることは何なのでしょうか？　フィクションですか？　子供の話ですか？　童話ですか？　全くそうではなくて、物理です。実際の放射能レベルの数値です。実際の数値というのは疑いの余地がなくて、政府が何と言おうとも、最新の計器で測って針が振りきれるのです。政府側は突きつけられた事実に対して、科学的計測値に対して面と向かって行かなくてはならないのです。

これは兵士が着ていた服で、外側にあるものですね。しかし、想像してみてください。この中にいる人間が、どれくらい肺にこのアルファ線を放出する危険な放射性物質を吸い込んでしまうかということを。

このスライドは、肺の中で何が起こるかということを示しています。プルトニウムの

質量分析研究所
鉱物学研究所（フランクフルト、JW　ゲーテ大学）



１原子が肺に入っている状態です。そしてプルトニウムの原子が１つあるだけで、まわりの組織の電子を引き離してしまいます。そしてこの超ウラン元素がまわりの電子を引き離してしまうと、まわりの細胞同士が繋がって統合された状態にあったのが、バラバラになってしまいます。細胞によっては死んでしまうものもあります。生き残った細胞でも遺伝的影響が出てきてしまい、次の世代の細胞にもそれが影響してきてしまいます。

こちらはドイツのフランクフルトにある最新鋭の機器です[右上の2枚]。マス・スペクトロメトリー（質量分析機）というもので、こちらは200万ドル以上かかります。私の友人であるアクセル・ゲルディス博士が、イラクのサンプルの調査をこの機械を使ってやってくれています。

ニューヨーク・デイリー・ニューズに私たちの結果が載りました。そしたらすぐに、アメリカ政

イラクの市民:バグダッド　同位体比率

Sample	$^{238}U/^{235}U$	2 Sigma	$^{234}U/^{238}U$	2 Sigma	$^{236}U/^{238}U$	2 Sigma
1	138.05	0.70	7.21×10^{-5}	2.06×10^{-6}	$< 1 \times 10^{-7}$	
2	137.64	0.89	7.01×10^{-5}	3.41×10^{-6}	$< 1 \times 10^{-7}$	
3	142.71	0.64	6.90×10^{-5}	3.82×10^{-6}	1.28×10^{-6}	6.95×10^{-8}
4	137.79	0.46	7.51×10^{-5}	1.79×10^{-6}	$< 1 \times 10^{-7}$	
5	139.14	0.58	7.02×10^{-5}	3.28×10^{-7}	3.92×10^{-7}	4.76×10^{-8}
6	138.22	0.74	7.09×10^{-5}	2.51×10^{-6}	$< 1 \times 10^{-7}$	
7	138.19	1.27	7.48×10^{-5}	2.92×10^{-6}	3.5×10^{-7}	3.37×10^{-7}
8	137.67	1.38	7.53×10^{-5}	4.44×10^{-6}	$< 1 \times 10^{-7}$	
9	139.27	1.24	7.01×10^{-5}	3.92×10^{-6}	3.9×10^{-7}	5.00×10^{-7}
10	137.29	1.43	7.24×10^{-5}	3.01×10^{-6}	2.1×10^{-7}	3.40×10^{-7}
Average	138.68		7.20×10^{-5}		5.25×10^{-7}	
Std Dev	1.57		2.34×10^{-6}		4.27×10^{-7}	
Std Error	0.50		7.38×10^{-7}		1.91×10^{-7}	

イラク市民:バグダッド
尿中ウランの総濃度

Sample	U ng/L
1	21.7
2	13.1
3	40.6
4	29.3
5	27.6
6	13.1
7	16.0
8	16.7
9	17.4
10	11.9
Average	20.8
Std Dev	9.1
Std Error	2.9

イラク市民: バスラ
同位体比率

Sample	$^{238}U/^{235}U$	2 Sigma	$^{234}U/^{238}U$	2 Sigma	$^{236}U/^{238}U$	2 Sigma
1	147.22	0.75	6.71×10^{-5}	6.74×10^{-7}	9.61×10^{-8}	1.91×10^{-8}
2	137.95	0.49	6.34×10^{-5}	6.01×10^{-7}	$< 4 \times 10^{-8}$	
3	140.91	1.15	6.72×10^{-5}	3.40×10^{-6}	7.19×10^{-7}	4.43×10^{-7}
4	139.39	2.93	7.37×10^{-5}	3.03×10^{-5}	$< 1 \times 10^{-7}$	
5	146.45	1.55	5.90×10^{-5}	7.03×10^{-6}	2.38×10^{-6}	9.38×10^{-7}
Average	142.38		6.61×10^{-5}		1.07×10^{-6}	
Std Dev	4.21		5.44×10^{-6}		1.18×10^{-6}	
Std Error	1.88		2.43×10^{-6}		6.81×10^{-7}	

イラク市民: バスラ
尿中ウランの総濃度

Sample	U ng/L
1	65.3
2	57.3
3	22.1
4	1.1
5	9.4
Average	31.1
Std Dev	28.8
Std Error	9.1

府はこの結果についてゲルディス博士に問い合わせをした訳です。こちらのニューヨーク・デイリー・ニューズは全米の中でも発行部数が７番目に多い新聞で、１００万部刷られています。そしてこの中に私がサマワで調査を行った結果が出ています。この写真に載っている兵士たちは私の患者です。サマワから帰ってきたばかりの兵士です。そしてゲルディス博士はアメリカ政府に対してこう答えました。「私の結果は大学側でも裏付けしてくれていいる」と。

さて、バグダッドの市民の調査結果はとても興味深いものです[前頁下とこの頁上]。バグダットの中心部では劣化ウラン兵器は使われなかったです。重たい爆弾は使われたのですが、ウランの組成の比率はノーマルなもの、天然のものです。しかしウラン２３６、人工のものが入っています。総ウラン濃度のほうもそんなにドラマチックな数字ではないですね。

しかし、次のを見てください[左の中と下の表]。こちらはバスラの結果です。イギリス軍が占領しているところです。今回の第二次湾岸戦争では、ほとんどの戦車戦はバスラの近郊で行われました。こちらはバスラの体調が悪くなっている市民の調査結果です。これら１，

イラク市民: ナッシリア
尿中の同位体比率

Sample	$^{238}U/^{235}U$	2 Sigma	$^{234}U/^{238}U$	2 Sigma	$^{236}U/^{238}U$	2 Sigma
1	138.89	0.35	6.14×10^{-5}	1.29×10^{-6}	3.54×10^{-7}	7.48×10^{-8}
2	138.02	0.33	6.20×10^{-5}	2.16×10^{-6}	$< 1 \times 10^{-7}$	
3	138.24	1.70	7.30×10^{-5}	2.40×10^{-6}	$< 1 \times 10^{-7}$	
4	139.24	1.14	7.36×10^{-5}	3.66×10^{-6}	2.92×10^{-7}	4.51×10^{-7}
5	137.63	1.02	7.16×10^{-5}	2.36×10^{-6}	$< 1 \times 10^{-7}$	
Average	138.41		6.83×10^{-5}		3.23×10^{-7}	
Std Dev	0.66		6.08×10^{-6}		4.27×10^{-8}	
Std Error	0.29		2.72×10^{-6}		3.09×10^{-8}	

イラク市民: ナッシリア
尿中ウランの総濃度

Sample	U ng/L
1	50.2
2	16.9
3	21.2
4	12.0
5	32.6
Average	26.72
Std Dev	15.0
Std Error	6.7

３，４，５番の４名からは劣化ウランが出ていますね。そして更にウラン２３６も高い濃度で検出されています。

つまりこれは何を意味するのかというと、一口に放射線兵器といってもアイソトープの組成が違うのです。先ほどのアフガニスタン、バグダット、バスラと、それぞれ軍事ターゲットの性質に応じて違うウランの組成の兵器、違うアイソトープ比率の兵器を使用している訳なんです。何をこれは意味するでしょうか？　彼らこそが大量破壊兵器を使っているということです。そして彼らは無差別兵器を使っているということです。兵士だけでなくて、市民をこのようにターゲットにしてしまっている訳です。

UMRC: イラク現地調査チーム
ウランの同位体比

Sample	$^{238}U/^{235}U$	2 Sigma	$^{234}U/^{238}U$	2 Sigma	$^{236}U/^{238}U$	2 Sigma
1	137.61	2.06	6.43×10^{-5}	8.82×10^{-6}	$< 1 \times 10^{-7}$	
2	139.97	0.50	6.82×10^{-5}	3.99×10^{-6}	1.64×10^{-7}	5.18×10^{-7}
3	142.72	2.85	6.59×10^{-5}	2.20×10^{-6}	9.33×10^{-7}	1.21×10^{-7}
Average	140.10		6.61×10^{-5}		5.49×10^{-7}	
Std Dev	2.56		1.98×10^{-6}		5.43×10^{-7}	
Std Error	1.48		1.14×10^{-6}		3.84×10^{-7}	

こちらの平均値（同位体比）を見ますと１４２、これは確実に劣化ウランの組成です。そしてイギリス政府は、ついに私のこの調査結果を正しいと認めました。そしてもう１度バスラの数値ですが、これはウランの全体量も１．１から６５まで様々な数値があります。

ナシリアでも調べますと[この頁上の2表]、やはり天然のウランとほぼ同じ組成となっていて、劣化ウランは使われてない範囲内です。しかしながらウランの全体量がある程度上がっています。

先ほどの話にでてきたアフガニスタンでサンプルを収集していたテッド・ウェイマンを覚えておられるでしょうか？　彼は、イラクで７日間、南部の方で調査をしていました。彼自身の調査結果

UMRC: イラク現地調査チーム
尿中ウランの総濃度

Sample	U ng/L
1	8.4
2	12.7
3	42.0
Average	21.02
Std Dev	18.26
Std Error	10.54

がＮｏ．３の調査結果です[この頁下の2表]。彼は高い濃度で劣化ウランの汚染を受けています。そ

湾岸戦争II:土壌サンプル
同位体比率

Sample	$^{238}U/^{235}U$	2 Sigma	$^{234}U/^{238}U$	2 Sigma	$^{236}U/^{238}U$	2 Sigma
1	484.74	4.01	7.42×10^{-6}	9.77×10^{-8}	3.72×10^{-6}	1.31×10^{-7}
2	148.92	0.37	3.74×10^{-5}	3.74×10^{-6}	1.32×10^{-6}	4.64×10^{-7}
3	175.22	0.58	5.51×10^{-5}	2.83×10^{-6}	3.78×10^{-6}	3.49×10^{-7}
4	487.02	1.50	7.26×10^{-5}	7.28×10^{-8}	1.21×10^{-5}	1.93×10^{-7}
5	415.50	1.38	1.18×10^{-5}	3.55×10^{-7}	2.34×10^{-5}	3.82×10^{-7}
6	234.91	0.73	3.52×10^{-5}	2.31×10^{-6}	7.10×10^{-6}	1.59×10^{-7}
7	139.27	0.21	7.05×10^{-5}	4.38×10^{-6}	1.40×10^{-7}	1.24×10^{-7}
8	542.13	2.41	6.38×10^{-6}	1.38×10^{-7}	2.82×10^{-5}	4.47×10^{-7}
9	145.69	0.65	6.77×10^{-5}	4.05×10^{-6}	1.62×10^{-6}	5.04×10^{-7}
10	234.05	0.59	3.92×10^{-6}	2.88×10^{-6}	7.65×10^{-6}	3.87×10^{-7}
Average	300.75		4.11×10^{-5}		8.07×10^{-6}	
Std Dev	162.51		2.51×10^{-5}		9.71×10^{-6}	
Std Error	51.39		7.95×10^{-6}		3.07×10^{-6}	

湾岸戦争II:土壌サンプル
細かい土壌の中でのウランの総濃度

Sample	U mg/kg
1	35.4
2	0.1
3	0.4
4	1029.8
5	1.3
6	0.5
7	1.0
8	76.2
9	0.1
10	0.2
Average	114.5
Std Dev	322.6
Std Error	102.0

して、彼はイラクから帰って来た時、大変体調を崩していました。そして今、彼はベッドの中で過ごす時間のほうが、ベッドの外で過ごす時間より長くなっています。熱が上がったり下がったりの状態が続いていて、身体全体が弱っておりまして、そして肺の機能にも障害が出ていて、大変状態が悪いです。そして、この２番目はサラ博士です。やはり劣化ウランで被爆しました。そしてウランの濃度は、テッド・ウェイマンが４２で、標準の４倍になっています。

イラク南部の土壌の汚染を見てみましょう[この頁上の2表]。３００となっておりまして、これは確実に劣化ウランの汚染が高いということです。つまり、その環境すべてが汚染されていると。そして、もしも誰かがイラクの元々の土にあるウラン濃度が高いと言ったら、それは全くの間違いです。今見せている数値は、１０キロ四方のいろんな地点で取ったサンプルの数値です。もし元々高いというのであれば、すべてのデータが同じでなければいけないでしょうが、いろんな数値があり、これはウラン兵器の影響が地域によって違うからです。

X

湾岸戦争II(イラク戦争)

サマワに配備された米兵士の
ウラン汚染

私の話の最後は皆さん日本人に係わる調査結果です。サマワから病気になって帰還したばかりの９人の兵士たちを、ワシントンD．C．において軍医によって検査したのです。

自衛隊は今指したところで宿営しています。市の中心部から１．５キロ東に離れたところです。

こちらはサマワに至る道路の途中で破壊されたイラクの兵員輸送車です[次頁左上]。劣化ウランの汚染濃度が大変高かったです。

こちらはオランダ兵士ですが[次頁左中]、彼らはサマワで任務に就くことを拒否したのです。というのは、劣化ウランの汚染の濃度が大変高かったからです。アメリカの兵士たちはサマワから撤退しました。その後でオランダの兵士が来ましたが、サマワの市内にテントを張ることを拒否して

サマワへの道にあった破壊された
イラク軍の兵員輸送車

サマワに配備されたオランダ兵
出典：英国 国防省

サマワの地図

サマワの市外にテントを張りました。その後サマワの市内にやってきたのが日本の自衛隊です。私はこれをどう説明すればよいのでしょう。日本の自衛隊というのは、ウランに耐性を持っている超人間的な人たちなんでしょうか？

ここにある写真の人たちは[この頁右上]、昨年１２月にニューヨークで、私が診た患者たちで、皆病気になっていました。病状は湾岸戦争症候群と同じものでした。

そして、最終結果が出た直後に、先週の月、火、水曜と３日連続でニューヨーク・デイリー・ニューズにこの記事が載りました。

そしてその直後に、ヒラリー上院議員がラムズフェルド国防長官に手紙を書きまして、なぜ軍はこの博士がやったこの研究と同じことをやらないのかと、責めたわけです。

彼女は記者会見を開いて、そこには４３のマスコミ各社がやってきました。ラムズフェルド長官はまだ何の反応も示していません。その後ニューヨーク州のパタキ知事もラムズフェルド長官に同様の書簡を送ったので、彼も何かをやらざるを得ない事態になると思います。

驚くべきことは、この９人の帰還兵のニューヨークでの調査結果ですが[この頁下表]、彼らは実際に戦闘に参加していたわけじゃないんです。彼らはミリタリーポリス（憲兵）でありまして、別に前線にいたわけでなく、戦闘が終わって舞い上がった埃が地上に落ちてきてから、ここに入ってきたわけなんです。これを見ますと劣化ウランがこのように複数の人たちから検出されているわけです。

検査の結果劣化ウランが検出された米兵士

ヘクター・ベガ軍曹
ブロンクスの自宅で

サマワ操車場の列車
ここで442中隊のメンバーは2003年の6月から8月まで眠った

彼の娘サマンサとオーガスティン・マトス

９人中４人の帰還兵が劣化ウランに被爆していました。また、９人中７人は人工ウラン２３６が尿から検出されました。

そしてウランの総濃度は低いものでした。これらが何を意味するかというと、サマワでは劣化ウランが使われたということです。

そしてこの結果報告のまとめですが、まず初めて明らかにしたこととして、９人中４人の尿の中に劣化ウランとウラン２３６の両方が検出されました。彼らはサマワで放射性の塵を吸入したことで被曝したのです。そして更に３人の兵士たちは、劣化ウランは検出されませんでしたが、ウラン２３６に被曝して尿の中から検出されました。つま

り、この地域は高度に汚染されているのです。専門家としての私の意見は、サマワの地域は人が住んではいけない地域であり、オフリミットにして立ち入り禁止にしないといけない場所だということです。

湾岸戦争II兵士:サマワ
ウランの総濃度

Sample	U ng/L
1	5.7
2	1.6
3	2.9
4	2.2
5	3.3
6	3.3
7	6.2
8	3.4
9	3.8
Average	3.6
Std Dev	1.5
Std Error	0.5

湾岸戦争II 兵士: サマワ
同位体の比率

Sample	$^{238}U/^{235}U$	2 Sigma	$^{234}U/^{238}U$	2 Sigma	$^{236}U/^{238}U$	2 Sigma
1	137.60	0.65	6.37×10^{-5}	7.10×10^{-7}	$< 8 \times 10^{-8}$	
2	137.84	1.76	6.23×10^{-5}	8.75×10^{-7}	$< 8 \times 10^{-8}$	
3	142.20	1.21	6.72×10^{-5}	8.12×10^{-7}	6.17×10^{-7}	1.02×10^{-5}
4	137.95	0.43	6.99×10^{-5}	7.53×10^{-7}	2.24×10^{-7}	5.79×10^{-6}
5	146.91	0.40	6.81×10^{-5}	6.75×10^{-7}	2.37×10^{-6}	1.78×10^{-5}
6	138.65	0.38	5.74×10^{-5}	5.59×10^{-7}	3.48×10^{-7}	4.55×10^{-5}
7	138.32	0.30	7.13×10^{-5}	6.68×10^{-7}	1.95×10^{-7}	1.35×10^{-5}
8	154.28	0.49	6.16×10^{-5}	5.62×10^{-7}	3.43×10^{-6}	1.93×10^{-5}
9	165.16	1.22	5.80×10^{-5}	5.95×10^{-7}	5.09×10^{-6}	2.99×10^{-5}
Average	144.32		6.44×10^{-5}		1.75×10^{-6}	
Std Dev	9.62		5.02×10^{-6}		1.93×10^{-6}	
Std Error	3.21		1.67×10^{-6}		7.29×10^{-7}	

私が今日の話の最後に言いたいメッセージがあります。私たちは大変な時代に生きています。つまりこのような放射性兵器が使われているという動かしがたい事実があって、その重大な影響を知っているにもかかわらず国際社会はこれをなんとかすることができない、そういう時代に我々は生きているという事です。しかし一番初めに言いました様に、今日のこの集会の目的は「１滴の水が大きな岩をも砕くことができるのだ」という格言の中にあります。私はこのような１滴の水になりたいし、今日集まられた全ての皆さんと一緒にこの１滴の水となって大きな岩を砕いていきたいと思います。この巨大な岩というのは危険な兵器によって人間の命を危機にさらし、犠牲にしながらでも物質的、政治的勝利を得ようとする国家の傲慢さという巨大な岩で、これを私たちは１滴の水となって共に闘っ

て砕いていきましょう。ありがとうございました。　　（拍手）

結　論

調査の結果は、湾岸戦争Ⅱ（イラク戦争）の間に配備されたサマワ地域で放射性のダストの吸入によって汚染され、検査された９人の米兵士のうち４人に、かなりの量の劣化ウランとウラン２３６があることを示している。さらに、劣化ウランの比率が見つからなかった兵士のうち３人の尿からも明確なウラン２３６が検出された。

Uranium Medical Research Centre

質　問

１．　自衛隊とかアメリカ軍の人たちが被害を受けているということがわかったのですが、ということは、イラクの人たち全体で見たときに、今まだわからないでしょうけれども、可能性としてはどれくらいの人たちがそういう健康被害をうけている、というふうに推定されるのか教えてください。

２．　ヒラリー・クリントンの記者会見に４０名以上集まったということですが、このアメリカでの反響は、マスコミの中ではどうなんでしょうか。

３．　イラクの市民の尿サンプルを採集してきていると伺っています。特にサマワ周辺の、アメリカ兵ではなく、サマワ市民の尿のサンプルなどからの結論というのは出ているのでしょうか。

回　答

１．　明らかなのは連合軍の兵士がこれほどの高濃度の汚染にさらされたということは、一時的にしかいなかった人たちがこれくらいなのですから、イラクの市民はずっと高い濃度で汚染されている、被曝しているということです。彼らはずっと放射能のある環境に住みつづけているのですから。ではいったい何人のイラク人が被曝しているのか？　こういった研究をしようということは、まだ国際社会ではそういった動きは全くないし、イラクの人たちは今見捨てられている状態です。国際社会が総括的なそういう研究をしようと意思決定をしない限りは、真実というものは絶対に明るみに出ないでしょう。そしてアメリカやイギリスなど連合軍の政府というのは、このような研究は絶対にさせたくないと、決まって言うわけです、もしこういった研究がなされてしまったら、クリーンアップ作業のためにそれこそ何十億ドルもの経費がかけられなければいけない。彼らが中東に行ったのは石油からお金を取るためであって、その地域のためにお金を使うことではまったくない訳です。そういった理由で、国際社会が政治的に余程イギリスやアメリカに圧力を掛けない限りは、国際社会が眠っている限りは、そのような調査は行われないでしょう。

２．　ヒラリーさんの記者会見の後で、政府とペンタゴンは一応統合的なウランの検査を、サマワからのアメリカの帰還兵に関しては全ての人についてやるという話は出ているのですが、私が思うに絶対にやらないと思います。

３．　サマワのイラク住民に関してはまだやっていないです。今回のこの調査、サマワからの帰還兵の調査も、ニューヨーク・デイリー・ニューズが資金を調達してくれたのです。検査費用が大変高価なもので我々はまだそこまでやれていないのです。尿のサンプルは採ってきました。ただ、まだ分析ができていないんです。つまり資金的な問題からです。

米兵の劣化ウラン被曝の事実を明るみに出したスクープ記事

――ニューヨークデイリーニュースを中心に――

自衛隊員も被曝から無縁ではあり得ない。
改めて自衛隊の撤兵を要求する。
ついに公表されたサマワ帰還米兵の劣化ウラン被曝の事実！
そこに住み続けざるを得ぬイラク住民の深刻な被曝被害をも示唆する。

原因不明の疾患にかかり米軍の対応に怒ったサマワ帰還米兵がＵＭＲＣに駆け込む。
ドラコビッチ博士のチームが米紙と協力し、衝撃的な診察・分析結果を公表。

４月３日付のニューヨーク・デイリー・ニュース紙は、イラク戦争後にサマワに展開し、体調不良で帰国した米兵の９人中４人の尿から劣化ウランが検出されたことを公表しました。一面トップのスクープ記事です。私たちは早速これら記事の翻訳をしました。

ニューヨーク・デイリー・ニュースの記事は４月３日付が３本公表され、それ以降も続くようです。今回は、まず第一弾として、４月３日に一面トップのスクープ記事として掲載された総論的な記事を翻訳して紹介します。以後日をおかずに全ての記事を紹介していく予定です。ご注目下さい。

※ http://www.nydailynews.com/front/story/180333p-156685c.html
※ http://www.nydailynews.com/news/local/story/180337p-156686c.html
※ http://www.nydailynews.com/news/local/story/180340p-156689c.html
※ ニューヨーク・デイリー・ニュース-ホームページ
http://www.nydailynews.com

調査対象となった兵士達の所属する第４４２憲兵中隊は、直接の戦闘には参加しておらずイラクに入った時期も遅いにもかかわらず被曝したのです。共通して訴えているのは昨年８月にサマワにキャンプを設営しているときに原因不明の疾患にかかったということです。（昨年８月にオランダ軍に治安を任せるまでサマワも米軍が治安を担当していました。そして今、日本の自衛隊がサマワに派兵されていることは皆さんがご存じの通りです）

事の発端は、帰還兵達が軍当局や軍病院の不誠実な対応に業を煮やしてＵＭＲＣ（ウラニウム医療研究センター）に連絡を取り、ぜひ診断して欲しいと相談してきたことです。これを受けてその責任者であるアサフ・ドラコビッチ博士が即座に対応したのです。博士のチームは兵士達を直接診察し、その症状から劣化ウラン被曝の可能性があると判断し、尿のウラン分析の必要性を確信しました。９人の尿の分析はニューヨーク・デイリー・ニュースが資金提供してドイツのゲルデス教授のところで最新鋭の機器を使って行われました。調査・分析はドラコビッチ博士とドイツのゲルデス教授の共同研究となりました。

昨年の初来日の際に博士が力説しておられたことは、医師として人間として、米政府・軍の理不尽なやり方に対して、自分は自らの手で分析・調査した科学的事実を持って闘うという確固とした信念・信条でした。一般兵士達を、現地イラクの人々を、人間を、このように被曝させあるいは使い捨て、平然と“劣化ウラン戦争”、“放射能戦争”をやり続け放射性物質をまき散らす米政府・軍の非人道的行為に対して、科学的な調査と事実を武器に立ち向かうドラコビッチ博士とＵＭＲＣの新たな挑戦が始まった。――私たちは、今回の新聞発表をそう理解しています。同時に私たちも、博士とＵＭＲＣの挑戦を、資金面からも、調査結果を全世界に宣伝する面からも、全面的に支援しなければならない。そう考えています。

この調査結果は極めて重大です。思い付く限り以下簡単に列挙してみます。

（１）　この調査は今回のイラク戦争に参加した米兵士の劣化ウランによる被曝を世界で初めて具体的に明らかにするものでした。しかもこの被曝兵士に関する調査・分析結果は、単なる新聞発表用のものではありません。今年フィンランドで開かれる核医学欧州学会の年次総会で研究論文として発表されるものです。

（２）　昨年来、イラク駐留米軍の間で原因不明の疾患、奇病にかかる兵士が続出していました。最近の調査では、医学的理由で退避させられた兵士が何と１万８千人にのぼると言われています。今回の調査結果は、こうした原因不明疾患・奇病の、少なくとも一部については、劣化ウランが原因である可能性が高まったことを示唆するものです。

※私たちは今年１月自衛隊派兵を前に、「増大する米軍兵士の犠牲と現状を直視せよ－－今日の米兵の悲惨な姿は明日の自衛隊員の姿となる危険」という論説をホームページに掲載しました。そこでは「３．劣化ウランか炭疽菌ワクチンか、あるいはそれらの合併症か。－－“原因不明の奇病”が続出。第二の湾岸戦争症候群の再現。」の「（２）湾岸戦争症候群の再来。劣化ウランが重要な原因の一つであることは間違いない。」の節を設けたのですが、これが今回の調査結果で現実のものとなったのです。

http://www.jca.apc.org/stopUSwar/Iraq/us_fatalities.htm

この論説に付けた翻訳資料２「数千人の米軍兵士が原因不明の医学的理由のためイラクから退避させられた」では、昨年９月段階にワシントン・ポストが報じた「医学的理由の待避兵士」は６０００人に過ぎなかったのですが、この３月には１８，０００人まで膨れ上がったのです。

※「Medical evacuations in Iraq war hit 18,000 」By Mark Benjamin　United Press International
Published 3/31/2004
http://www.upi.com/print.cfm?StoryID=20040330-051545-6818r

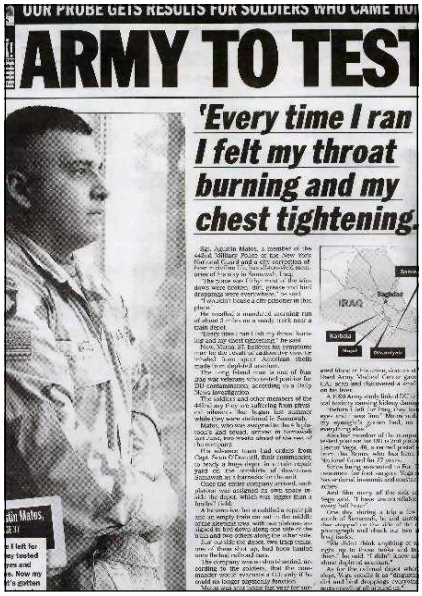
（３）　この兵士達は、米政府がこれまで劣化ウラン弾への被曝を渋々認めてきた「体内に劣化ウランの破片を持つ兵士」でも、「戦車の中で友軍の劣化ウラン弾の誤射を受けた兵士」でもありません。従来米政府がありえないとしてきた一般の兵士の劣化ウラン被曝の事実が明らかになったのです。

（４）　さらに重要なのは、彼ら第４４２憲兵中隊の兵士達は戦闘で劣化ウランに被曝したのではないということです。彼らは憲兵隊で主要な戦闘には加わっておらず、護送やイラク警察の訓練などの任務についていただけです。彼らの被曝は環境中のウランのほこりを吸い込んだことによるのです。

（５）　戦闘に参加していない彼らの９人のうち４人が被曝していたのならば、高濃度のウランのほこりが飛び交う戦闘に参加していた多数の米兵達の被曝はずっと深刻であることが予想されます。

（６）　この記事によると、オランダ軍が劣化ウラン汚染を事前に調査していたことが分かります。サマワにいるオランダ軍は、駅の周辺（この場所こそ米兵達がキャンプを設営したところ）の放射能レベルが高かったので、砂漠の真ん中にキャンプを設営したというのです。

（７）　しかしこの被曝米兵が指し示した最も深刻なことは、イラク戦争以来ずっとそこに住み続け、これからも住み続けるサマワの住民、更には何十万、何百万のイラクの一般市民を劣化ウランによる被曝の危険にさらしていることを明らかにしたことです。



これらサマワ帰還兵士は数ヶ月サマワにいただけです。未来永劫、責め苦のようにウランのほこりを吸い続けるサマワやイラクの住民が今後どのような被害を被り、どんな病気にかかり、どんな運命をたどるのか。これはまさしく戦争犯罪です。

（８）　また今回の調査は、小泉政権のウソ・デタラメを事実でもって暴きました。

これら米兵達は現地にいて呼吸していただけで劣化ウランに被曝する可能性があるということを証明したのです。政府・防衛庁や自衛隊幹部は、「ガイガーカウンターで（劣化ウランは）見つけられる」「近寄ったり、飲食しなければ安全」と言ってきましたが、

こうした無責任な発言がウソであることが明らかになったのです。人をバカにしたようなその場しのぎのでたらめな言い逃れを繰り返してきた日本政府の責任は重大です。サマワに派兵された自衛隊員の安全対策を言うなら、直ちに撤兵させるべきです。

※「イラク戦争劣化ウラン情報　No.１０　イラクでの劣化ウラン使用を否定し続ける政府答弁－－自衛隊の「放射能測定器」携行のごまかし」参照。

http://www.jca.apc.org/stopUSwar/DU/no_du_report10.htm

・・・・・・・・・・・・・・ニューヨーク・デイリーニュース・スクープ・・・・・・・・・・・・・・

劣化ウランに毒された？ ショッキング・レポートは暴く おそらく州兵たちはアメリカのハイテク兵器の犠牲者であろう

Poisoned? Shocking report reveals local troops may be victims of america´s high-tech weapons

特別報告　ホアン・ゴンサレス（デイリー・ニュース記者）

２００４年４月３日　Newyork Daily News
http://www.nydailynews.com/front/story/180333p-156685c.html

イラクで軍務についているニューヨーク州兵陸軍歩兵中隊所属の４人の兵士が、米軍が発射した劣化ウラン弾によるダストに起因すると思われる放射能に汚染されているということが、「デイリー・ニュース」の調査で分かった。

彼らは、同じ第４４２憲兵中隊のメンバーである。彼らは、昨年夏にイラクの町サマワで始まった持続的な慢性の体調不良と闘い続けている、と述べている。

「私は６月にはもう具合が悪くなっていた。」とブルックリンの住宅警官レイ・ラモス二等軍曹は述べた。「私の健康はずっと悪くなり続けている。毎日頭痛がして、手にいつもしびれがあって、腹に発疹が出ている。」

この歩兵中隊の９人の兵士を診察し検査した核医学専門家は、４人が、劣化ウランで作られたアメリカ製砲弾の爆発から生じた放射性ダストを吸入したのは「ほとんど確実だ」と述べている。

「デイリー・ニュース」の求めで行なわれた検査は、４人の兵士から採取した尿サンプルにおいて、二種類の人工的組成のウラニウムが微量含まれていることを明らかにした。

もしそうであれば、この４人－－ヘクター・ベガ軍曹、レイ・ラモス軍曹、アグスティン・マトス軍曹、アンソニー・ヨナン伍長－－は、現在のイラク戦争で吸入された劣化ウラン被曝の確認された最初の症例である。

第４４２憲兵隊は、大部分がニューヨークの警察官、消防隊員、刑務官で構成されていて、ロックランド郡オレンジバーグに本拠を置いている。この部隊のメンバーは、昨年のイースター（復活祭）にイラクに配備され、物資輸送の護衛を行ない、拘置所を管理し、イラク警察を訓練してきた。この歩兵中隊全体は、今月末帰還する予定である。

Chevrestt for NEWS

ヘクター・ベガ軍曹

「これらは驚くべき結果だ。とりわけ、これらの兵士は憲兵であって戦闘の真っ最中に被曝したのではないからだ。」と、アサフ・ドラコビッチ博士は述べた。博士は米軍兵士を診察し「デイリー・ニュース」が費用負担した検査を行なったのである。

アグスティン・マトス軍曹

Roca NEWS

「戦闘に加わっていた他の米軍兵士たちは、もっと多くの劣化ウラン被曝をしているに違いない。」とドラコビッチ博士は述べた。博士は、１９９１年湾岸戦争の時には現役であった陸軍予備役大佐である。

デラウエア州の陸軍病院で勤務していた時、博士は湾岸戦争帰還兵に異常な放射線レベルを発見した最初の医師たちの中の一人であった。それ以来、博士は戦闘における劣化ウランの使用の主要な批判者となった。

劣化ウランはウラニウム濃縮過程の廃棄物であるが、１５年以上にわたって、砲弾にそしてまた戦車の装甲として、アメリカ軍およびイギリス軍によって使用されてきた。劣化ウランは鉛の２倍の重さで

ある。

その密度のために、「それ（劣化ウラン）は、戦車を守る装甲としての、また装甲を貫通するための、優れた重金属である。」と、ペンタゴンのスポークスマン、マイケル・キルパトリックは述べた。

陸軍と空軍は昨年イラクで、少なくとも１２７トンの劣化ウラン砲弾を発射した、とキルパトリックは述べた。海兵隊がどれぐらい発射したかについての数値は、明らかにされていない。

キルパトリックによれば、イラク戦争から帰還した約１０００人の米兵がペンタゴンによって劣化ウランの検査を受け、３人だけが陽性となったが、すべてはＤＵ砲弾の破片（を体に受けた）の結果である、ということである。

しかし、ニューヨーク州兵の９人中４人がＤＵ陽性であるという検査結果は、連合軍兵士とイラク市民の間に、より広範な放射性被曝がある可能性を示している。

近年のいくつかの軍の研究は、ＤＵを含む砲弾が爆発する際に放出される低レベル放射線は重大な危険をもたらすものではないと結論づけてきた。しかし、独立系の科学者たちの中に、またわずかだが軍自身の報告にも、そうではないことを示しているものがある。

結果として、劣化ウラン兵器は、世界中でますます大きな論争を引き起こしている。２００３年１月に欧州議会は、ＤＵ兵器が使われたコソボに従軍したイタリア兵士の間に異常な数の白血病死が報告されて後、その使用のモラトリアムを求めた。

■私はますます弱っていく。私にいったい何が起こっているのか？

陸軍によれば、劣化ウラン弾の破片によって負傷した兵士または爆発の時に戦車の中にいた兵士のみが、測定できるほどの放射線被曝に直面するという。

しかし、はるか以前の１９７９年に、ニューヨーク州北部のノウルズ原子力研究所の物理学者レイノルド・ディーツは、ＤＵに汚染されたダストが長距離を移動しうるということを発見していた。

ディーツはウラニウム同位体を分離する技術を開発した先駆者であったが、偶然次のことを発見した。彼が実験に使っていたエア・フィルターが、２６マイル離れたところでＤＵを生み出していた国立鉛工業プラントからの放射性ダストを収集した、ということである。彼の発見でこのプラントは閉鎖に追い込まれた。

「この汚染はとても重大であったので、このプラント周辺の５２カ所の地所から表土を取り除かねばならなかった。」と、ディーツは述べている。

天然ウラニウムは水や食物の中に見出されるので、あらゆる人間は、その体内にほんのわずかではあるが天然ウラニウムをもっているとディーツは言う。しかし、天然ウラニウムはすぐに害なく体外に排出される。

ウラニウム酸化物ダストは、いったん吸入されて肺にとどまると、非常に溶けにくく、何年にもわたって体内に放射線を放出しうる。

「民間人であろうが兵士であろうが、これらの微粒子を吸引するものは誰でも永久に被曝し、それは長期にわたってあまり減少しない。」と、核物理学者として３３年間活躍した後に１９８３年に引退したディーツは言う。「結局は... セラミック状ウラニウム酸化物に被曝した帰還兵たちは大きな問題を抱えている。」

ＤＵの批判者たちは、その危険性についての軍の観点が、時を経るにつれて変わってきていることに注目してきた。

１９９１年の湾岸戦争の前に、１９９０年の軍報告は次のことに注目していた。劣化ウランは、「被曝が体内的であればガンに結びつき、化学毒性は腎臓障害を引き起こす。」ということである。

米軍のＡ－１０ウォートホグ対戦車攻撃機とエイブラムズ戦車が初めて大規模にＤＵ弾を使用したのは、湾岸戦争においてであった。ペンタゴンによれば、湾岸戦争で約３２０トンのＤＵが発射された。そして、より小規模には、コソボのセルビア人地区でも使用された。

湾岸戦争では軍首脳は、爆発するＤＵ砲弾の危険性について、兵士たちに何の警告もしなかった。数知れない米兵が、劣化ウラン弾の破片によって、あるいは吸入によって、また戦場の瓦礫を処置したことによって被曝した。

いくつもの帰還兵グループが、ＤＵ汚染を湾岸戦争症候群の要因として非難している。この湾岸戦争症候群という言葉は、湾岸戦争から帰還した何千人

もの兵士を苦しめた多くの症状に対して付けられたものである。

複数の帰還兵グループからの圧力で、米国防総省は、いくつかの研究を新たに委託した。そのうちの一つは２０００年に公表されたが、次のように結論づけた。ＤＵは、重金属として「化学的な危険をもたらすかもしれない」が、湾岸戦争帰還兵は「健康に影響するほどには（劣化ウランの）摂取はしなかった」と。

米国防総省スポークスマンのマイケル・キルパトリックは、軍による７０人のＤＵに汚染された湾岸戦争帰還兵の追跡調査によれば、深刻な健康への影響は示されていない、と述べた。

「どんな重金属についても、安全といえるものはない。」とキルパトリックは言う。「どれも化学毒性の問題がある。そしてＤＵについては、放射性の毒性も問題としてあげられる。」と。

しかし、彼は次のように言う。ウラニウム関連産業で働く人々についての諸研究から導き出される「圧倒的な結論」は、「それ（ＤＵ）が何らガンを増加させてはいないということを示している」と。

しかしながら、いくつかのヨーロッパでの研究は、劣化ウランをネズミの染色体損傷や先天的障害に関連づけている。多くの科学者によれば、我々は、人体への低レベル放射能の長期的影響については、どの程度の量なら安全であると言えるほどには、まだ十分に知ってはいないという。

イギリスの国立科学アカデミー英国学士院は、ＤＵが使用された場所を明らかにすることを要求し、汚染された地域をクリーンアップするよう強く迫っている。

「とても多くの米兵が（イラクで)、ウラニウム酸化物ダストで深刻に被曝した可能性がある。」と、マウント・サイナイ医療センターの病理学者で劣化ウランの専門家であるトーマス・ファシィ博士は述べた。「そして、その健康への影響が将来へ向けて心配される。」と。

第４４２憲兵隊の兵士について言えば、彼らは、病気になってフラストレーションがたまり困惑し茫然自失になっている。彼らによれば、イラクに到着した時、誰も彼らに劣化ウランについて警告してはくれなかったし、誰もダスト・マスクを与えてはくれなかったという。

■本紙の調査を支える専門家たちの精査

「デイリー・ニュース」による調査の一環として、核医学の専門家で劣化ウランに関して広範な調査研究を行なってきたアサフ・ドラコビッチ博士が、昨年１２月に第４４２憲兵隊の９人の兵士を診察し、それぞれから尿サンプルを集めた。

彼のチームのメンバーであるアクセル・ゲルデス教授は、フランクフルトのゲーテ大学の地質学者でウラニウム同位体分析を専門としているのだが、１週間以上もかかるこの尿サンプルの分析検査を行なった。彼は、マルチコレクター誘導プラズマ質量分析器（ＭＣ－ＩＣＰ－ＭＳ）と呼ばれる最新の機材と処理手順を用いた。

ゲルデス教授によれば、さまざまなウラニウム同位体を極微量で特定し測定する能力がある実験室は、世界中で約１００しかない。

ゲルデス教授は、４人の兵士が体内に劣化ウランをもっていると結論づけた。劣化ウランは天然に生じることはない。それは、天然ウランの高度な放射性をもった同位体ウラン２３５とウラン２３４が抽出されるとき、このウラン濃縮の廃棄物として生成される。

ドラコビッチ博士によれば、兵士たちの何人かからは他のウラニウム同位体ウラン２３６もごく微量検出された。このウラン２３６は、核反応過程においてのみ生み出されるものである。

「これらの兵士たちが戦場で放射能兵器に被曝したことは、ほぼ確実である。」とドラコヴィッチ博士は述べた。

ドラコビッチ博士とゲルデス教授は、今年フィンランドで行われるヨーロッパ核医学協会の年次会合で、これらの兵士たちの研究に関する科学的な論文を発表する計画である。

ＤＵ砲弾が爆発する時には、それは攻撃目標とその周辺地域を低レベル放射能で永久に汚染するのである。

・・・・・・・・・・・・・・・ニューヨーク・デイリーニュース・スクープ・・・・・・・・・・・・・・・

劣化ウランに毒された？ ショッキング・レポートは暴く おそらく州兵たちはアメリカのハイテク兵器の犠牲者であろう

（続報）

本号は、前号「イラク戦争劣化ウラン情報　No.１５（２００４年4月5日)」で予告していたニューヨーク・デイリーニュース２００４年４月３日号のスクープ記事の続報です。全部で３本ある記事の一面トップ記事「劣化ウランに毒された？ショッキング・レポートは暴く：おそらく州兵たちはアメリカのハイテク兵器の犠牲者であろう」は、前号の付録として掲載しました。本号で紹介するのは、残りの２本、第２記事「兵士達、健康上のリスクを知りたいと要求」、第３記事「問題の宿営地の中で」です。

米国内では、早速このスクープ記事が波紋を広げています。陸軍当局や議会が動き始めるなど、様々な反応が出ているようです。同紙４月５日号は、「陸軍はニューヨーク州兵部隊を検査する予定」との続報記事を掲載しました。これも明日には訳出し、皆さんにご紹介する予定です。

［第2記事］

兵士達、健康上のリスクを知りたいと要求

Soldiers demand to know health risks
http://www.nydailynews.com/news/local/story/180337p-156686c.html
ホアン・ゴンザレス　（デイリーニュース・スタッフライター）
2004年4月3日　ニューヨーク・デイリー・ニュース http://www.nydailynews.com

ウォルター・リード軍医療センターの医者達は最近、レイ・ラモス特務軍曹に、生体組織検査の結果、彼の発疹がリーシュマニア症に由来することが分かった、と告げた。その病気はスナバエによって広がり、イラクでは数百人の兵士がかかった。

しかし、先週まで、軍医達は４４２憲兵中隊に属するラモスと他の２、３人の彼らの尿の劣化ウランを分析するようにという要求を拒絶した。その検査には最大１０００ドルかかるかも知れない。

本紙の調査の中で検査した９人のうちの３人－－ハーバート・リード軍曹、ウイリアム・ルイス特技兵、アントニー・フィリップ特技兵－－は１１月に陸軍によっても検査された。しかし、その結果は繰り返し問い合わせを行ったにもかかわらず、数ヶ月間も保留にされたのである。

先週、陸軍当局者が第４４２中隊について新聞の質問を受けた後で、そして中隊のあるグループが独立の検査を求めたことが分かった後で、ウォルター・リード病院の責任者はリードとフィリップに対して、11月に行った検査の結果は劣化ウランについては陰性だった、と伝えた。

本紙の検査でも、リードとフィリップは陰性の結果を示した。しかし、ラモスの検査は陽性を示した。サマワで劣化ウランについての疑問を提起したのは

第４４２中隊の兵士達だけではない。

８月に、オランダ兵の分遣隊がアメリカ兵と交代するために町に到着した。オランダの新聞のレポートは、オランダ当局がサマワでの劣化ウラン弾の使用の可能性について前もって米国に質問したことを明らかにした。第４４２中隊の上級衛生兵であるホワン・ベガ軍曹によれば、オランダ兵はガイガー・カウンターで列車の車庫の回りの地域を調べて回り、そのオランダ軍の衛生兵達が彼に高い放射線レベルを発見したと打ち明けたのである。オランダの部隊は車庫に留まることを拒絶して、代わりに砂漠に宿営地を設置した、とベガは述べた。

そして２月に、日本軍がその同じ町に入ってきた後で、ガイガー・カウンターを持っている日本のジャーナリストは、放射線の数値がバックグラウンド・レベルよりも３００倍も高い、と報告した。

「我々がそこに着く前に、サマワでは多くの戦いがありました」とレイ・ラモス２等軍曹（４１歳）は言った。「その場所はとてもほこりっぽかったし、かなりひどい砂嵐が我々を襲っていました。」

ラモスは最初、うだるようなイラクの猛暑によって倒れたのだと思ったので、すぐに回復するだろうと予想した。

「私の健康は、どんどん悪くなっていきました」と、彼は言った。「私は、何とかしようと毎日訓練をしましたが、ますます弱まっていきました。両手と顔の感覚がしびれたようになり、そして、偏頭痛が絶え間なく起こるようになりました。私は、脳卒中を起こしているんじゃないかと怖くなりました。」

彼は治療のために最初バグダッド病院に送られた。ところが、神経科医が誰もいなかったので、彼はドイツに送り出され、結局は米国に送り返された。

「私は、４ヶ月間、腹部の発疹が収まりませんでした」と、ラモスは言った。「そして、今でも、私が横になる時はいつも、手の感覚がなくなるんです。」

ウォルター・リードの医者達はてこずってきた。彼らは、夜に彼の手の感覚がなくなるのを防ごうと、添え木を装着した。そして、たくさんの筋肉弛緩剤や鎮痛剤を処方してきた。ところが何の役にも立っていない。

「私には４人の子供がいます。もし私が働くことができなければ、彼らはどうなるのでしょうか?」と、ラモスは言った。彼は軍務から戻った後、ニューヨーク警察の住宅局からブルックリン第７５管区の強盗部門に異動することを待ちわびていた。「私は、私の体に一体何が起こっているのか、調査してもらう必要があるのです。」

ニューヨークのフィッシュキルにある復員軍人援護局に属する警官である、アントニー・ヨノン伍長（３５歳）は、検査で陽性の結果が出た４人のうちで劣化ウランのレベルが最も高かった、と本紙の資金提供による検査を行ったアサフ・ドラコビッチ博士は言った。

ヨノンは、吐き気、発疹と偏頭痛が始まったのはサマワでだった、と言った。「頭痛は絶え間なく起こり、どうしても止まりませんでした」と、彼は言った。「発疹は、出たり直ったりを繰り返しているようです。」

「パトロールをする時は、我々は、いつも破裂した戦車のそばを通っていました。」

彼は、その町の米軍部隊が駅の近くで、大きなドラム缶の中で毎晩屑と廃棄物を燃やしていたことを思い出した。「私たちがそれに火をつけると、煙と砂の混合物がみんなの体を覆いました」と、彼は言った。

ヨノンは、小規模な手術のために８月にイラクから引き揚げ、最初にドイツに送られた。

「彼らは我々に調査票を与えました。劣化ウランがイラクにあることさえ誰も我々に話さなかったので、劣化ウランに被曝しなかったというところに印をつけました」と彼は言った。

［第3記事］

問題の宿営地の中で

Inside camp of troubles
http://www.nydailynews.com/news/local/story/180340p-156689c.html
ホアン・ゴンサレス　（デイリー・ニュース・スタッフライター）
2004．4．3　ニューヨーク・デイリー・ニュース http://www.nydailynews.com

第４４２憲兵隊の兵士たちは、イラクへ行く前に劣化ウランについて聞いたことは一度もなかった。

彼らはただ、説明がつかないさまざまな体調不良が自分たちにふりかかったということを知っているだけである。

昨年、この中隊の十数人もの兵士たちが、さまざまな病気の治療のためにフォート・ディックス基地へ送り返された。彼らの懸念に対処する軍のやり方に失望して、彼らは、自分たちの体験についての本紙の多岐にわたるインタビューに応じた。そして彼らのうちの９人は、そのあと結局、アサフ・ドラコビッチ博士が率いる専門家チームによる検査に進んで応じた。

兵士たちによれば、彼らのうちのたいていは、昨年夏サマワに駐屯しているうちに病気になったのである。サマワは、バグダッドの南方１５０マイルにある町で、戦争の第１週目に激しい戦闘が行われた場所である。

BE VICTIMS OF AMERICA'S HIGH-TECH WEAP

They served us in Iraq. Have th been poisoned the uranium in own ammunitio

Four soldiers from a New York Army National Guard company serving in Iraq are contaminated with radiation likely caused by dust from depleted uranium shells fired by U.S. troops, a Daily News investigation has found.

They are among several members of the same company, the 442nd Military Police, who say they have been battling persistent physical ailments that began last summer in the Iraqi town of Samawah.

"I got sick instantly in June," said Staff Sgt. Ray Ramos, a Brooklyn housing cop. "My health kept going downhill with daily headaches, constant numbness in my hands and rashes on my stomach."

A nuclear medicine expert who examined and tested nine soldiers from the company says that four "almost certainly" inhaled radioactive dust from depleted American shells manufactured with depleted uranium.

Laboratory tests conducted at the request of The News revealed traces of two manmade forms of uranium in urine samples from four of the soldiers.

Sgt. Agustin Melendez DU POSITIVE

Sgt. Hector Vega DU POSITIVE

Staff Sgt. Ray Ramos DU POSITIVE

Vega for NEWS

第442憲兵隊が寝泊りしたサマワの車両庫

彼らの部隊は、ディワニヤ、カルバラ、ナジャフに短期間滞在した後、６月にこの町に入った。彼らは、町の郊外にある巨大な、ほこりっぽい、害虫などがはびこる、列車の発着場で宿営地を設営した。

彼らが言うには、まさにそこで彼らの問題が始まったのである。

「ある夜、１０人から１５人が１０３度（摂氏３９．４度）を超える熱を出し、悪寒や、その他さまざまな説明のつかない症状がおこった。」と、この中隊の衛生兵の長フアン・ヴェガ軍曹は述べた。彼によると、中隊の１６０人の兵士のうち十数人が突然腎臓結石を発症したという。

陸軍の１９９０年の研究は、ＤＵを、まさに「腎臓障害を引き起こす化学的毒性」と結びつけていた。

「私は、指揮官にこう言ったんです。『我々は、この地獄、この場所から抜け出す必要があります。ここには何か悪いものがあるにちがいありません。』」と、３４歳のニューヨーク消防局の救急救命士であるヴェガは述べた。

兵士たちは、中隊が寝起きしている場所から１００ヤード（約９１メートル）も離れていないところの平積み貨車にイラクの２台の戦車が積み込まれて運ばれていったのを思い起こしている。そのうちの１台は、砲撃されてすっかり破壊されていた。

米国防総省当局者は次のことを確認した。ＤＵ貫通体が目標にあたって爆発するとき、ウラニウム酸化物の細かいエアロゾルや放射性ダストができるので、劣化ウラン弾が命中した戦車は、戦場での放射能の最も大きな発生源の可能性があるということである。戦車が人に近いところにあればあるほど、ダストを吸引する危険性は大きくなる。

さらに、国連のイラクに関する環境報告は、昨年、次のことを警告していた。「高性能のダスト・マスクを着用していなければ、」劣化ウラン弾によって攻撃された目標物から１５０メートル以内では、「ＤＵダストを吸引する高い可能性がある」ということである。兵士たちは、ダスト・マスクを受け取ったことなど一度もなかった。

・・・・・・・・・・・・・・ニューヨーク・デイリーニュース・スクープ・・・・・・・・・・・・・・

劣化ウランに毒された？ ショッキング・レポートは暴く おそらく州兵たちはアメリカのハイテク兵器の犠牲者であろう

（続報最終）

（１）３人を解放する唯一の道は自衛隊の即時撤退。撤兵を求める緊急行動に立ち上がりましょう！

反劣化ウランの活動をしていた今井紀明さんら３人の日本人がイラクの武装抵抗勢力に拘束されました。３日以内に自衛隊が撤退しなければ彼らを殺害すると通告して来ました。

小泉首相らは「自衛隊を撤退させない」「テロリストに屈しない」等と、相変わらず強硬姿勢です。人質の命を何とも考えない全く無責任な態度です。このように「出口」をふさいでおいて、「事実確認」「救出に全力尽くす」と言っても、それは「何もしない」と同じです。全く許せません。

時間がありません。３人の解放の唯一の道は自衛隊の撤退しかありません。撤兵を求める世論を大急ぎで喚起しましょう。多くの反戦・非戦の市民グループやＮＧＯが日本政府に対する様々なアクションを計画しています。私たちも幾つかの行動をホームページに載せています。ぜひご覧下さい。

http://www.jca.apc.org/stopUSwar/

今イラク全土で起こっているのは「テロ」でなく、「再戦争」です。イラク特措法の条件すらなくなったのです。このまま駐留するのは憲法に違反するだけではなく、この法律にも違反します。自衛隊を即刻撤退させるべきです。

小泉首相の主張した「非戦闘状態」「復興支援」などどこにもないのは明かです。米軍はここ数日で何と３００人、４００人、否それ以上のイラク人を殺しまくっています。まさにイラク大量虐殺です。しかも１年前のフセイン政権との戦争ではなく、米占領軍に対するいわば“人民戦争”が始まったのです。最近の反占領闘争について米国や日本政府は、まるで一握りの「過激派」の仕業であるかのようにねじ曲げていますが、全く誤りです。スンニ派、シーア派を問わず、イラク民衆全体が米軍と自衛隊を含む外国軍の撤退を求めて立ち上がっているのです。これでも小泉首相が強引に自衛隊駐留に固執すれば、ますます自衛隊が占領軍であるというその本性をイラク民衆に見せつけることになるでしょう。

自衛隊派兵は真の人道復興支援を妨害する－－今回の事態は、イラクを支援してきたＮＧＯの人々が恐れていた通りのことです。自衛隊を派兵したために日本のＮＧＯ活動までもが敵と見なされたのです。福田官房長官の「イラクの人々の復興支援のために自衛隊は活動しているのだ」「撤退する理由などない」との見解には怒りを禁じ得ません。イラクの人民大衆にはっきりと敵視されているもとで「復興支援」などあり得ないのです。どこまでウソ・デタラメを続けるのでしょうか。彼ら３人を絶対、日米同盟の犠牲者にさせてはなりません。直ちに自衛隊を撤退させるよう政府に要求します。

（２）ニューヨーク・ディリー・ニュースのスクープ記事続報。（最終）

今号ではニューヨーク・ディリー・ニュースの第４番目の記事「陸軍はニューヨーク州兵部隊を検査する予定」（４月５日付）、第５番目の記事「州政府、兵士達の健康のために一肌脱ぐ」（４月６日付）の翻訳を紹介します。同紙のスクープ記事の翻訳はこれで最後です。

この２つの記事の中で紹介されているように、ニ

ューヨークの第４４２憲兵中隊の兵士が劣化ウランに被曝していたというニュースは、極めて大きな力で米政府を揺さぶり始めています。

（ａ）米政府、軍当局は驚きあわて、それまでの方針を１８０度転換し、病気で帰国している中隊の兵士全員の劣化ウラン調査をすると決めたようです。しかし、遅すぎます。なぜ今まで検査のサボタージュを続け、患者達を絶望させてきたのでしょうか。

今あわてて実施しようとする検査が、劣化ウラン被曝を否定し、健康被害などないと宣伝するためのもの、と考えるのは自然なことです。米政府には前科があるからです。従来のようにウラン同位体の比率を調べられないデタラメな方法で、つまり劣化ウランそのものの検出が出来ない方法をわざと採用し、「劣化ウランに被曝していない」と宣伝するのは目に見えています。私たちは、ＵＭＲＣが行ったようなＤＵ検出が可能な方法、質量分析機を用いた精密な同位体分析を行うように要求しなければなりません。

（ｂ）博士らのこの診察・分析結果は、州や米議会を巻き込んだ動きに発展しようとしています。兵士達が劣化ウランに被曝していたこと、米軍の病院の患者に対する扱いのひどさに対して怒りの声が上がっています。現地を選挙区とするヒラリー・クリントンや民主党のエンジェル議員などは政府に対する非難を発表し、帰国するすべての兵士の健康検査や適切な治療を要求しています。パタキ・ニューヨーク州知事も兵士の適正な検査、治療の要求を支持し、長期にわたるモニタリングを求める声明を出しました。

（ｃ）ニューヨーク・デイリー・ニュースの暴露スクープは、これまで劣化ウラン問題を絶対に取り上げず、黙殺してきた大手のメディアをも揺さぶっています。デイリー・ニュースの記事は全米各地の地方紙で取り上げられています。政府が帰還している第４４２中隊の兵士全員の検査へと方針転換したことはＡＰでも流され、ＣＮＮなど国内の多くのメディアが取り上げざるを得ませんでした。テレビやラジオなどもメディアもこの問題に触れざるを得ませんでした。メディアに完全に黙殺させ報道させないことで米国民の目から劣化ウラン問題を隠そうとする米政府の目論見は綻びを見せ始めました。

※APを引用したＣＮＮ
http://www.cnn.com/2004/HEALTH/04/05/soldier.testing.ap/index.html

（ｄ）ニューヨーク・デイリー・ニュースのホアン・ゴンザレス記者と、検査をしたＵＭＲＣのアサフ・ドラコビッチ博士、レオナルド・ディーツ博士、それに第４４２中隊のメンバーのインタビューが「デモクラシーナウ」というインターネットテレビで見ることができます。この中では画像だけでなく、内容を文字でも見ることができます。ここではデイリー・ニュースの記事が更に補足されています。

http://www.democracynow.org/article.pl?sid=04/04/05/1356248 （特集ページ）
http://www.democracynow.org/static/uranium.shtml （テキスト）

［第４記事］

陸軍はニューヨーク州兵部隊を検査する予定

Army to test N.Y. Guard unit
http://www.nydailynews.com/news/story/180644p-156921c.html
ホアン・ゴンザレス（デイリー・ニュース・スタッフライター）
２００４年4月5日　ニューヨーク・デイリー・ニュース http://www.nydailynews.com

フォート・ディックス基地とウォルター・リード陸軍医療センターの軍当局者は、ニューヨーク州兵の第４４２憲兵中隊の帰国しているすべてのメンバーの劣化ウラン汚染について大急ぎで検査しようとしている。

陸軍の高官たちは、「デイリー・ニュース」が検査した中隊の９人のうち４人の兵士が放射線被曝の徴候を示している事を知ってから、行動し始めた。

ヘクター・ベガ軍曹
（４８歳）

アグスティン・マトス軍曹
（３７歳）

その兵士達は昨年末にイラクから帰国したが、彼らも中隊の他のメンバーも昨年の夏以来説明のつかない病気を患っていると言う。その時彼らはイラクのサマワに配置されていた。

本紙の要請で９人の兵士を検査した元陸軍医師で核医学専門家のアサフ・ドラコビッチ博士は、彼らのうちの４人が米軍によって発射された劣化ウラン弾の爆発からの放射性のダストを吸い込んだことは「ほぼ確実だ」と断定した。

ヒラリー・クリントン上院議員(ニューヨーク選出民主党）は、「デイリー・ニュース」の調査を知って、昨日、イラクから帰還した兵士達を適切に検査していない、と国防総省当局者を激しく非難した。

「我々は、診断未確定の病気にかからせて人々を帰国させるわけにはいかない」と、クリントンは述べた。「兵士たちは派兵前と派兵後の検査プログラムを持たねばならない。」

上院軍事委員会のメンバーであるクリントンは、ドナルド・ラムズフェルド国防長官に手紙を送り回答を要求するつもりである。また帰国したすべての兵士の健康検査を要求する法律をまもなく提出するつもりだ、と述べた。

昨年の国防総省当局者との会談の時に、「我々が取り上げた問題の１つは、兵器の中の劣化ウランへの被曝と、彼らがそれをどう取り扱うつもりかという問題だった」とクリントンは述べた。

それから彼女は、兵士達は適切に検査されるだろうと保証した。

しかし、第４４２中隊の兵士達は、彼らの病気についての陸軍の扱いに失望して「デイリー・ニュース」に連絡を取ってきたのだ。

彼らのうちの６人は、劣化ウランの検査を軍医に繰り返し求めたが拒否された、と言う。

１１月はじめにDUの検査を受けた３人は、数ヶ月も結果を待たされていると言った。彼らのうちの２人は、先週ついに検査結果をもらったが、どちらも陰性だった。

２４時間分の尿サンプルの中のウラン同位元素を調べる検査には１０００ドル程の費用がかかる。

しかし、先週「デイリー・ニュース」の結果を知った後で、陸軍は方針を転換し、国内に戻っている第４４２部隊の１０数人のメンバーをすぐに検査するように命じた。

ほとんどがニューヨーク市の警官や消防士や刑務官からなる中隊の残りは今月の末まで帰国しない予定である。

「彼らは、ここフォート・ディックス基地にいる我々すべてに今日の午後１時までに２４時間の尿サンプルを提出するように命じた」と、中隊の兵士の一人は金曜日に言った。

金曜日の遅くに、国防総省スポークスマンのオースチン・カマチョは、第４４２部隊の兵士に対する新たな検査が命じられたかどうかについては確認も否定もできない、と述べた。

「理論的には、これらの兵士たちが害を受けるような被曝を受けたとは想像し難い」と、カマチョは述べた。彼らの誰一人直接の戦闘の間に戦車の内部にはいなかったから、というのだ。

DUに関する陸軍の研究は、DU弾の破片で負傷したか、あるいはDU弾が命中した戦車の中に入って直接に放射性のダストを吸い込んだ兵士だけが危険だという結論を出している。

その場合でも、第１次湾岸戦争中のこのようなケース約７０人についての研究は、いかなる長期的な健康上の障害も示さなかった、とカマチョは述べた。

しかし、DU兵器の使用を批判する医療専門家たちは、劣化ウランに関する陸軍自身の初期の研究の一部と同様に、劣化ウランへの被曝が腎臓損傷を引き起こす可能性があると言う。これらの専門家によると、いくつかの研究は、劣化ウランがマウスにガンと染色体の損傷を引き起こすことを示している。

劣化ウランは、ウラニウムの濃縮過程に出る廃棄物で、米国と英国の軍隊で１５年以上にわたってある種の砲弾と戦車の装甲板として使われてきた。それは鉛の２倍という極端に大きな密度を持つことが評価されている。

ヨーロッパと日本で大きくなる論争の中で、昨年、欧州議会は劣化ウランの使用のモラトリアムを呼びかけた。

「走るたびに、喉が焼け、胸が締め付けられるような感じがしました。」

ニューヨーク州兵、第４４２憲兵中隊のメンバーであり、また市民生活では市の刑務官であるアグスティン・マトス軍曹はイラクのサマワにいたときのことを非常に鮮明に記憶している。

「その場所は不潔でした；ほとんどの窓は壊されていました；汚物、油脂と鳥のフンがそこらじゅうに散らばっていました」と彼は述べた。「私はそのような場所に市の囚人を収容しないでしょう。」

彼は、列車の発着場の近くの砂だらけのトラックを毎朝約３マイル走らせるよう命令されたことを思い出した。

「走るたびに、喉が焼け、胸が締め付けられるような感じがしました」と彼は語った。

今では、３７歳のマトスは、彼の症状が、使用された米国の劣化ウランでできた砲弾からの放射性ダストを吸い込んだせいかもしれないと考えている。

「デイリー・ニュース」の調査によれば、このロング・アイランドにすむ兵士は、DU汚染の検査で陽性の結果がでた４人のイラク戦争帰還兵の一人である。

この兵士達と他の第４４２部隊のメンバーは、彼らがサマワに駐留していた昨年の夏に始まった身体的疾患に苦しんでいる、と述べている。

第４小隊の第２分隊に配属されたマトスは、中隊の残りに２週間先行して、昨年６月にサマワに到着した。

彼の先発隊は、彼らの指揮官であるショーン・オドネル大佐から、サマワ市街地のはずれにある列車修理場の巨大な発着場を中隊の兵舎として準備するように命令されていた。

中隊全体が到着すると、各小隊は発着場の中にそれぞれの空間を割り当てられた。その発着場はフットボール場よりも大きかった。

修理作業用のピットをまたいだ１台の蒸気機関車と空の車両１輌が、寝る場所の中央に置かれており、２つの小隊は列車の一方の側に沿って、他の２小隊は別の側に沿って寝るよう指定された。

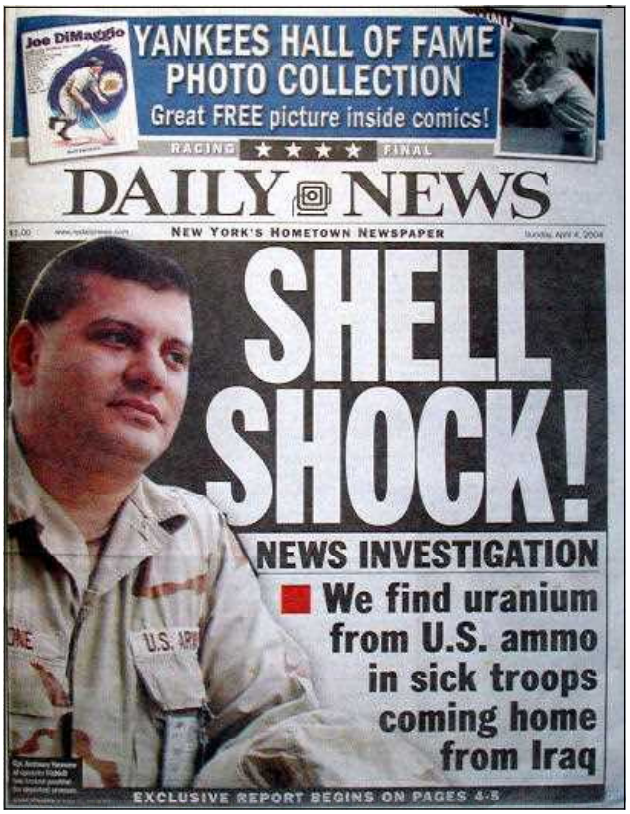
発着場のすぐ外で、２台のイラクの戦車－－１台は打ち抜かれて破壊されていた－－が平台型の貨車の上へ引き上げられていた。

兵士達によれば、中隊は人手がとても不足していたので、指揮官は兵士がもはや肉体的に任務を果たせなくなった場合にだけ送り返した。

マトスはジープ事故で負傷した肩の手術のために、昨年米国に送り返された。

帰国以来、彼は絶え間ない頭痛、疲労、息切れ、吐き気、目まい、色々な痛み、過度な排尿を経験するようになった。彼が最近、尿の中に出血を発見したので、ウォルター・リード陸軍医療センターの医者は彼にCTスキャンを受けさせたところ、肝臓に小さな病変を発見した。

１９９０年の陸軍の研究は、DUと「腎臓損傷を引き起こす化学的毒性」を結びつけた。



「私がイラクに向けて出発する前に、彼らは私の目を検査しましたが、よく見えていたのです」と、マトスは言った。「今では、他のことに加えてなおそのうえに、視力が悪くなりました。」

DUの検査で陽性の結果が出た中隊の別のメンバーは、ヘクター・ベガ２等軍曹（４８歳）である。彼はブロンクスの郵便職員を退職し、２７年間州兵であった。

足の手術のためにフォート・ディックスに送り返されて以来、ベガは不眠と絶え間ない頭痛に耐えた、と述べた。そして、多くの病気にかかった兵士のように、「私は排尿をコントロールできず、３０分ごとに出てしまう」と、ベガは明かした。

ある日、サマワの南方への数時間の移動の間に、彼ともう一人の兵士は打ち抜かれて破壊された２台のイラクの戦車を確認し、写真を撮るために道ばたに止まった。

「私たちは戦車にまっすぐ近づいて行き、それらに触ることを何とも思いませんでした」と、彼は述べた。「私は劣化ウランについて何も知らなかったのです。」

彼らが寝ていたその列車の発着駅についていえば、ベガはそれを「むかつくような場所でした。油、汚物と鳥のフンが至るところにあり、私たちみんなの周りを虫が這っていました」と思い起こす。

それから、頻繁に砂嵐があった。

「私たちが眠るときや食事の時に、砂嵐が駅の中のみんなにほこりのようなものを吹きつけていました。それは目に見えるくらい濃かったです。」

［第５記事］

州政府、兵士達の健康のためにひと肌脱ぐ

Gov goes to bat for G.I.s' health
http://www.nydailynews.com/front/story/181048p-157154c.html
ホアン・ゴンザレス　（デイリー・ニュース・スタッフライター）
２００４年４月６日(火曜日)　ニューヨーク・デイリー・ニュース http://www.nydailynews.com

パタキ知事は昨日、イラク帰還兵達によりよい健康診断および治療を提供するよう国防総省に求めている地元の指導者達のますます大きくなるリストに加わった。

知事のアピールは、イラクで任務に就いていたニューヨーク州兵部隊の９人の兵士のうち４人が劣化ウランの検査で陽性の結果が出たことを「デイリー・ニュース」が日曜日に公表した後で出された。

「我が州の陸・海軍部局は、陸軍の医療部隊に対して、直ちに適切な検査と必要な治療を行うよう、そして兵士達の健康の長期的なモニタリングをするよう、強く要請している」と、パタキ氏は声明で述べた。

その９人の米兵は、全員がロックランド郡オレンジバーグに基地を置く４４２憲兵中隊に所属するが、彼らと中隊の他のメンバーがイラクのサマワに配備された昨年夏に病気になったと言う。

その兵士達は、「デイリー・ニュース」の要請で、独立したウラン専門家、アサフ・ドラコビッチ博士によって診察され検査された。彼は、４人が米軍によって発射された劣化ウラン弾によって放出された放射性のダストにさらされたのは「ほとんど間違いない」と結論を下した。

兵士達の何人かは、ウォルター・リード軍医療センターとフォート・ディックスの医者達が劣化ウランの検査をすることを数ヶ月の間拒否したと述べた。この劣化ウランというのは、第１次湾岸戦争以来、戦車を貫通する砲弾として米軍によって使われて来たものだ。

日曜日に、ヒラリー・クリントン上院議員は、国防総省当局者がイラク帰還兵士を適切に検査していないと激しく非難し、検査を義務付ける法律を提出すると約束した。

ニューヨークデイリー・ニュース 2004,4,5発行

昨日、２人の民主党議員－－ニータ・ロウィ、彼女の選挙区に第４４２中隊は基地を置いている、そ

れからブロンクスのエリオット・エンジェルーーが、その兵士達がどこに住んでいるのか答えるよう要求した。

「その兵士達が昨夏来病状に不満を訴えたときに、陸軍は彼ら兵士達自身の苦情に応えるべきであったのであって、デイリー・ニュースにスクープさせるべきではなかった」と、民主党議員エンジェルは述べた。

彼は付け加えた。「国防総省は、問題の範囲を決めるために、これらの男女を速やかに治療し、すべての病気の不満を調べなくてはならない」と。

ロウィとエンジェルは、医療検査プログラムについて陸軍に説明を求める手紙をラムズフェルド国防長官に送る計画だ、と発表した。

一方で、フォート・ディックスの広報担当者は、現在フォート・ディックスにいる第４４２部隊のメンバー全員が劣化ウラン被曝についての検査を受けていると、昨日認めた。

中隊全体は、昨年の復活祭にイラクに配備されたのだが、今月末までは帰国する予定はない。

・・・・ニューヨーク・デイリーニュース・スクープのその後・・・・

議会を巻き込んだ劣化ウラン被曝米兵の闘い

米軍当局のサボタージュと猛烈な巻き返し

UMRCのアサフ・ドラコビッチ博士の来日から2ヶ月が過ぎた。ニューヨーク・デイリー・ニュース（NYDN）が、イラク戦争に参加した9人の州兵の内4人が劣化ウランに被曝したという4月4日から3日間にわたるスクープをすっぱ抜いて以降、イラク戦争参加兵士の被曝問題が米国内を大きく揺さぶっている。最初のスクープ記事については、イラク戦争劣化ウラン情報No15～.17にかけて紹介した。本号では、スクープ以降も断続的に出されているNYDNの記事を中心に、4月下旬から5月初めにかけてのこの問題をめぐる米国内の動きをまとめて紹介する。

(1)　NYDNのスクープは米国内で大きな社会的波紋を引き起こした。何よりもイラクから帰ってきた多数の兵士達が、劣化ウランに被曝していることへの不安から軍当局に検査を要求したのである。すでに800人が検査を受け、予約待ちが数百人いる状況である（NYDN4／19）。本来、自国軍兵士やイラク住民に実際に犠牲を強いることはもちろん、このように健康に深刻な不安を与えるような残虐で特殊な核兵器を使うこと自体が反人間的非人道的、戦争犯罪に値するものである。米軍はこれらの兵士の健康への不安に答え、きちんと対処する義務がある。

(2)　NYDYのスクープで大きな注目を浴びたために、米軍は従来のような形で劣化ウラン被曝をウヤムヤにすることはできなくなった。すなわち第442憲兵部隊の9人のように、検査はするがずるずる引き延ばす、たとえ検査しても結果を教えない、半年も放置するなどという、患者を患者とも思わないようなデタラメなやり方、サボタージュはもはや通用しなくなったのだ。

米国世論は、米軍がイラクからの帰還兵の正当な要求を無視して、兵士達をまともに扱っていないということを知ってしまった。米軍は弁解に大わらわになったのである。現に被曝した兵士がいる。同じ部隊の他の兵士は被曝していないのか。戦闘に参加していない憲兵部隊が被曝したのだ。戦闘に参加した部隊に被曝者がいるはずだ。これは当然の疑問であり米軍が答えざるを得ない要求なのである。世論を喚起することによって、劣化ウラン被曝を米軍兵士全体、更には米国民全体の関心事にする。そうすることによって議会を動かし、軍当局を動かす。――ここにNYDYのスクープの最大の意義がある。

NYを選挙区に持つヒラリー・クリントン上院議員は上院軍事委員会の委員でもある。彼女は素早くこの問題に関心を抱き積極的に取り上げた。彼女は被曝兵士たちと会って、彼らの実情を聞き、軍の扱いが不当であること、適切な検査を行うように軍当局に要求した。上院の軍事委員会でのヒラリーの要求に対して、マイヤーズ統合参謀本部議長は事態の是正を表明せざるを得なくなった。サボタージュという形で自軍兵士の劣化ウラン被曝を無視してきた軍当局は何らかの対応を迫られたのである。（NYDN4／20、4／21）

(3)　しかし、そこまでである。スクープから1ヶ月も経たないうちに軍当局は猛烈な反転攻勢に打って出た。早くも4月末から、あくまでも精密な検査（ウラン同位体ごとの分析）を拒否する姿勢を前面に押し出したのである。UMRCとドラコビッチ博士がやったようにウランの同位体ごとの検査をしなければ劣化ウランへの被曝を明らかにすることはできない。

そしてこの精密検査をやらないための新方針、それが超高濃度の「ガイドライン」、つまり「ウランの総濃度が268ナノグラムを超えなければ同位体ごとの検査はしない」というべらぼうな“検査基準”を指し示すことで検査のハードルを思い切り上げ、検査対象者をほとんど全員切り捨てることであった。それは表向き「科学的」な装いをした被害者切り捨てに他ならない。以前のサボタージュ対応では、世論の非難に対応できなくなり、専門家や研究所を総動員して反撃

せざるを得なくなったのである。それだけ軍当局の危機感は強くなったと言えるだろう。(NYDN4／19)

268ナノという数字は、通常の米国人の平均10ナノグラム／リットルの25倍以上だ。早い話が検査の全面的な切り捨てである。こんな超高濃度の対象者が大勢いるはずがない。いたとしてもそれは戦闘で負傷し体内に破片などを持つ特異なケースだけである。逆に言えば、兵士たちのウランの尿中濃度が通常の25倍にまで上がっていても、劣化ウランが含まれるかどうかの検査もせずに全部切り捨てているということである。こんな高い基準で行われているとなれば、劣化ウランによる被曝兵士など存在しないのは当然だ。

軍当局は、今のところこのデタラメな268ナノ基準を撤回するつもりはないようだ。ラモス軍曹に対する軍の再検査の結果は、「陰性だ」という。しかし、本当に陰性なのだろうか。おそらくそうではない。実際には調べていない、あるいは調べることができないのに苦し紛れに「陰性だ」と言っているに過ぎないのではないか。ラモス軍曹に関する検査結果の公開請求で、真実が明らかになってきている(NYDN4／19)。

分析を担当した二つの研究所のうち、一つはウラン同位体ごとの検出そのものができない。もう一つは検出しても誤差が大きすぎて天然ウランと劣化ウランが区別できず、劣化ウランが含まれているかどうか判定できなかったという。こんなデタラメなやり方で「陰性」と断定するのは大間違いである。「測定できなかった」「測定するつもりはない」と正直に告白すべきである。現にラモス軍曹の場合は、UMRCが精密な調査・分析を行い劣化ウランが検出されたのである。ラモス軍曹のケースでさえこの有様だ。他の兵士に対してまともに検査をしているとは到底思えない。

問題の核心は劣化ウランに被曝したかどうかであり、それを明らかにできるのはウラン同位体比が測定できるかどうかだ。この方法を採用せずして劣化ウランの検査をしたと言うべきではない。米議会の中でも米軍に対する追及は強まっている。軍はなぜUMRCが行ったのと同じ検査が行えないのか。ICP-MSを使った精密な検査をせよ。それをせずに被曝兵士を切り捨てるのは許されない等々という怒りと要求が強まっている。

確かに、NYDYのスクープの衝撃で軍当局は「希望者には尿のウラン調査を認める」との通知を軍の病院に出した。しかし軍当局の腹は、268ナノというとてつもない高い値を正常値の上限に持ち出して「ウランの総濃度が基準値内だ」「だから体には影響はない」と切り捨てるつもりなのだ。米軍はウラン被曝によって健康被害が出ていることを絶対に認めようとしない。もしも認めれば膨大な除染費用の負担、損害賠償の負担にさらされるからであり、下手をすれば劣化ウラン兵器の使用が禁止されてしまう。そう考えているからである。

しかし、天然ウランと劣化ウランは根本的に異なる。確かに体内には外的環境から天然ウランが取り込まれ、順次尿に出てくる。しかしたとえ少量でも劣化ウランは軍の作戦で被曝したものであり、それによる健康被害は人為的に付け加えられた“追加的被曝”である。

さらに、天然ウランと、燃焼しセラミック状態になった劣化ウランとでは人体内部への被曝影響のメカニズムが全く異なる。尿中の天然ウランと比べてレベルが低くても、劣化ウランは不溶性のかたまりが肺や他の臓器に入って、そこで周辺の細胞にずっと放射線を出し続けることになる。周辺が受ける被曝線量は極めて大きな量になる。すなわち未来に向かって永遠に被曝を押し付ける特異な作用を与えるのだ。そして、ウランは粒子の吸入による体内被曝こそ最も危険であり、その内部被曝の真の危険性はまだ全体像が明らかにされ尽くしてはいない。まさにその点こそが、ICRPの被曝モデルが過小評価をしているところであり、まして米軍の基準など到底当てはまらない領域なのである。

(4)　軍当局は劣化ウランと病気との因果関係を否定する様々な議論を持ち出している。その因果関係否定の急先鋒であり、被爆者切り捨ての前面に出ているのがメリーランド・アバディーンにある陸軍の健康増進・予防医学センターのマーク・メランソン中佐である。彼は、「劣化ウランには安全レベルがある」(閾値)、「放射線が体内で均等に影響を及ぼす」という2つの議論をふっかけている。(NYDN5／6)

軍の劣化ウラン弾による健康被害否定論の最先頭にいるのが、軍の劣化ウラン問題の責任者である軍の配備健康支援局次長マイケル・キルパトリック博士である。彼によれば、軍の検査が指し示す結果は「劣化ウランの被曝が病気を引き起こさしたわけではない」というものである。彼もまた因果関係を否定しているのだ。(AP4／30)

(5)　今回のNYDNのスクープを調査・分析面、理論面からバックアップしているのがUMRC、すなわち私たちがカンパ・キャンペーンを行っている米の独立研究機関、その代表者であるアサフ・ドラコビッチ博士である。

UMRCの調査・分析が明らかにしたのは、米英軍が劣

化ウラン／ウラン兵器を使用したことによって、イラク全土が放射能で汚染されているという事実である。推測・推定で言っているのではない。学術的な調査方法を採用し、データとして具体的な分析結果を出し、それが学術論文として学会に提出され受理される。UMRCはそういう“厳然たる事実”と“データ”を突き付けたのである。

本来なら国連やWHOなどの国際機関が大量の人員と費用を掛けてやらねばならない調査・分析である。イラクから帰還した米英兵士、その他有志連合の兵士達、そして何よりもイラクの住民や子どもの全面的で継続的な調査が必要である。彼らは全て米英軍の劣化ウラン戦争、新型放射能兵器の犠牲者である。イラク民衆を殺しまくっている米兵についても、この問題では切り捨てを認めてはならない。現在もまだ、米の大量の劣化ウラン／ウラン兵器使用によってイラク中にまき散らされた劣化ウランの微粒子はイラクの土、水、空気、そして人間を汚染し続けているのだ。イラク民衆−米英軍兵士−有志連合軍兵士。彼ら全員の徹底的な調査・分析を通じて放射能汚染の実態と戦争犯罪を暴露すること、最後的に劣化ウラン兵器を禁止することが必要である。

(6)　米軍兵士で起こった劣化ウラン被曝は自衛隊員にも無縁ではあり得ない。自衛隊の第1次イラク派遣部隊は、第2次部隊と交代し帰国した。サマワから帰還した陸上自衛隊の兵士達に健康被害は出ていないのか。たとえ今は出ていないくても、今後も出ない保証はない。彼らは上述した被曝米兵達が展開していたまさにそのサマワに配備されていたのだ。UMRCの調査によれば、米兵士のみならず、バスラの住民、バグダッドの住民も被曝しており、さらに調査のためにわずか2週間イラクに入ったUMRCのメンバー自身も劣化ウランに被曝したことが明らかになった。サマワに限らずイラク全土の都市で被曝する可能性はあるのだ。

政府は口から出任せを繰り返している。自衛隊員は携行している個人線量計で「被曝していないことが確かめられた」と。冗談ではない。ウランの微粒子を吸入した場合、外部からのガンマー線を測る線量計で被曝を測定できるわけがないのだ。

イラク派兵の自衛隊員が本当に被曝しておらず、将来もそのことによって健康被害が生じないことを確認するためには、尿中のウラン同位体を測定し、劣化ウランが取り込まれていないことを確認するしかない。一度だけではない。継続的な健康管理と検査をやる必要がある。政府は自らの責任でこの精密な検査体制を整備すべきである。それなしに、自衛隊員は被曝していない、安全だと言うべきではない。

私たちは今後もこの問題を政府に追及していきたい。米英軍で大量に発生し今も無責任に放置され苦しんでいる多数の湾岸戦争症候群にかかった一般兵士たち、この深刻極まりない放射線障害が、米軍やNATO軍に引き続いて、日本の軍隊に初めて起こる可能性がある。イラクの地に、しかも激しい戦車戦が戦われた南部にあるサマワに配備されたという事実は、この劣化ウラン被曝の危険性を確実に高めることになる。

あのデタラメな小泉首相の政治的延命のため、政府与党や財界の石油利権・復興利権や中東覇権への食い込みの野望のために、人身御供としてイラクに送り込んだ自衛隊員達を切り捨てることは許されない。この問題は、これら自衛隊員が侵略軍として一方的にイラクに派兵され、現地で米英占領軍、米英多国籍軍の一員として殺戮と破壊に加担することとは相対的に別のことである。自衛隊員はイラク民衆に対する加害者である。しかし、劣化ウランに被曝するとなればその自衛隊員は政府の誤った軍事外交政策の被害者でもあるのだ。

ニューヨーク・デイリー・ニュース

G.I.達は軍にウラニウムの検査を受けたいと表明

G.I.S PRESS ARMY FOR URANIUM TEST
http://www.nydailynews.com/front/story/185258p-160518c.html
ホアン・ゴンザレス　２００４年４月１９日

本紙［デイリー・ニュース］がニューヨーク州兵部隊の4人のメンバーが劣化ウランで汚染されていることを明らかにした後、イラクから戻っている数百人の兵士が放射線被曝について検査をするように軍に依頼した。すでに800人にも

のぼる兵士（G.I.）達が24時間尿のサンプル（試料）を軍に提出した。そして、ウォルター・リード陸軍医療センターによると、数百人が予約を待っている。

しかし先週、ウォルター・リードの医師が兵士達に提供したという最初の公式の分析結果の1つを再検討した何人かの独立のウラン専門家達は、陸軍の検査方法が適切なものであるか否かに疑問を持っている。「彼らは、どう見ても正確とはいえない装置を使っている」と、グレン・ローレンス教授は言った。彼はロング・アイランド大学の生化学の教授である。「彼らが使った道具は、正確な測定値を与えるほど精巧でない」と、レオナルド・ディーツ氏も認めた。彼はノールス原子力研究所を退職した科学者で、ウラニウム同位体の測定装置の一つを発明した。

検査の要求は、米軍が発射した劣化ウラン砲弾からのホコリによって第442憲兵中隊の4人の兵士が放射能に汚染されたという本紙の調査に誘発されたものだ。兵士の一人、レイ・ラモス2等軍曹は、先週ウォルター・リード病院で陸軍の検査から返ってきた彼の尿の検査結果は陰性だったと聞かされた。

ラモスは、説明のつかない病気に数ヶ月苦しんでおり、彼の尿を分析した2つの軍の実験室に報告のコピーを要求した。1つの実験室は、サンプルの中の種類の異なるウラン同位元素は「検出できない」と報告した。もう一つの実験室は、分析の際の誤差の比率が大きいのでラモスの尿のウランが天然ウランなのか、劣化ウランなのか、それとも濃縮ウランなのか確実に言うことは不可能だと記載した。

「我々は、このデータが報告される方法が人を惑わせるものだいうことを知っている。」と、マーク・メランソン中佐は言う。彼は第2の実験室で保健物理のプログラムの責任者をしている。主な問題は、ラモスから総量でどれだけのウランが見つかったかである、とメランソンは言う。そして、彼の（尿中の）ウランの総量は、1リットルあたり6.3ナノグラム（ナノ$^{グラ}_{ム}$は10億分の1$^{グラ}_{ム}$）だった。その値は「疾病管理予防センター（CDC）によって報告された摂取規定量の範囲内にあり、安全だ。」、とメランソンは言った。メランソンによれば、陸軍は天然ウラン総量濃度が1リットル当たり268ナノグラム以上でない限り、劣化ウランの検査のためにサンプルを分析することさえしない。

「それは並み外れて高い値での切り捨てだ。」と、トム・ファジイ博士――シナイ山医療センターの病理学者は言った。陸軍の方法に対する批判を聞いたとき、メランソンは「追加のチェックとして、我々は独立した分析のためにCDCにもサンプルを送っている」と言った。軍の劣化ウラン検査の仕方に対して詳しい調査が行われたのはこれが初めてではない。去る12月、2人の下院議員が会計検査院に（劣化ウラン検査）プログラムの調査を要求した。チロ・ロドリゲス議員（民主党・テキサス）とロベルト・フィルナー議員（民主党・カリフォルニア）は、1991年の湾岸戦争の時の兵士の劣化ウラン被曝について、以前に国防総省が調査官を欺いたと攻撃した。

ニューヨーク・デイリー・ニュース

クリントン、G.I.達の健康検査を後押し

CLINTON TO PUSH G.I. HEALTH TESTS
http://www.nydailynews.com/news/wn_report/story/185408p-160678c.html
テイマー・エルーゴバッシー　２００４年４月２０日

ヒラリー・クリントン上院議員は今日、国防総省の当局者に、イラクから帰っている兵士の放射能レベルを追跡するプログラムを強化するよう求めるだろう。クリントンの行動は、イラクで勤務したニューヨーク州兵部隊の兵士の9人のうちの4人が劣化ウランの検査で陽性の結果がでたことを示した本紙［デイリー・ニュース］の調査をフォローするものだ。

上院の軍事委員会の公聴会で、クリントン議員（民主党・ニューヨーク）は、ポール・ウォルフォビッツ国防副長官に、なぜイラクに向かう兵士達は事前と事後に適切に検査をされなかったのか質問する予定だ。「有毒物質に囲まれ、劣化ウランの陽性の結果が出ることになった放射線被曝は疑問を提起している。」と、クリントンは昨日言った。

9人の兵士達は、全員がロックハンド郡のオレンジブルグに基地を置く第442憲兵中隊に属しているが、彼らと他のメンバーは昨年の夏にイラクのサマワの町に配備された時に病気になったと言う。クリントンは、問題が確認されればすぐに、派兵前と派兵後のスクリーニングと、より厳格な健

康状態の追跡を命じる法律を提出すると予想されている。「過程を真剣に考慮するまでは、何が兵士達が罹っている症状を引き起こしているのか知りようがない」と、彼女は言った。

ニューヨーク・デイリー・ニュース

ヒラリーが将軍を追及、G.I.達が勝利

HIL TAKES BRASS ON & G.I.S WIN
http://nydailynews.com/front/story/185906p-160988c.html
ワシントンのリチャード・シスクおよびニューヨークのマキ・ベッカー
デイリー・ニュース・スタッフライター　２００４年4月２１日

米軍トップの将軍は、昨日、イラク戦争でウラニウムのホコリに被曝したかも知れない兵士のスクリーニングと追跡を改善するためにシステムに活を入れると誓約した。「我々は、兵士のために一流の仕事をしなければならない」と、リチャード・マイヤーズ将軍は言った。

統合参謀本部の議長であるマイヤーズは、議会の公聴会でヒラリー・クリントン上院議員(民主党・ニューヨーク)によってこの問題が明らかにされた際に誓った。「あなたは確かに正しい。」、将軍はクリントン議員に言った。議員は、帰国して検査を受けた兵士の未消化分の検査を解消するために、軍の「医学的追跡と検査」の方法の性能向上を要求した。

「我々は、物ごとを見落としていないことを確かめるために監視をする必要がある。」と、マイヤーズは言った。システムの短所は、ニューヨーク州兵第442憲兵中隊の9人の兵士達が昨年イラクから帰ってから説明のつかない病気にかかっていると言い私たちのところにやってきた後で本紙[デイリー・ニュース]の一連の独占リポートによって暴露された。本紙の依頼で行われた独立の検査は、彼らの内の4人が劣化ウランの検査で陽性だったと結論づけた。

劣化ウランは比重が大きいために、砲弾と装甲車両の装甲に使われる。1990年の陸軍による研究は、劣化ウランに「腎臓損傷を引き起こす化学的毒性」があるとした。

その兵士達は、軍の上層部がついに彼らの病気を深刻にとらえていると聞いて元気づけられた。「それはすばらしい」と、アウグスティン・マトス軍曹は言った。彼は劣化ウランのテストで陽性だった。「すばらしい、彼女[クリントン]はうまく我々に注意を向けてくれた。」しかし、ホアン・ベガ軍曹は、「それが現実になってから信じることにするよ」と言った。

クリントンがニュージャージーのフォート・ディックス基地で治療を受けている数百人の兵士――彼らは汚染を受けたかも知れないので検査を待っている――が検査待ちであると告発した時、マイアーズはドキッとしたようだった。「私はそういう報告を見たことはない。」とマイヤーズは言い、未消化の検査の調査を約束した。

「我々の軍隊はもっとよい報いを受けるに値する」と、クリントンはマイヤーズに言って聞かせた。クリントンにせき立てられたマイヤーズは、軍の検査で見逃されているごく微量の劣化ウランを見つけているドイツや日本で使われている方法を調査するつもりだ、と言った。

ニューヨーク・デイリー・ニュース

米国防総省のウラニウム否定

PENTAGON'S URANIUM DENIAL
http://www.nydailynews.com/news/col/story/187818p-162614c.html
ホアン・ゴンザレス　２００４年4月２７日

米国防総省は、元第3装甲師団の戦車運転手ジェリー・ウィートは劣化ウランの被曝による病気ではないと言う。かつてアパッチ攻撃ヘリに劣化ウラン製の対戦車砲弾を積んだことがあるマーク・ゼラーもそうではないと言う。そしてダグ・ロッキー、彼は退役した陸軍少佐で湾岸戦争の後で劣化ウランの危険を初めて評価したのだが、国防総省はロッ

キーは科学的に見当違いをしていると言う。

この3人は湾岸戦争で胸を張って国のために働いた。そして3人全員が説明のつかない病気になって帰国した。湾岸戦争に行く前に、彼らは劣化ウランのことなど聞いたことがなかった。その金属は最強の装甲さえ貫通する能力がある砲弾を製造するのに使われている。 湾岸戦争で初めて使用され、今ではイラクで広く使われている。そして、イラク戦争から帰還した兵士達が劣化ウラン汚染の検査で陽性の結果となったのだ。

ウィートは、彼のブラッドリー戦車が誤射によって2度直撃弾を受けたとき、恐ろしい衝撃を直接経験したと言う。「それは、私のヘルメットを吹き飛ばして、そして私を車両の前部に突き飛ばした」と、ウィートは言った。「後で、私の装備と服は黒いホコリで覆われた。」 砲弾の爆発は、弾丸のごく小さい幾つかの破片を彼の頭と身体に残した。

「誰も、我々にその時[劣化ウラン]が命中したと話してくれなかった。」と、ウィートは言った。「私は2、3日間、晩は戦車で眠った。全く心配しなかった。」数週間後に、ウィートはドイツの基地に送られた。そこでは彼の妻と3ヶ月の息子が生活していた。それからだ、彼の問題が始まったのは――ひどい頭痛、激しい腹の痛み、または複合した痛み、呼吸器の問題と慢性疲労。彼は食べ物を吐かないではいられなかった。彼の体重は、220ﾎﾟﾝﾄﾞから160ﾎﾟﾝﾄﾞまでがた落ちした。1991年11月に退役して、彼はニューメキシコ州のラス・クルスの家に帰ったが、職に就くことができなかった。

その次の年、彼の父は、医者が彼の体から取り出した砲弾の検査の手配をした。ウィートはようやくその時に、放射性の砲弾で撃たれたことを知ったのだ。彼は、劣化ウラン汚染について検査するように陸軍と闘った。独立の検査は、彼が劣化ウランに被曝したことを示した、しかし、ウィートは軍医が1993年に天然ウランについてだけ検査をしたと言った。そして医師は彼に、通常レベルの上限値だと告げた。それ以来ずっとウィートは、劣化ウランに被曝した数千人の湾岸戦争帰還兵のうちで陸軍が研究を続けている小グループの一部となっている。

ゼラーは、第101空挺師団の第229ヘリコプター大隊に勤めていた。彼は放射能で汚染されているイラク南部地域で過ごした。「帰国したとき、私の毛が抜け落ち始めた。」と、ゼラーは言った。「私の舌はいつも腫れ上がっている。私は頭と首の痛み、あらゆる種類の腸の不具合のため、あまり食べることができない。」ゼラーはまた短期的な記憶喪失に悩んでいると言った。そして、血液検査の結果は、彼の赤血球細胞の染色体が損傷を受けていることを明らかにした。軍医は彼が慢性の疲労に苦しんでいると話す。ジョージアに住んでいるゼラーは、戦争で肉体的な負傷をしなかった。しかし彼もまた、陸軍の劣化ウラン監視プログラムに加わることが認められた。

そして、ロッキー。1991年3月に、劣化ウラン砲弾が命中し汚染された米国の車両の除染を監督するために、陸軍は彼をサウジアラビアに送った。ロッキーは、兵士達が「Tシャツと半ズボンで、何の防護もなしに」放射性の車両を除染し、汚染された可能性のある場所で眠っているのを確認した。彼は適切な道具を取り入れて、戦車とトラックを除染した。ありとあらゆる用心にもかかわらず、ロッキーは、彼と彼のチームの何人かのメンバーが汚染されてしまった、と言った。「我々全員が直ちに呼吸器の、それから腎臓の不具合にかかった。」と、ロッキーは言った。彼は、陸軍当局が2年間も彼が高い放射能レベルにあることを話さなかった言う。そして彼は、重要な記録がなくなったと主張する。

「私は、ロッキーが国に尽くしたことは尊敬する」と、マイケル・キルパトリック、国防総省の配備健康支援局次長は言った。しかしキルパトリックは、ロッキーが湾岸戦争での戦闘損傷評価チームにおける彼の役割を誇張している、と言う。「ロッキーは人々にたくさんの不安と心配を吹き込んでいる」と、キルパトリックは言った。「科学は彼が言うことを支持しない。」帰還兵のグループの研究を陸軍が続けた結果、如何なる「臨床上重要な健康結果」もない、例えウランのレベルが高い兵士であろうともだ、とキルパトリックは語った。

AP通信

米国防総省：「ウランはニューヨークの部隊に危害を加えなかった」

Pentagon: Uranium Didn't Harm NY Unit
http://www.military.com/NewsContent/0,13319,FL_uranium_043004,00.html
２００４年４月３０日

ワシントン－イラクで劣化ウランに被曝した後に病気になったと言った州兵憲兵部隊のメンバーはこの金属（ウラン）の異常な水準を示さなかった、と米国防総省当局者は木曜日に語った。しかしその結果は、兵士の誰ひとりとして安心させなかった。

ニューヨーク州のオレンジバーグに基地を置く、442憲兵中隊のメンバー達は、頭痛、痛みと不眠の苦痛を訴えた。私的な検査は今月、彼らの4人の尿中に健康に害のある水準のウランが存在することを示した。

米国防総省によると、軍による更なる検査は劣化ウランの被曝が病気の原因ではないことを示したという。

「それらの兵士全員が、尿中のウラン濃度は通常の水準だった。」と、配備健康支援局次長のマイケル・キルパトリック博士は述べた。

劣化ウランは、原子炉燃料あるいは核兵器の材料を作るための濃縮ウランの副産物として生み出された硬くて重い金属である。それは、天然ウランよりも約40パーセント放射能が低い、とキルパトリックは言った。

米軍はM1エイブラムス戦車とA－10ジェット攻撃機が敵の戦車の装甲版を貫通するために発射する砲弾にこの劣化ウランを使用している。そのことが兵士や民間人に不必要な危険を引き起こすと非難されている。「これがあなたの体の外にある限り、全く危険はない。そして、それを環境から体内に取り込む可能性は極めて小さい。」と、キルパトリックは言った。

ほとんどの研究は、劣化ウランへの被曝が兵士に害を与えないことを示している。しかし、2002年の英国王立学士院による研究は、十分多くの劣化ウランを摂取するかまたは吸い込んだ軍人がおり、腎臓損傷を経験するかも知れないと表明した。同報告は、その結果が結論に達したものではないと警告し、劣化ウランに被曝した兵士達の長期の研究を勧告したのである。

イラクから帰還している約1,000人の兵士が、劣化ウランの被曝の検査を受けた。それらのうちで、3人は尿のサンプルで健康に害のある水準を示した。この3人は全員、体内に破片が入っていた、とキルパトリックは述べた。

兵士達は劣化ウランの検査を受けるかどうかを決めなくてはならない。第442部隊の全てのメンバーは希望すれば検査を受けることができる、とキルパトリックは言った。部隊の27人のメンバーが今までのところ検査を受けた。

中隊メンバーの一人、レイ・ラモス軍曹は、最新の結果は彼を安心させるものではなかったと述べた。彼は、9月にイラクから帰って以来、偏頭痛、呼吸障害、肘の痛みに苦しんできた。

以前の検査は、劣化ウランが部分的に彼の苦痛に責任があったかも知れないと示唆した。彼は、結果を比べるために独立した医者に第3のテストしてもらうつもりだと語った。

「私が病気になるとき、あるいはやがて病気になるという時に備えて準備をしておきたい。」と、ニューヨーク市のラモス(41歳)は言った。

米国防総省は、体内に劣化ウランの破片を埋め込まれた最初の湾岸戦争からの帰還兵70人の退役軍人の一団をモニターリングしている。キルパトリックは彼らの誰も劣化ウランに関連する健康上の問題を示さなかったと言った。

核政策研究所の代表で湾岸戦争帰還兵でもあるチャールズ・シーハン・マイルズは、劣化ウランに関する不安が妥当かどうか確かめるために、軍はイラクから帰還する全ての兵士を検査すべきだ、と語った。

ニューヨーク・デイリー・ニュース

病気のG.I.達のはっきりしない事実

MURKY FACTS ON SICK G.I.S
http://www.commondreams.org/views04/0507-13.htm
ホアン・ゴンザレス　２００４年5月6日

イラクから帰ったニューヨーク州兵部隊の隊員のうち、これまでに検査を受けたどの兵士からも劣化ウランの検査で陽性の結果を得なかった、と国防総省の医者が今週語った。「処理されたどの尿サンプルも測定できるほどの量の劣化ウランを含んでいない」と、メリーランド・アバディーンにある陸軍の健康増進・予防医学センターのマーク・メランソン中佐は言った。

検査結果は予備的なものだ、とメランソンは言った。そして彼は今、それぞれの兵士の検査を分析した完全な報告書を待っているところだ。第442憲兵中隊のうち、全部で56人の兵士が、先月ワシントンのウォルター・リード陸軍病院かニュージャージー州のフォート・ディックスで尿サンプルを提出した。そしてその大半はまだ分析されていない、とメランソンは言った。たとえ、もし何人かの兵士の体内にわずかな量があるにしても、「劣化ウランの吸入に関する安全レベルというものが存在する。個人は1年あたり1グラムまでなら50年間毎年吸い込んでも大丈夫だ。」と、メランソンは言う。

「それは全くばかげたことだ」と、アサフ・ドラコビッチ博士は主張する。彼は陸軍の予備役大佐で退役軍人省の病院の核医学の元責任者である。

ドラコビッチと科学者のチームは、本紙［デイリーニューズ］の依頼で第442部隊の9人の兵士を検査して、彼らのうちの4人が劣化ウランで汚染されたとの結論を下した。ドラコビッチは、4人が劣化ウラン製の弾丸の爆発でできた放射性のホコリを吸い込んだことは「ほとんど確実だ」と言う。陸軍によって検査された最初の一団にはドラコビッチ博士が検査した9人が含まる。

「彼らの設備は、いくつかの種類のウラン同位元素を正確に測ることができない」と、ドラコビッチは言う。彼は陸軍の研究所の予備的な報告を読んだ。ドラコビッチは、1991年の湾岸戦争から帰還した兵士の一団が劣化ウランで汚染されたことを発見した最初の軍医であった。彼はそれ以来、戦争で劣化ウランを使用することへの反対者であり劣化ウランの専門家になった。

メランソンは、放射線が事実上全身に均等に広がるとの「誤った仮定」を使っている、とドラコビッチは言った。「吸い込まれた劣化ウランのホコリは、肺から近くのリンパ腺へ移る。そして、そこでそれは強烈なアルファ放射線で、すぐ近くの少数の細胞を攻撃するのだ。」と、ドラコビッチは言った。

劣化ウランに安全レベルが存在するというメランソンの主張も、放射線防護と測定に関する全米評議会のメンバーで、オークリッジ国立研究所の上級研究者であるリチャード・レゲットによって疑問を投げかけられている。「劣化ウランについてどこからが危険かという点については多くの不確かさがある」と、レゲットは言った。「誰も確かなことは分かりません。」劣化ウランは極めて重い金属であり、その「化学的毒性」は放射能よりも大きい問題でさえある、とレゲットは言った。

「私が知っているのは、私がまだ体調が悪いということだけだ、そして、陸軍はなぜそうなのかを説明しようとしない。」とレイ・ラモス二等軍曹は言った。彼は専門家の一斉攻撃を浴びたうちのひとりである。ラモスと他の兵士達は、彼らがイラクのサマワという町に配備された昨夏以来、慢性疲労、偏頭痛、泌尿器の病気、強い関節痛や他の原因不明の病気に苦しんできた。「陸軍は、私は（劣化ウランに）陰性だと言い、一方ドラコビッチ博士は私が陽性だと言う。そこで私は今、第3の独立した検査をして欲しいのだ。」と、ラモスは言った。

兵士達が言うには、本紙［デイリーニュース］が彼らの苦境について報道し始めた後で、ようやく陸軍が検査することに同意した。特に、第442部隊についての報道を引用した先週のメモの中で、陸軍医学本部のジェームス・ピーク中将は、医学部門の責任者全員に現在の劣化ウランのモニタリング政策の再確認を求めた。「もし、・・・患者が、DUの被曝の可能性に関して妥当性のある懸念を表明し、尿のバイオアッセイ（生物学的検定法）を要求したら、検定が命じられるべきである」とピークは言った。

「それは、かなり以前からの政策だ、しかし、ある人々はそれを十分真剣に受け取らなかった。」と、ウォルター・リード病院の予防医学の長ダグラス・ハック大佐は認めた。それでも、ペンタゴンの現在の劣化ウランに対する政策は、英

国と比べると気を配っているとは言えない。英国ではイラクに配備された英国兵士一人一人が以下のように書かれた財布大のカードを国防省から持たされているのだ。

「あなたは、劣化ウラン弾が使用された戦域に配備されました。DUは弱い放射性を持つ重金属です。それは病気を引き起こす可能性があります。あなたは配備の間にDUを含むホコリに曝されるかも知れません。」カードの裏面は、各々の兵士に助言している;「あなたは、ウランを測るための尿検査をする資格があります。・・・本国の基地に帰還したら、あなたの部隊の医療担当者に相談して下さい。」

・・・NHK BS 世界のドキュメンタリー ２００５／０１／０４・・・・

「イラク 劣化ウラン弾被害調査 ーードイツ人医師１３年の足跡ーー 」について

（１）　今年の年明け早々１月４日に、NHK・BSの「世界のドキュメンタリー」で『イラク　劣化ウラン弾被害調査－ドイツ人医師１３年の足跡－』（原題「医師と放射能に汚染されたイラクの子どもたち」）が放送されました。

このドキュメンタリー番組は、英米軍が今回のイラク戦争で使用した劣化ウラン弾によると思われる子どもたちの被害を調査するドイツのジークヴァルト＝ホルスト・ギュンター博士とウラニウム医療研究センター（ＵＭＲＣ）が２００３年９～１０月に行ったイラク被害調査と彼らの活動を取り上げたものです。

※なお、この番組の存在については、「イラク戦争劣化ウラン情報　No.２０」（２００４年９月６日）「ＵＭＲＣからの新しい情報について」に詳しく取り上げています。この番組に対するコメントや紹介も翻訳しました。「翻訳資料１　新しいビデオへのテッド・ウェイマンのコメント」「翻訳資料２　トラップロック平和センターのビデオ紹介」参照。併せてもう一度ご覧ください。
http://www.jca.apc.org/stopUSwar/DU/no_du_report20.htm

（２）　この調査の結果については、２００４年４月にＵＭＲＣのアサフ・ドラコビッチ博士が日本で講演し、イラクの土壌、水、住民の尿、サマワに配備された米兵士の尿から劣化ウランを検出したことを報告しました。われわれが恐れていたようにイラク全土が汚染されていること明らかにしたものです。この調査の分析費用は世界中の市民からカンパでまかなわれており、その中でもとりわけ日本の市民からの寄付が大きな位置を占めています。その調査を紹介したという意味で、この番組は実に貴重なものでした。

※「４・１４ UMRCアサフ・ドラコビッチ博士講演会 in OSAKA－－サマワ帰還米兵、イラク住民の劣化ウラン被曝－－イラクウラン被害調査緊急集会報告　イラク全土が劣化ウランで汚染されている」参照。
http://www.jca.apc.org/stopUSwar/UMRC/durakovic_in_osaka2.htm

（３）　私たちにとって嬉しかったことは、ＵＭＲＣの活動と同様にドイツのギュンター博士の活動を見る事ができた事です。ドイツ政府によって逮捕されながら、また何者かによって殺されそうになりながらも、あくまでも劣化ウラン弾の被害を明らかにしようとする博士の姿が印象的でした。この点では、同様の厳しい圧迫の下で劣化ウランの被害を科学的に明らかにしようとするＵＭＲＣとドラコビッチ博士の姿勢と共通し、私たちの胸に訴えるものでした。

またこの放送は、これまで劣化ウラン弾の問題を取り上げてこなかったNHKの劣化ウラン弾に関する初めての放送でもありました。

すでに多くの方が放送をご覧になったと思いますが、記録のためにも以下に番組の要約を紹介します。前号でお知らせしたようにドラコビッチ博士は、３月９日に、京都の同志社大学に来られ講演をなさいますので、お近くのかたで関心をお持ちの方は是非お出かけください。長文になる事をお許しください。

ビデオ紹介　　ＮＨＫ　ＢＳ世界のドキュメンタリー

「イラク　劣化ウラン弾被害調査－ドイツ人医師１３年の足跡－」

制作：オチョアワグナー　プロダクション（ドイツ2004年）

番組は７９歳のドイツ人医師ギュンター博士とカナダのウラニウム医療研究センターＵＭＲＣのテッド・ウェイマン氏がイラク戦争の劣化ウラン影響調査に向かうところから始まります。１９９１年の湾岸戦争後、大勢の兵士や民間人が身体に異常をきたしましたが、ギュンター博士たちは劣化ウラン弾が原因だと考えています。ギュンター博士は「私は、イラクで４０年間働いてきました。この地域で以前ウランを含んだ砲弾の破片を見つけたことがあります。同時に、重い病気が急増していることを知りました。２００３年のイラク戦争の後、こうした被害がさらに増えているのではないかと思い、調査に来ました。」と言います。ウェイマン氏は「分析のために、爆撃にさらされた人たちの尿のサンプルを集めに来ました。できれば、肺からもサンプルを取りたいですし、土壌や水も調べたいと思っています。アメリカ軍やイギリス軍が使った劣化ウラン弾が、人々や環境をどの程度汚染しているか、知りたいんです」と言います。この時に採取された住民の尿サンプルなどから劣化ウランが検出されました。イラクの人々は米英軍が使用した劣化ウラン弾で明らかに汚染されたのです。

バスラからクウェート国境へ向かう道は、湾岸戦争でも今回の戦争でも戦場となりました。ギュンター博士は、劣化ウラン弾で破壊された戦車を見つけ、放射線量を測定しました。「この戦車の残骸は劣化ウラン弾で破壊されたものです。砲塔に弾が当たった痕があります。放射線量を測定してみましょう。カウンターの針が赤い方に触れているのがはっきりと分かります。劣化ウラン弾は、貫通するときにすさまじい熱を発します。戦車の中の兵士を一瞬で灰にし、飛び散った酸化ウランが周りの環境を汚染するのです」（ギュンター博士）

バグダッド近郊では、テッド・ウェイマン氏とイラク人医師イクラム・シェイクリーが調査を進めています。そこは、アメリカ軍が軍用車のスクラップヤードとして使っていた場所です。ウェイマン氏たちは土壌やチリのサンプルを集めます。驚いた事にこのスクラップヤードには子どもたちがスクラップを売るためにたくさん出入りしています。積もったチリが、トラックが通り過ぎる度にもうもうと舞い上がります。奥に行くに従ってガイガーカウンターの数値がどんどん上がります。

■　*ギュンター博士とドラコビッチ博士　－－劣化ウランの危険と闘う二人の医師*

湾岸戦争後、長い間、劣化ウラン弾の危険性は知られていませんでした。この戦争で、多国籍軍は主にバスラの南方で３００トンもの劣化ウラン弾を使用しました。

ギュンター博士は、劣化ウラン弾の影響について何も知らないまま、戦後のバスラに入ったのです。「１９９１年１０月、国連の経済制裁発動後のイラクに呼ばれました。医療体制を視察するためです。病院は機能していませんでした。小児病院は、満員状態で伝染病が蔓延し、子どもたちは栄養失調で瀕死の状態でした。私は、４０年間、イラクで医療に携わってきましたが、湾岸戦争前には見られなかった病気が多発していました。９１年末から９３年にかけて、白血病や先天性障害などの異常が沢山認められたのです」（ギュンター博士）。

ギュンター博士は、子どもたちの病状を写真で記録し始めました。子どもたちは、放置された砲弾や戦車のすぐそばで、遊んでいます。これが、白血病の急増と関係しているのでしょうか？　また、ギュンター博士が診察した子どものほとんどは、父親がバスラ南方の戦車戦で戦っていたことが分かりました。ウクライナのチェルノブイリ原発事故の後も、先天性の障害を持つ子どもが、大勢産まれています。１９９１年末、ギュンター博士は報告書を書き始めました。子どもたちの病気は、劣化ウラン弾の放射線によるものだと主張したのです。最初の報告はド

イツの新聞各紙に掲載されました。

１９９２年に、ギュンター博士は思い切った行動に出ました。イラクで見つけた劣化ウラン弾に放射性があることを証明するため、砲弾をベルリンに持ち込んだのです。しかし、フンボルト大学では、非常に毒性が強く放射性があると分析され、関わりたくないので工科大学に持っていってくれ、と言われました。工科大学に行くと、今度はベルリン自由大学の放射線研究所に持っていくよう言われました。研究所では、『今日は金曜日なので預かれない。月曜日にまた来るように』と言われました。

月曜日にまた出直すと、１６人の警官が待ち構えていて、放射性の砲弾を持ち込んだ「罪」でギュンター博士は逮捕されてしまいます。取り調べの結果、ギュンター博士は起訴され３０００マルクの罰金を課せられました。罰金の支払いを拒んだためギュンター博士は、５週間、刑務所に入れられました。しかし、これで、イラクから持ち込んだ砲弾に放射性があることが証明されたのです。

ウラニウム医療研究センターの医師（所長）のアサフ・ドラコビッチ博士は、アメリカ国防総省に１２年間勤務し、湾岸戦争症候群の兵士の症状を研究してきました。

ところが、劣化ウラン弾が病気の原因ではないかと公言した途端、圧力をかけられたと言います。「私は内部告発に踏み切りました。なぜならアメリカ政府は湾岸戦争の帰還兵を人知れず死なせるべきだと考えていたからです」（ドラコビッチ博士）。湾岸戦争後、ドラコビッチ博士が治療に当たった３０人の兵士たちは原因不明の病気に悩まされていました。ドラコビッチ博士は、放射線の影響を疑いました。患者の尿を中性子放射化分析という方法で分析したところ、劣化ウランに陽性という結果が出ました。その途端、誰もが本当のことを語ろうとしなくなり、調査をやめるよう圧力をかけてきたのです。ドラコビッチ博士は、国防総省を辞め、自ら設立した医療研究センターで調査を続けました。「３０人の患者の内、過半数から高濃度の劣化ウランが検出されました。この分析結果を見て、もはや議論の余地はないと思いました。」（ドラコビッチ博士）

■　生命の危険を感じながら

米英政府が劣化ウラン弾の危険性を隠し続けているために、劣化ウラン弾の危険性や被害の調査に取り組み、警告を発することは生命の危険さえ伴います。ドラコビッチ博士は劣化ウラン弾は危険だ、と公表したとき、経歴に傷が付いてもいいのか、と脅されました。それでも彼が活動を止めないと、かつての同僚たちが、次々と『頼むからこんな活動は止めてくれ。君にとっても軍にとっても何一つ良いことは無いんだから』と電話をかけてきました。その後、身の危険を感じたドラコビッチ博士は、カナダに移り、身を隠しながら生活しています。

ギュンター博士もまた身に危険を感じています。ギュンター博士は道を歩いていて、自動車に意図的にはね飛ばされ、水路に落とされ重傷を負わされました。警察は車のナンバーを覚えていないのならわからないと、そのまま何の進展もありません。

なせギュンター博士にこのようなことが起きたのでしょうか？「一体誰がこんなことをしたのか、と考えました。ドイツには、私のことを快く思っていない人たちがいます。劣化ウラン弾の技術を開発したのは、ドイツだと言うことに気付いたからです」。軍需産業のラインメタル社が、１９７２年と７３年に先端にウランを使った砲弾の開発に取り組んでおり、軍需企業ＭＢＢも１９９６年までの１７年間、劣化ウラン弾をテストしていたというのです。

■　帰還兵に広がる被害

湾岸戦争症候群に苦しむ帰還兵は、１５万人に上ると言われますが、アメリカ、イギリス両政府は、劣化ウラン弾との関連性を否定しています。ギュンター博士は、ハンブルクで開かれた会議で、科学者と意見交換を行いました。アメリカの帰還兵に先天性の障害児が生まれる割合は、通常の３倍にも達するというデータが示されました。

１９９１年の湾岸戦争で、米軍と英軍は初めて劣化ウラン弾を使用しました。兵士たちはその威力に驚きました。「劣化ウラン弾が命中したときの光景は、

まるでスローモーションを見ているようでした。弾が装甲を突き抜ける間２－３秒の間があって、それから戦車が爆発したんです。まるでバターにナイフを刺すように簡単に貫通しました。」（英湾岸戦争帰還兵ケニー・ダンカン）。しかし、帰国してから多くの兵士が身体の異常を訴えたり、子どもに先天性異常が現れたりしたのです。

ケニー・ダンカンの息子ケネスは９歳です。一見、健康に見えますが、足の指はくっつき、耳にも異常があります。免疫力が弱いため、ひどく疲れやすく、頭痛に悩まされています。父親のケニー・ダンカンは、湾岸戦争で破壊された戦車の修理に当たっていました。中には、味方の誤射で劣化ウラン弾に被弾した戦車もありました。

戦争前は健康だったケニーが、一変して体調不良を訴えるようになりました。ケニーの妻は次のように述べます「特にこの５年ほどで症状が悪くなりました。夜中にひどいけいれんを起こすようになったんです。引きつけを起こしたように筋肉がけいれんして、薬物治療を受けていますが、心配で仕方ありません。」

生化学者アルブレヒト・ショットは、ケニー・ダンカンの遺伝子を調べました。その結果、著しい数の異常を確認しました。「ケニーは、かつて健康体で何の問題もありませんでした。染色体も正常だったんです。しかし、放射線にさらされてから、染色体は傷つき始めました。問題は、ケニーだけではありません。彼には、３人の子どもがいますが、調べたところ、全員に深刻な遺伝子異常が見られるんです。劣化ウランは燃焼すると微粒子になり、身体のあらゆる部分に入り込みます。リンパ球、脳や肝臓、そして、精子や卵子にも入り込んでしまいます。そのため、ケニーの子どもたちに遺伝子異常が出てしまったのです。当然、孫の世代にも同じように異常が受け継がれる恐れがあります。そのまた次の世代にもです。」（ショット）。２００４年２月、裁判所は、ケニー・ダンカンの健康被害を劣化ウラン弾による汚染が原因だと認めました。帰還兵の病気が、劣化ウランのせいだと認められたのは、これが初めてでした。

湾岸戦争時、イギリス軍の戦車に劣化ウラン弾を積み込む任務に就いていたジェニー・ムーアは、戦後、双子を妊娠しましたが彼女にも異変が現れました。ムーアは、二度目の妊娠でも子どもを流産したのです。胎児には眼がありませんでした。

「新聞を読んで、眼のない子どもがアメリカでも大勢生まれていることを知りました。それで私の赤ちゃんも湾岸戦争症候群の犠牲になったんだと分かったんです」（ムーア）。ジェニー・ムーアは憤ります。「もしもイギリス政府が、帰還兵５万２千人が全員死ねば、この問題は自然に解決するとほんの少しでも考えているとしたら、それはとんでもない間違いです。５万２千人の殆どが家族を持っているからです」。

■　*イラク現地汚染調査*

ウラニウム医療研究センターのウェイマン氏とシェイクリー医師はバグダッドやバスラなど１０数カ所を調査して回りました。各地でホコリや住民の尿サンプルを採取しました。激しい戦車戦が繰り広げられたバグダッド南部で、彼らは土壌を検査し、劣化ウランの痕跡を探していて、その危険な場所のすぐそばで食べ物や飲み物が売られているのを発見します。「ここは戦車戦のあった場所なんです。すぐそこにも戦車が撤去された跡が残っているでしょう。放射線量は、通常のおよそ１００倍から１５０倍で、これまでで一番高い数値です。」（ウェイマン）「当然、立入禁止区域にすべきレベルです。とても人が行き来して良いような状態ではありません。」（シェイクリー）。また、彼らはバグダッドで空爆によって破壊されたビルも調査しました。彼らはテレビ局が６階分の床を突き抜けた爆弾で破壊された事を知って、このレーザー誘導爆弾にも劣化ウランが使われたのではないかと考えています。

イラクのバスラでは、湾岸戦争でもイラク戦争でも激しい戦闘が繰り広げられました。イギリス軍は、汚染された戦車はすでに撤去したと言います。しかし、大規模な戦車戦があったアブ・カシブ近郊でウェイマン氏は、劣化ウラン弾で破壊された戦車を何両も見つけました。「この戦車の放射線量は、自然界に存在する放射線量の２万倍もの値を示しています。」とウェイマン氏は言います。撮影の中でもガイ

ガーカウンターの針は振り切れ、アラームが危険を知らせています。彼らは更に劣化ウラン弾が当たった近くの製氷工場の貯蔵タンクも調べます。この水からは、ＷＨＯが定める安全基準値の６倍から８倍の濃度のウランが検出されました。

■　分析結果は住民、兵士の劣化ウラン汚染を証明

ウェイマン氏らが採取したサンプルは、ドイツのフランクフルトにあるゲーテ大学鉱物学研究所で地質学者アクセル・ゲルデス博士が超高感度の質量分析機で調べています。ゲルデス博士は次のように述べます。「バグダッド南部には、激しい戦闘が行われた場所があります。そこで集めた土壌サンプルから劣化ウランを検出しました。

その濃度は、あまりにも高く、放射線の量は、自然界にはあり得ない程でした。」「(こんな場所では)当然のことながら、劣化ウランを吸い込んでしまう危険性が、格段に高くなります。しかも、戦闘地域に近づかなければ安全というわけではありません。劣化ウランを含んだチリは、周囲一体に飛び散るからです。劣化ウランは、土壌の中に、半永久的に残り、住民は、危険にさらされ続けるのです。」「ウェイマン氏とシェイクリー医師は、イラクに２週間滞在しただけですが、特にウェイマン氏は、高いレベルで汚染されていました。もちろん、現地の人々は、汚染される危険が遙かに高く、もう何年もそういう状況の中で暮らしていることになります。」

ゲルデス博士は、イラク戦争の帰還兵から集めた尿のサンプルも分析しました。これからも高濃度のウランが見つかりました。「帰還米兵の尿のサンプルを分析したところ、４割近くから劣化ウランを検出しました。被験者の３割から４割が、汚染されていたのです」。さらに、イラクで集めた土壌や尿のサンプルを超高感度の装置にかけたところ、殆どから高い放射性のあるウラン２３６が検出されました。「多くのサンプルからウラン２３６を検出しました。これは自然界には存在しないウランなんです。ウラン２３６は、原子力発電所でできる同位元素です。また、プルトニウムもできます。問題は、このプルトニウムが混入している危険性があると言うことです。もちろん、そのほかの放射性物質も含まれているかも知れません。それらは、人体に大きな影響を及ぼすことになります」。

■　ボスニア、セルビア、ＮＡＴＯ軍兵士にも汚染が

番組はイラクだけでなく、アメリカとイギリスが１９９５年に劣化ウラン弾を使用したボスニア・ヘルツェゴビナ紛争も取り上げます。サラエボの西、セルビア軍の工場があったハジッチは、NATO軍の爆撃にさらされました。今でもこの村では、放射線が検出されます。スラヴコ・ズドラーレ医師は「私たちは紛争後、この地域の白血病の発症率を調べました。すると、紛争の前よりも遙かに発症率が上昇していることが分かったのです。特定の血液疾患で見ると、紛争の前と比べて５倍から６倍にも上げっているものもありました」と言います。ハジチが空爆された後、３５００人の住民が、ボスニアのセルビア人地区、ブラトナスに移住しました。しかしこの時すでに、多くの住民が、健康を損なっていたと言われています。その後、５年間で、ハジチから移住した３５００人の内、ほぼ3分の１に当たる１１１２人が、悪性の腫瘍が原因で死亡しました。

セルビア共和国のノヴィパザルは、コソボ自治州との境にあるイスラム教徒の多い町で、ここにも劣化ウラン弾が投下されました。住民の家屋も被害を受けました。ボスニアと同じく、ここでも悪性腫瘍の発症率が急増しました。特に、白血病は、若い人たちの間にも広がっています。

被害を受けているのはバルカンの住民だけではありません。コソボ自治州に駐留しているイタリア、スペイン、ポルトガルの兵士にも白血病が広がっています。ドイツ軍には、健康被害はないと発表されていましたが、内部資料によって、プリツレンの兵士たちが、肺疾患にかかっていたことが明らかになりました。

■　この子はもう助からない－－子どもたちに多発する病気

ギュンター博士は、バスラの産科小児科病院に向かい、恐れていた事態を目の当たりにしました。湾岸戦争後、悪性の腫瘍を発症した人は１０倍に、先天的に障害を持つ新生児の数は２０倍に跳ね上がったのです。バスラ産科小児科病院の医師ジャナン・ハッサンは次のように言います。「バスラと同じように、今度はバグダッドで悪性の腫瘍が急増するのではないか、と心配しています。イラク戦争では、バグダッドの広い地域が、劣化ウラン弾の爆撃にされされたからです。この病院では、頭や手足、鼻や眼の無い先天性の障害を持つ赤ちゃんが産まれています。戦争前は、出産したお母さんは、まず男の子か女の子か、と聞いたものでしたが、今では真っ先に、異常はないか、と聞くようになりました。障害を持つ赤ちゃんを３人産んだ女性は、夫から離婚されてしまいました。夫は、赤ちゃんの異常を産んだ妻のせいにするのです。みんな兵士の子どもたちです。悪性の腫瘍は、大人だけでなく、小さな子どもたちにも広がっています。特に白血病やリンパ腫が多く見られるようになりました。」

ギュンター博士は言います。「こうした子どもたちが助かる見込みは殆どありません。本当に忌まわしい状況です。見ているのがつらいです。殆どの場合、母親が子どもを家に連れて帰り、そこで亡くなります」。撮影から二日後、その７歳の少年も亡くなりました。

戦争の最も小さな犠牲者

彼は劣化ウランに被曝した。彼の娘は代償を払っているのかもしれない。

ホアン・ゴンザレス
http://www.nydailynews.com/front/story/236934p-203326c.html
２００４年９月２９日　ニューヨークデイリーニューズ

２００３年９月初め、陸軍州兵特殊部隊員ジェラルド・ダレン・マシューは急病に襲われ、イラクから故郷に戻された。マシューの顔の片側は毎朝はれるようになった。彼は、絶え間なく偏頭痛を感じ、目はかすみ、一時的に失神したり、排尿の度に焼けるような痛みを感じるようになった。陸軍は詳細な検査のために、ワシントンのウォルター・リード陸軍医療センターに彼を移したが、そこの医者は、何が悪いのか説明できなかった。

彼が帰ってすぐ、彼の妻ジャニスは妊娠した。６月２９日、彼女は女の子、ビクトリア・クローデットを産んだ。赤ちゃんは、３本の指と右手の大部分が欠けていた。マシューと彼の妻は、ビクトリアのショッキングな形成異常が、父親の病気および戦争と関係があると考えている。特に、家族のどちらにも先天的欠損症の履歴がないからだ。彼らは、不気味に類似した形成異常を持って生まれたイラク人の赤ん坊の写真を見たことがある。

６月、マシューはデイリー・ニュースに連絡をとり、彼の尿のスクリーニングをしてくれる独立した研究所を手配してくれるよう、我々に依頼した。これは、別の州兵の部隊、第４４２憲兵隊の７人の兵士のうち４人が劣化ウラン（ＤＵ）に陽性を示したと、デイリー・ニュースが報告した後のことだった。マシューの尿の独自検査の結果、彼がＤＵに陽性であることがわかった。ＤＵとは、核施設で天然ウランの濃縮に伴って生み出される低レベルの放射性廃棄物である。鉛の２倍重いため、ＤＵは、ペルシャ湾岸戦争以来ペンタゴンによって、エイブラムス戦車の装甲に加えて、ある種のタイプの「タンクバスター（対戦車）」砲弾に使用されてきた。

放射線被曝は、いくつもの調査研究で、被曝した者の子供の先天的欠損症と関係づけられてきた。「私の夫は祖国のために戦うためイラクへ行きました。」「私は、陸軍が、起こったことに対する責任をとるべきだと思います。」とジャニス・マシューは言った。夫婦は、４月に、レノックス・ヒル病院での胎児の定期的な超音波診断で、赤ちゃんの指が欠けていることを初めて知った。

Sabo for NEWS

（写真）不可解な病気になり、イラクから故郷に戻された州兵ジェラルド・ダレン・マシューは、形成異常の手を持つ女の赤ちゃん、ビクトリアを抱いている。彼はウラニウム汚染が陽性だと判定された。

マシューは、イラクでは、ハーレムから送り出された第７１９輸送部隊のトラックの運転手だった。彼の部隊は、クウェートの陸軍基地から最前線まで、あるいは遠くバグダッドまで補給物資を運んだ。彼によれば、被弾した戦車や破壊された車両部品を、トラックの平台に積んでクウェートへ運んで帰ったこともあると言う。

生まれる前の子供の形成異常について知った後、マシューはすぐにＤＵに関して彼の尿を検査してくれるように陸軍に依頼した。４月には、彼はニュージャージ州フォートディクスで、除隊を待つ間に、２４時間分の尿サンプルを医者に提出していた。５月、陸軍は、偏頭痛と、突発性血管浮腫――原因不明の慢性的なはれ――と呼ばれる症状に対して、彼に４０％の障害者年金を与えることを認めた。

しかし、マシューは、陸軍によるＤＵの検査結果を知らされなかった。検査の５か月後の先週、フォートディクスに電話すると、彼の尿標本の記録は何もないと伝えられた。幸いなことに、マシューは陸軍の官僚だけに頼ったのではなかった。彼はデイリー・ニュース社を訪れた。今年の初め、デイリー・

ニュース社は、第４４２部隊の州兵の尿サンプルを、元軍医アサフ・ドラコビッチとドイツ・フランクフルトのゲーテ大学の地質学者アクセル・ゲルデスに提出していた。ドイツの研究室は、微量のウランの検査を専門にしている。その検査は、１回あたり１，０００ドルもかかる複雑な手続きだ。その研究室は、フェントグラム――１０の１５乗分の１グラム――というわずかな量を検出することができる、世界でおよそ５０ある研究室のうちの１つだ。

２、３か月前、デイリー・ニュース社はゲルデスに、マシューの２４時間分の尿サンプルを提出した。対照群として、デイリー・ニュースのリポーター２人の２４時間分の尿サンプルも、研究室に提出した。３つの標本には、文字Ａ、Ｂ、Ｃの印だけがつけられていたので、研究室にはどのサンプルが兵士のものかわからないようになっていた。３つをすべて分析した結果、サンプルＡ――マシューの尿――だけがＤＵの明瞭な形跡を示したと、ゲルデスは報告した。それには、標本Ｂ、Ｃより「４～８倍高い」総濃度のウランが含まれていた、とゲルデスは報告した。

引退した科学者で、ウラン同位体を測定する計器の１つを発明した、レオナルド・ディーツは、「そのレベルは、彼がＤＵにさらされていたことをかなり確定的に示している」と述べた。陸軍のガイドラインによれば、ゲルデスがマシューで見つけた総ウラン濃度は、ほとんどのアメリカ人にとって許容基準内にある。しかし、ゲルデスは、ＤＵのわずかなレベルであっても懸念の理由になると指摘して、陸軍の基準に疑問を呈した。「マシューの尿のＤＵのレベルが低くても」、「我々が彼の尿から検出するＤＵは、肺の中の濃度では１，０００倍高い可能性がある。」とゲルデスは述べた。

ＤＵは、環境中に存在する天然ウランには似ていない。天然ウランは、食べ物や飲み物とともに摂取する可能性があるが、２４時間以内に身体から排出される。しかしながら、ＤＵに汚染された塵は、典型的には肺に吸い込まれ、絶え間なく低線量の放射線を出しながら、そこに何年も残る可能性がある。

「私は気が動転して、混乱している」マシューは言った。「私は答えがほしいだけだ。彼ら［陸軍］は私の赤ちゃんを世話してくれるのか？」

■　我々は兵士の病気を追跡する

過去５か月間、デイリー・ニュースのコラムニスト、ホアン・ゴンザレスは、不可解な病気にかかったイラク帰還兵の状態を、時系列で記録してきた。他にない彼の画期的な調査は、４月４日第１面の記事から始まり、劣化ウラン汚染がペンタゴンが認めるよりはるかに広範囲であることを示唆してきた。・デイリー・ニュース社の要請で、イラクで従軍したニューヨーク州陸軍州兵の歩兵中隊の兵士９人が劣化ウラン砲弾による放射線に関して検査を受けた――そして、病気の兵士のうち４人は、陽性と判定された。

・ゴンサレスの記事が出た翌日、陸軍当局は、ロックランド郡の中隊、第４４２憲兵隊のすべての帰還兵を急いで検査した。

・週末までに、スキャンダルの反響はニューヨーク州のオールバニーにまで及び、戦争から帰還した病気の兵士によりよい検査と治療を行うようペンタゴンに要求する政治家のリストには、パタキ州知事も加わるほどになった。

・ゴンサレスによる暴露は、検査を要求する巨大な声の引き金を引いた。４月中旬までに、８００人の兵士が陸軍に尿サンプルを提出し、さらに何百人もが検査の予約を待っていた。

・２週間後、ペンタゴンは、第４４２部隊の兵士のうち劣化ウランに陽性と判定された者は１人もいないと断言した。しかし、デイリー・ニュース社の専門家は、検査方法について著しい問題があることを発見した。　　（訳　ピース･ニュース）

http://observer.guardian.co.uk/uk_news/story/0,6903,1258632,00.html

劣化ウランによる汚染で英国人がハネウエル社を告訴に踏み切る
画期的な訴訟は湾岸戦争帰還兵の疾病に重大な関連があると証明か

The Observer
アントニー　バーネット；社会記者
7月11日、日曜

元英国の軍需産業労働者がサマーセットの工場で作業中に劣化ウラン汚染を受けたとして米の大企業ハネウエルを相手取っての訴訟に対し法的な援助を勝ち取った。この訴訟は湾岸戦争の帰還兵、航空機労働者、及び湾岸戦争が行われた地域の住民に対し、計り知れない意味を持つことになる可能性がある。

訴訟を起こそうとしている英国人リチャード・ニビイ・デービッド（４９才）は呼吸器系の深刻な障害、腎臓の欠陥を持っていて、手足を動かすと痛くてたまらないという状態である。医学上のテストにより彼のDNAは変異していて染色体が損傷を受けていることがわかったが、彼はこれは劣化ウラン汚染によるものだと訴える。劣化ウランは原子力発電で生み出される放射性の廃棄物で、戦車の装甲を打ち砕くことが出来るため砲弾に使用されている。

数百万トン［原文のまま；数千トンの間違いと思われる（訳注)］にも及ぶ劣化ウラン弾が米英軍によってコソボ、アフガニスタン、イラクで使用された。また航空機のバラストやヘリコプターのプロペラの羽のカウンターウエイト（釣合いおもり）としても使用されている。表土に埋もれている場合は比較的害がないが、多くの科学者が、劣化ウランの微細なほこりを吸い込むと各種のガン、腎臓障害、出生異常の原因になると考えるようになってきている。

91年の湾岸戦争で使用された劣化ウランがイラクでの小児白血病と出生異常の極めて高い発生率の原因になっていると言われてきた。フランス、スペイン、イタリアはNATO軍が劣化ウラン弾を使用したボスニア、コソボで従軍した兵士がガンになったと主張している。劣化ウランは、数千人にも及ぶ帰還兵が不可解な健康上の問題を抱えることになったいわゆる湾岸戦争症候群の原因の一つと考えられている。

軍需産業、および原子力産業は劣化ウランの危険性を意図的に軽視してきたが、デービッド氏の訴訟により法廷ではじめて劣化ウランを巡っての議論が行われることになる。彼が勝訴すると、軍に対し莫大な補償の要求が行われることになることが予想されるため、軍中枢部に衝撃が走ることになる。デービッド氏はまたイエービルのハネウエルの工場で彼の数十人の同僚が同じく劣化ウランで病気になったとしている。彼の親しい仲間の多くが死んだり、肝臓ガンにかかったりしているというのだ。

法的扶助局（Legal Aid Board） は個人的な障害に対しては扶助を行わないが、デービッド氏の場合については“公的な利害”の観点から扶助を行うことになった。健康上の問題から95年に現在はハネウエルが所有しているイエービルの企業で世界中の大半の戦闘機、爆撃機用の部品を製造しているノーマレア・ガレット社での部品装着作業者としての職を辞めなければならなくなってから以降、8年間に渡ってデービッド氏は訴訟のために戦ってきた。

痛みと、呼吸困難にさいなまれて、デービッド氏は自分の障害の原因の手がかりを探し始めた。そして、95年に湾岸戦争症候群を扱ったニュース番組で英軍の少佐の女性が車を降りるのに苦労をしているのを見た瞬間に突破口が開けたのだった。

「耐えられないほとの痛みに苦しみ、動くことができなかったのですよ。しかし、この女性少佐が動こうとして、すごい痛みを感じていること彼女の目に出ているのをみて、すぐに少佐が私と同じ痛みに苦しんでいるのだと思ったのです」とデービッド氏は語る。

デービッド氏は軍にいたこともなければ、中東に行ったこともなかった、しかし、彼は自分の病気とかつて湾岸戦争に従事した兵士が苦しんでいる病気との間に何らかの関連があるとの確信を持ったので

ある。

しかし劣化ウランが原因だという可能性が出てきたのは、彼が99年にアメリカの科学者で元軍医で、核医学の専門家であるアサフ・ドラコビッチ博士の話を聞いた時であった。ドラコビッチ博士は湾岸戦争帰還兵が苦しんでいる、衰弱をもたらし、時には死に至る病気は良く言われるように必ずしもいろいろなワクチンにっよって引き起こされるのではなく、劣化ウラン汚染によるものであるとの可能性を示唆したのだった。

ドラコビッチ博士は15人の英軍の湾岸戦争帰還兵の尿サンプルの分析を行うことを決め、そのサンプルの中にデービッド氏のサンプルも入れるということにしたのである。6ヶ月後、分析結果は全サンプルの中で、デービッド氏のサンプルが最高レベルのウラニウム汚染度の一つを示すものとなっていたのである。

「信じられませんでしたね。笑っていいのか、泣いていいのかわからなかったですよ。自分が苦しんできた病気の原因がわかった、という一方で自分が治る見込みがないということもわかったのですよ。とりわけ私が不思議に思ったのは、なんで自分が英国で汚染されたのかとういことでした」とデービッド氏は言う。

答えは間もなくわかった。劣化ウランは人工の物質であり、専門家はデービッド氏に対し彼が汚染を受けたのは彼の職場でのことであったという可能性が極めて高い、と説明した。デービッド氏はそこで、ハネウエル・アエロスペース社を告訴しようと決心した。しかし、弁護士に対し支払い能力がなければ、証拠を集めるということが不可能であった。ところが、法的扶助を受けることが出来たため、勅撰弁護士のマイケル・マンスフィールド氏を代理人とすることができる見通しがついたので、世界中の専門家に対し、訴訟の主張の支持を訴えようとしている。

専門家の一人にマルコム・フーパー氏がいる。医化学の名誉教授で、湾岸戦争帰還兵協会の科学アドバイザ主幹である。「この訴訟は兵士のみならず他の多くの人にとって大きな意味をもっている。工場で劣化ウランが燃えて起こった火災を消防士が消火しなければならなかった場合や、刑務所の職員が劣化ウランの粉塵を吸い込んで汚染を受けたという場合をしっている。間違いなく劣化ウランの吸入が相当程度の損傷、傷病を引き起こしている可能性が高い。」

ハネウエル社はこの訴訟の詳細についてコメントするのを避けているが、イエービルの工場では劣化ウランは使用していないとの声明を発表するものと見られる。しかし、別の航空機グループであるウエストランド社は、ハネウエル社と同じくソマーセットに工場を持っていたのだが、1966年から1982年にかけて、ヘリコプターの羽（ブレード）のカウンター錘として劣化ウランを使用していたことを認めている。デービッド氏はハネウエル社が劣化ウランを含有していたに違いないと思われる部品を作るために、特殊な重金属合金を用いていたと訴えている。

（訳　ピース・ニュース）

Military Medicine 168巻8号600-605ページ　2003年

24時間尿採取と指数的崩壊解析に基づく、湾岸戦争帰還兵士における劣化ウランの吸入時での肺への取り込み量の評価

保証人：アサフ・ドラコビッチ (Col Asaf Durakovic)

投稿者：アサフ・ドラコビッチ*、パトリシア・ホラン (Patricia Horan)**、レオナルド・A・ディーツ (Leonard A. Dietz)#、アイザック・ツィンメルマン (Isaac Zimmerman)##

要　　旨

この研究の目的は、湾岸戦争の連合軍帰還兵士の呼吸器官における劣化ウランの量を評価することである。５人の陽性（$^{238}U/^{235}U > 141$）と６人の陰性（$^{238}U/^{235}U < 141$）の帰還兵士の 24 時間尿排泄における劣化ウラン同位体を質量分析機（ 熱イオン化質量分析機 ） を用いて解析し、吸入時における肺への取り込み量を数学的に評価した。セラミック化した劣化ウラン酸化物の肺における生物学的半減期の最小値は、バーテル（Battelle）によって模擬された肺の間質液 *1 における最小溶解半減期の測定報告から求められ、3.85 年と評価された。24 時間あたりの劣化ウラン量は陽性の帰還兵士で平均 3.27×10^{-5} mg(ミリグラム ）、陰性の帰還兵士で平均 1.46×10^{-8} mg だった。吸入時での肺への取り込み量を評価すると、陽性の帰還兵士で 0.34 mg、陰性の帰還兵士で 0.00015 mg だった。これらの諸結果は、吸入時に肺に取り込まれた劣化ウラン量が吸入被曝後９年経っても定量化できるという証拠を提供するものである。

[訳注]

*1 間質液 interstitial fluid: 体液は、細胞内にある細胞内液と血管内にある血漿（ 血液 ）および間質液に分けられる。間質液は細胞を直接取り囲んでおり、また、細胞血管壁を介して血漿と接している。細胞内液、血漿、間質液の量は体重 60kg の人でそれぞれ 24 リットル, 3 リットル, 9 リットル。

[脚注]

* ウラニウム・メディカル・リサーチ・センター (UMRC)

** ニューファンドランド記念大学地球科学科

UMRC

UMRC

序　論

ペルシャ湾岸戦争の帰還兵士が劣化ウラン（DU）の同位体を吸入し被曝していることについては十分な研究がなされてこなかった。DU の砲弾破片でけがをしたペルシャ湾岸戦争帰還兵士における DU の体内分布やそれから生じるであろう健康上の結果に関するいくつかのレポートは、尿におけるウラン同位体の濃度が上昇していることや健康への害を示唆したにも関わらず、DU の吸入による体内汚染に関する代謝の動態や健康への影響についての疑問に対しては間接的な意義をもつに過ぎないと思われる。DU 同位体の体内経路の定量的な理解に関する現在の論争は、研究努力が不十分にしか整合されていないことによって、また、不適切な方法論によってさらに増幅されてきた。

最近の研究文献には DU の有害な効果――神経学的障害、遺伝子突然変異誘発、癌ウイルス感染などの悪性転換、腎臓疾患、免疫システムの変質――の実験的証拠が豊富にある。環境への DU の有害な効果は、土壌微生物群集や土壌呼吸作用について DU で誘発される機能上の多様性の研究によって十分に記録されてきた。土壌と地下水における DU の動態はドングリの木の樹皮――地下水の DU 汚染を監視している――のサンプリングから調べられた。天然ウランは至る所にある元素であり、その放射線は危険とはみなされていないが、天然ウランが産業上毒物として有害であることはほぼ２世紀もの長期にわたって報告されてきた。最近再評価された人体への取り込み量は、国際放射線防護委員会（ICRP）が標準人（reference man）について慣習的に考えてきた量よりも１０倍も少ない。天然ウランの食物摂取量はイギリス、日本、ニューヨークでそれぞれ１日あたり 1.0, 1.3, 1.5 マイクログラム [*2] であるが、それは飲料水における濃度が日本の５つの都市とニューヨークでそれぞれ１リットルあたり 0.009 と 0.03〜0.08 マイクログラムと取るに足りないものであることを意味する。ただ、イングランドとスコットランドで 678 カ所から集められた表層水（ 地表水 ）の平均の濃度は１リットルあたり１マイクログラムを少し割る程度と高かった。

体内への天然ウランの取り込み量全体に対する吸入からの寄与分は極めて小さい。これは大気サンプル中のウラン濃度が低いことによる――1 立方メートルあたり平均的には、日本で 0.2 ナノグラム [*2]、イングランドで 0.06 ナノグラム、ニューヨークで 0.4 ナノグラム。沈着標的器官である骨における天然ウランの取り込み量はほとんど完全に食物摂取量に依存する。湿った骨の量に基づいて評価すると、骨への取り込み量はアメリカ合衆国で 4.4 マイクログラム（0.22 μg/kg; １キログラム当り 0.22 マイクログラム）[*3]、日本で２μg/kg、イギリスで３μg/kg である。これは ICRP 1975 年報告書 (ICRP75) の標準人に基づいたデータよりも有意に少なく、生物検定法において従来考慮されたデータ――主に核産業従事者からのデータ――の再評価を求めるものである。吸入によって体内にもたらされる天然ウランは、一般の人たちにおいては取るに足りない量である。ただ、事故による吸入被曝が汚染した空気を激しく吸入することによって起こる職業上の汚染として報告されてきた。それはウランが骨に最も多く、次いで肝臓に、さらに次いで腎臓に多く沈着することを報告している。これは、体内組織の分布データと一致するが、量的には ICRP75 の標準人のデータとは異なっており、ICRP75 の見直しの必要を示唆している。

この 20 年間にウランの体内汚染の吸入経路に関して多くの報告がなされた。可溶性のウラン化合物（UO_3）は呼吸器官から急速に移動し、血管内［ の区画 ］に運ばれるか、腎臓によって排出される。ただし、主要な標的器官である骨における長い停留期間（ 生物学的半減期 ）は放射線量の蓄積をもたらし長期間にわたり害を与える可能性がある。難溶性のウラン化合物は呼吸器官にとどまるか、胃

腸（ 消化器官 ） の経路によって排出される [*4]。不溶性のウラン化合物――その標的器官は気管支 [の区画] となる――は気管支のリンパ節に移動する。産業ウラン化合物の最終的な代謝の行方は、物理学的および化学的な諸特徴に依存する。ウラン化合物は溶解特性によって３つのグループに分けられる： 高水溶性の UF_6 と $UO_2(NO_3)_2$、中溶性の UO_3、かなり難溶性の U_3O_8 や UO_2 と混ざった UO_4。溶解率は結晶化の度合いや表面の特性によっても大きく変わる。

吸入された産業ウラン化合物の溶解率は３つのカテゴリーに分けられてきた。（１）急速 ： 溶解の速さが肺のクリアランスの速さ [*5] よりも速い。（２）中間 ： 不溶性粒子の力学的および溶解による排除が共に、肺のクリアランスの速さ全体にほぼ同等に寄与する。（３）ゆっくりとした溶解率をもつ化合物 ： 生体外実験での半減期が 100～10,000 日で、いくつかの例では肺からの排除に計ることができないほど時間がかかる。事故での呼吸経路による汚染の犠牲者の評価において、溶解特性を評価し、事故による被曝の評価の不確かさを最小化するには、化学物質や同位体の塵の動態評価が本質的である。私たちの仕事においてバーテルの間質肺液溶解モデルが使われた。DU 素材を懸濁液中に置き、溶解したウラン化合物のサンプルを周期的な時間間隔で測ることによって、ウラン化合物の最大溶解率は測られた。模擬的な間質肺液でウランを含む各種の塵が分析され、セラミック DU の半減期は平均的に 1170 日とされる。天然ウランは至る所にあるため、ウランの濃縮過程での廃物としての DU は、環境および生物のサンプルにおいていつも天然ウランと混ざっている。クウェートにおける土壌サンプルの分析は、1991 年のペルシャ湾岸戦争以来、DU エアロゾル粒子の循環的再浮遊と降下による永久かつ広範囲な土壌汚染を示す。

[訳注]

[*2] １グラムの 1000 分の１が１ミリグラム、その 1000 分の１が１マイクログラム、その 1000 分の１が１ナノグラム。

[*3] 骨の重さを成人で 20 キログラムとして評価している。

[*4] 肺胞マクロファージに貪食され、マクロファージ自身の運動性により気管支末端に達し、線毛運動によって気管支から咽頭まで運ばれて嚥下され、排出される。吸入粒子が極めて多量の場合には、一部のマクロファージは肺の間質を経てリンパ流に入り、局所リンパ節に至る。一部の粒子は直接、細胞壁から肺の間質に達すると考えられている。（ 参考資料「ディーゼル排気微粒子リスク評価検討会平成 13 年度報告」）

[*5] 肺のクリアランスの速さ（ clearance rate）： 肺がもつ自浄作用によって肺に沈着した粒子が除去される速さ。

試料と分析方法

砂漠の嵐作戦中に劣化ウラン（ DU）を含む砂塵を吸入して被曝したことが確かめられている 11 名のイギリス人、カナダ人、アメリカ人の湾岸戦争帰還兵士が研究に参加した。尿サンプル中の劣化ウランの同位体の定量的分析は熱イオン化質量分析機（ TIMS） で、尿サンプル中の全ウラン量は重量測定から決められたが、これらの測定が行われるまでの８年から９年間、すべての帰還兵士は呼吸器経路で DU エアロゾルからの放射線被曝を受け続けていたことになる。24 時間尿サンプルは U238、U235、U234 と U236 について、カナダのニューファンドランド記念大学地球科学科の放射性同位体施設において TIMS によって分析された。

24 時間尿サンプルを、密封された可塑性の水薬びんに集め、Savillex － Teflon ねじ蓋付の容器

（500ー1000 ml）で重さを量り、100 ml の Teflon（ テフロン製 ）ビーカーで、2 度蒸留された濃縮硝酸４ ml を加えて、80 から 100 ℃で繰り返し（3 回 ）蒸発させ乾燥させる。各サンプルをホットプレート上で規定濃度 3.1 の塩酸に１時間再び溶かし、規定濃度 3.1 の塩酸を加えて、同位体希釈と同位体構成の測定のためにサンプルを２等分する。サンプルの半分については Savillex － Teflon の７ ml びんに移し重さを量る。鉛 208 とウラン 235 のトレーサーをウラン量の同位体希釈測定のための容器に加える [*1]。

塩酸（ HCl）ー 臭化水素酸（ HBr ）ー 硝酸（ HNO_3） の手法の修正版で DOWEX(ダウケミカル社製 ）のイオン交換樹脂（ AGI － X8）を用いて、分けられたサンプルごとにイオン交換 [*2] が実行された。ウランは規定濃度 3.1 の塩酸に溶かされ洗われ、臭化水素酸の手法で抽出され、硝酸に再溶解されてイオン交換樹脂カラムに吸着される。カラムは硝酸で洗われ、水または弱い塩酸でウランが抽出される。各サンプルについて、同位体構成と同位体希釈の測定のために、精製されたウランが集められる。

同位体構成は Finnigan MAT 262 熱イオン化質量分析機（ マルチコレクター付 ）で測定される：２酸化ウランイオン UO_2^+ として分析機にかけ、最大のピーク部分について測定し、計測には２次電子増幅イオン計数装置を用いた。基線は半質量の位置で測られた。イオン検出装置のバックグランド計数は毎秒 0.2 未満であった。第２ピーク部分も同じウランについて解析された。0.95 ピコグラムのウランは、少量だが、全ウラン量から差し引かれた。質量分析は SRM 960 ウラン同位体の標準測定で校正され、統計解析は対応のない場合の t －検定で行われた。ウランの全質量は重量測定解析から決定された。

肺における劣化ウラン量の時刻ゼロでの値は全ウラン量と U238 と U235 の比についての定量的データから決められた。U238 /U235 の比は天然ウランでは 138.9 であるので、この比の値 141.0 で劣化ウラン吸入の有無（ 陽性か陰性 ） を分けた。劣化ウラン量は全ウラン量に劣化ウランの割合をかけて得た。これらのデータは吸入時に肺に取り込んだ劣化ウラン量を数学的に決定するのに用いられる。評価された肺の劣化ウラン量は肺から尿中に排泄された部分であり、劣化ウラン量の時刻ゼロでの肺への取り込み値ではない。肺の劣化ウラン取り込み量は模擬の間質肺液中でのウラン化合物の溶解半減期についてのバーテルのモデルを用いて決められる。

[訳注]

[*1] 同位体希釈分析法：溶液中のある物質の全重量が直接に測定できない場合に、トレーサーを添加しよく混合した後の溶液の一部の重量を測定し、添加前後の比放射能の値を用いてある物質の全重量を求める方法

[*2] イオン交換： 電解質の溶液中で物質が溶液中にイオン（ 電荷をもった原子や分子 ） を放出し、その代わりに溶液中のイオンを取り込む現象をイオン交換という。この作用をもつ不溶性の合成樹脂はイオン交換樹脂と呼ばれる。

分 析 結 果

肺が吸入時（ 時刻ゼロ ）に取り込んだ劣化ウラン（ DU）の全量を逆算するには、24 時間にわたる尿のサンプル中でのウラン（ U）同位体の量の測定が必要であり、そのうちの劣化ウランの分は U ２

３８：Ｕ２３５の比の測定値と天然ウランと劣化ウランでの同位体の比（ 表Ｉ ）とから計算されうる。表Ⅱに、この研究に参加した 11 名の湾岸戦争帰還兵士（ イギリス人、カナダ人とアメリカ人 ）についてのＵ２３８、Ｕ２３５の割合（ **%**）とそれらの比の値を示す。Ｕ２３８／Ｕ２３５の比 141 を区切りとして採ると、６名は劣化ウランの吸入に否定的（ 陰性 ）、５名は劣化ウランの吸入に肯定的（ 陽性 ）と判定される。陰性の６名のＵ２３８／Ｕ２３５の比は 138.25 ± 0.47 であり、陽性の５名の比は 191.00 ± 2.90 であり、対応のない場合の片側の t －検定での p の値は 0.0101 である。

表Ⅲには、計算された劣化ウランの百分率を示す。陰性の６名には（ 0.34 ± 0.64）**%**の劣化ウラン、陽性の５名には（ 36.08 ± 4.03）**%**の劣化ウランが検出された。このときの p の値は 0.00057。表Ⅳには、各人の 24 時間に排出されたウラン量をミリグラム単位で示す。劣化ウランの量はウランの量に各人の劣化ウラン分の割合を掛けて計算した。各人のウラン量は極端に変動しているが、陽性の５名のウラン量は陰性の６名に比べて１桁大きい。他方、陽性の５名の劣化ウラン量は陰性の６名に比べて３桁大きい。これらのデータは肺の吸入時の劣化ウラン量をさかのぼって決定するのに用いられる。

表Ｉ　　ウラン同位体の比

	U238	U235	U238/U235	U235/U238
天然ウラン	99.2739	0.7200	137.88	0.00725
砲弾破片（ 劣化ウラン ）	99.7945	0.2026	492.60	0.00203
尿	99.3778	0.6542	162.23	0.00616

評価された肺の劣化ウラン量は、肺に吸入された劣化ウランのうち尿に排出された部分に対応しているので、最小の評価になっている。

数学的解析を基礎的な半減期方程式から始める。

$$dN/dt = -\lambda N \qquad (1)$$

ここで、N は時刻 **t** での DU 量、λは崩壊定数である。時刻 **t** で積分して、よく知られた式

$$N = N_0 \exp(-\lambda t) \qquad (2)$$

を得る。ただし、**t** は湾岸戦争時（ 1991 年 2 月 ）から尿採取時までの時間、N_0 は吸入され肺に留まった DU の量である。式（１）を式（２）の N に代入して N_0 を求めると、肺での劣化ウラン量の初期値を一日当りの排出率に関連づける式を得る：

$$N_0 = (-dN/dt) \exp(\lambda t)/\lambda \qquad (3)$$

ここで、(-dN/dt)は２４時間尿サンプル中で測定された DU の量である。式（３）の右辺で唯一未知な量は崩壊定数λである。

表Ⅱ　　各人のウラン同位体データ

番号	患者	U238	U235	U238/U235	σ
1	GB	99.2782	0.7145	139.0	0.6
2	PC	99.2570	0.7210	137.7	0.4
3	RGD	99.3154	0.6758	147.0	0.7
4	MK	99.2762	0.7152	138.8	0.8
5	CPL	99.2702	0.7200	137.9	0.5
6	GL	99.6228	0.7189	138.1	0.3
7	KIM	99.4280	0.5663	175.6	1.7
8	PR	99.2742	0.7189	138.1	0.8
9	SR	99.5603	0.4304	231.3	1.6
10	FS	99.4876	0.4945	201.2	5.9
11	AW	99.3862	0.4966	200.1	1.2
陰性		99.3298	0.7181	138.25	0.47
SD		0.1438	0.0026	0.47	
SE		0.0587	0.0011	0.19	
陽性		99.4355	0.5776	191.00	2.90
SD		0.0938	0.1204	31.57	
SE		0.0419	0.0538	14.12	
全体		99.3778	0.6542	162.23	0.39
SD		0.1300	0.1057	24.03	
SE		0.0391	0.0319	7.25	
p		0.0891	0.0297	0.0101	

［訳注］　SD は標準偏差、SE は標準誤差、σ は測定誤差を表わす。
SD は標本分散の平方根で、SE は平均値の標準誤差。
SE は SD をサンプル数の平方根で割った数値 (SE = SD/√ n) に等しい。

表Ⅲ　　各人の劣化ウランの百分率

番号	患者	%劣化ウラン百分率	σ
1	GB	0.67	1.06
2	PC	0.00	0.00
3	RGD	8.52	0.62
4	MK	0.91	0.77
5	CPL	0.11	0.34
6	GL	0.11	0.25
7	KIM	29.65	8.87
8	PR	0.22	0.74
9	SR	55.86	0.57
10	FS	43.28	1.33
11	AW	43.08	0.31
陰性		0.34	0.64
SD		0.36	
SE		0.15	
陽性		36.08	4.03
SD		17.98	
SE		8.04	
全体		16.58	0.32
SD		21.86	
SE		6.59	
p		0.00057	

最小の生物学的半減期は吸入されたウランが肺液中に溶解する時間から決められる。ミシマらは（ バーテルによる ） 模擬の肺間質液中へのウラン化合物の溶解半減期を調べ、60 日間にわたって溶

解ウラン量を測定して、その外挿から半減期を 1170 日とした。しかしながら、これらの著者はデータ中に時刻ゼロで非溶解とされた 1.00%の劣化ウランのデータを含めた。これは測定データではないので、正当ではない。このデータを除いて最小 2 乗法を適用すると、溶解半減期は 1407 ± 27 日（ 3.852 ± 0.075 年 ）となる。崩壊定数λは次の式から計算される：

$$\lambda = \ln 2/T \qquad (4)$$

ここで、T は日単位の溶解半減期である。

崩壊定数の効果を例示するために、生物学的半減期に異なる値を仮定して時刻ゼロと 9 年後に肺に留まる劣化ウラン量を評価して、表Ⅴに示した。時刻ゼロでの評価値は生物学的半減期λの関数となるが、6.24 年で最小となる。最小条件はλ t =1 である。

表Ⅳ　　各人のウラン量データ

番号	患者	ウラン(mg/24 時間)	劣化ウラン(mg/24 時間)
1	GB	1.02×10^{-5}	6.83×10^{-8}
2	PC	1.21×10^{-5}	0.00
3	RGD	1.29×10^{-6}	1.10×10^{-7}
4	MK	3.59×10^{-8}	3.27×10^{-10}
5	CPL	5.45×10^{-7}	6.00×10^{-10}
6	GL	1.42×10^{-7}	1.56×10^{-10}
7	KIM	1.41×10^{-5}	4.18×10^{-6}
8	PR	7.60×10^{-6}	1.83×10^{-8}
9	SR	2.68×10^{-4}	1.50×10^{-4}
10	FS	1.08×10^{-5}	4.67×10^{-6}
11	AW	1.14×10^{-5}	4.92×10^{-6}
	5.11×10^{-6}	1.46×10^{-8}	
SD		5.53×10^{-6}	2.73×10^{-8}
SE		2.26×10^{-6}	1.11×10^{-8}
陽性		6.12×10^{-5}	3.27×10^{-5}
SD		1.16×10^{-4}	6.55×10^{-5}
SE		5.19×10^{-5}	2.91×10^{-5}
全体		3.06×10^{-5}	1.49×10^{-5}
SD		7.90×10^{-5}	4.48×10^{-5}
SE		2.38×10^{-5}	1.35×10^{-5}
p		0.1702	0.1632

表Ⅵには、バーテルの溶解半減期から得られた崩壊定数（ 4.927×10^{-4}/日 ）を用いて評価した肺における時刻ゼロでの劣化ウラン量を示した。時刻ゼロにおいて、劣化ウランの肺に取り込まれた量は陽性の５名では平均で 3.36×10^{-1} ミリグラムであり、全身の天然ウラン量 9×10^{-2} ミリグラムに近い。No.9 の人は天然ウランの 10 倍以上の 1.54 ミリグラムの劣化ウランを肺に取り込んでいた。陰性の６名の劣化ウラン量は陽性の５名に比べて２桁少ない。劣化ウランの加重平均は劣化ウラン量（ ミリグラム/日 ）の和を全ウラン量（ ミリグラム/日 ）の和で割ることで求められる。加重平均は陰性の６名については 0.34%、陽性の５名については 56.44%であり、全体については 19.87%であった。

表V　異なる崩壊定数についての肺の劣化ウラン量

仮定された半減期	崩壊定数	肺の劣化ウラン評価量	肺の劣化ウラン評価量
（年）	（λ/日）	現在（mg）	時刻ゼロ（mg）
2.0	9.489×10^{-4}	0.16	3.57
3.85	4.927×10^{-4}	0.30	1.54
6.93	2.738×10^{-4}	0.55	1.35
10	1.898×10^{-4}	0.79	1.47
25	7.591×10^{-5}	1.98	2.53
50	3.795×10^{-5}	3.95	4.47
75	2.530×10^{-5}	5.93	6.44
100	1.898×10^{-5}	7.90	8.40

24 時間尿サンプル(No.9) 中での劣化ウランの測定値 0.15 マイクログラムに関して t=9 年として計算

[訳注] 1 年 =365.25 日

表VI　各人の時刻ゼロでの劣化ウラン量

番号	患者	劣化ウラン（mg）
1	GB	7.00×10^{-4}
2	PC	0.00
3	RGD	1.13×10^{-3}
4	MK	3.35×10^{-6}
5	CPL	6.15×10^{-6}
6	GL	1.60×10^{-6}
7	KIM	4.29×10^{-2}
8	PR	1.72×10^{-4}
9	SR	1.54
10	FS	4.78×10^{-2}
11	AW	5.05×10^{-2}
陰性		1.50×10^{-4}
SD		2.80×10^{-4}
SE		1.14×10^{-4}
陽性		3.36×10^{-1}
SD		6.71×10^{-1}
SE		3.00×10^{-1}
全体		1.53×10^{-2}
SD		4.59×10^{-1}
SE		1.38×10^{-1}
p		0.1702

考　察

天然に存在するウランは１マイクログラム当り毎分 1.5 個のアルファ粒子を放出する (1.5dpm/μg) どこにでもある元素である――ただし産業上の事故での被曝という状況下では健康障害をもたらすが。一般人は毎日 1.0 から 1.5 マイクログラムの天然ウランを体内に取り込んでいると評価されているが、主に食事に伴う経口摂取であり、吸入による体器官への摂取は無視できる。空気サンプル中のウラン濃度は平均すると、1981 年日本で 0.02ng/m^3（ １立方メートル当り 0.02 ナノグラム）、1970 年イギリスで 0.06ng/m^3 。1967 年ニューヨーク市では 0.4ng/m^3 であるが、ニューヨーク州の田舎 West Milton の Kesselring 海軍訓練所で 1979 年に測定された天然ウラン濃度は 0.020ng/m^3 と報告されている。肺へのウラン負荷量は次第に増大するが、それは吸入摂取量が累積する一方で気管支リンパ節からのクリアランスがゆっくりとしか進まない結果であるらしい。沈着標的器官である骨におけるウラン濃度はイリノイ州の湿った骨で 0.22μg/kg（ １キログラム当り 0.22 マイクログラム）、日本の湿った骨で 2μg/kg 、イギリスで 3μg/kg である。20～60 才の平均的な骨格の取り込み量 6.6μg 、大人の全身取り込み量 8μg はICRP 75 の評価―標準人で 67μg ― より著しく小さい。砂漠の嵐作戦で大気圏に放出された劣化ウラン量についての初期評価 300 万から 600 万グラムは、クウェートの砂漠土中のウラン測定によって最近再考察されつつある。前の戦場での表面から３センチメートルの土層に含まれる劣化ウランの分析が誘導結合プラズマ質量分析機で行われた。その結果は平方キロメートル当り４キログラムの劣化ウラン濃度を示した。したがって、戦場とその周囲 2000 平方キロメートルに８属トンの劣化ウランが降下したと評価される。このことは、劣化ウラン貫通体が想定されていたよりもはるかに高い割合で燃え尽きたか、湾岸戦争では以前に報告されていたよりもかなり多くの劣化ウランが使用されたかを示唆する。クウェートの砂漠土中のグラム当りのウランの測定に基づくと、クウェートだけで劣化ウランのエアロゾル粒子が 10 金属トン生成されたとするのがより現実的な評価である。

吸入された劣化ウランによる内部汚染は、湾岸戦争から 10 年後、４つのウラン同位体の排泄の上昇で証明され、内部汚染の化学的毒性、放射能毒性への関心を高めている。最近の文献は多数あるが、劣化ウラン内部汚染についての論争を招くようなデータを示している。最先端の方法（ TIMS） は吸入被曝後 10 年での劣化ウラン同位体の尿中での有意な過多についての決定的な事実を提供する。論争を招く報告は、諸々の研究にかかわっている帰還兵士の選択や最適ではない次善の分析方法に問題があり、さらに、劣化ウラン内部汚染のウラン経路を全く無視した臓器の分析さえある。これらの論争的報告はコソボ紛争――州の西部に 11 トンの劣化ウラン弾薬が使用されたと評価されている――のような近年軍事的に劣化ウランが使用された地域に及んでいる。不充分なサンプリングはさらなる被曝のアセスメントが必要なことを示唆している。いくつかの報告は劣化ウランの発がん性などの性質を否定し、他は花植物での劣化ウランのホルミシス効果 [*1] を報告している。それとは対照をなして、他の研究はスウェーデンのウランを含むミョウバン頁岩のコンクリート建屋に住む子供に急性のリンパ球白血病が発生する危険を示している。最近のデータは劣化ウラン内部汚染の長期にわたる危険を示し、したがってこれまでの方策の変更を要求している。トマホークミサイルでつくられた劣化ウランエアロゾルが模擬的にガウス型の煙柱をなしているとしてモデル計算を行うと、吸入によるリスクよりも地下水汚染による化学的毒性が懸念される。

ウラン鉱石塵を長期にわたって吸入させ被曝させた実験用ネズミについての最新の研究からは、骨へのウラン蓄積量は軟骨内骨（ 置換骨 ） と膜性骨での変化と連動（ covariant）していることが示され

ている。この内容は、 Sprague Dawley 系ラット[*2] でのウランの吸入被曝による肺への取り込みに関する以前の報告と一致している。人の発がん性と突然変異性に与える影響は、長期にわたる劣化ウランからの被曝の結果として、劣化ウランの細胞遺伝性、突然変異性、発がん性の効果のみならず、劣化ウランがらみの形態変形においても近年報告されている。

現在の文献は一般的に次のことには同意しているようである ； 劣化ウランは突然変異誘発性があり、人の骨を発がん性にし得る、海馬の神経機能に変更を引き起こしうる、胎盤のバリアを乗り越え胎児の臓器に入り込むことができ、劣化ウランの埋め込み後 6 ヶ月ほどでひと腹の子ネズミの数が減少する。さらに、最近では動物で劣化ウラン誘導の軟組織肉腫が見つかっている。未処理で強い放射能をもつ使用済み核燃料を含めて、劣化ウランは拡散しているにもかかわらず、不充分にしか研究されてきていない。さらに、近過去の戦場（ コソボでのトマホーク攻撃地点のような ） での地下水と花のサンプルでの劣化ウラン測定についての相矛盾する報告のため、劣化ウラン論争は続いている。風媒ウランの評価に関する興味深い報告は、有効な生物モニターとしての木の樹皮を誘導結合プラズマ質量分析機で解析すること――近年イギリスや日本からその報告がなされている――が劣化ウランの地下水測定に代わる実用的手法となりうる可能性を示している。

バーテルの実験的モデルにおいては、模擬された肺間質液とセラミックの劣化ウラン粒子との混合物を連続的にかき回し、可溶な劣化ウラン液が各粒子の液体 ー固体境界面で濃度勾配を形成しないようにする。ある帰還兵士の肺では、溶液中にウランの濃度勾配がほぼ確実に存在している。そのため、溶解の速さは遅くなり、肺中のセラミック劣化ウラン粒子の半減期は私たちの評価 3.85 年よりも大きくなるであろう。今後の引き続く研究では、尿サンプルの（ 3 日採取に同等な ）24 時間採取について TIMS の定量的分析を数年にわたり毎年行い、劣化ウランの生物学的半減期を測定する。このことから、劣化ウランを吸入した帰還兵士の一人一人について、真の生物学的半減期の大きさが分かるであろう。

今も軍事紛争で劣化ウランが使用されている現実は、特に吸入被曝に関して、環境と健康への影響に言及することを必要としている――不利な影響を減らすために、もっと整然とかつ適時に。私たちの報告が示しているのは、肺への吸入時点における少なからぬレベルの劣化ウランによって健康障害が生ずる明確な可能性である。

[訳注]
[*1] ホルミシス（ hormesis） 効果： ラドン温泉が自然治癒力を高めるとされるなど放射線が与える生物への有益な効果
[*2]Sprague Dawley 系ラット： 安全性試験など広く研究用に使われるネズミの一系統

初めて明かされる！
サマワ帰還米兵，イラク住民の劣化ウラン被曝

イラクウラン被害調査緊急報告集会

――UMRC アサフ・ドラコビッチ博士講演会 in OSAKA――

編集発行

UMRCイラク・ウラン被害調査カンパキャンペーン事務局

アメリカの戦争拡大と日本の有事法制に反対する署名事務局

〒580-0023　大阪府松原市南新町3-3-28　阪南中央病院労働組合気付

HP：http://jca.apc.org/stopUSwar/　e-mail：stopuswar@jca.apc.org

FAX　072-331-1919

2005年3月7日　　頒価：700円

このパンフレット売り上げの一部はウラン被害調査費用のカンパとしてUMRCに送られます。